

研究紀要 第8号 昭和53年

目次

特集 家庭と学校・その教育における教えと学びの伝統	
脳と教育	平澤 興…3
教えと学びの歴史と伝統	
学校・家庭・教育	保田與重郎…17
家庭と学校・これからの教育	平塚 益徳…24
鼎談・家庭教育と学校教育	近藤鉄雄・戸川猪佐武・堀場正夫…46
特別寄稿 地域改造と自然の報復	石 弘之…52
墨筆談義	羽石 光志…59
国語の勉強室(1)	近藤 達夫…63
全家研・教育対話・その指導と実践	
対話の実際	牛島 斉…70
全家研運動あれこれ	松井 幸雄…72
山梨支部の活動	土屋 享…73
自立心のある人間に	磯田 孝雄…75
教育対話一年の歩み	渡辺 幸雄…76
対話ノートから	山村 律次…78
教育対話ひとすじに	奥田 和良…79
私の母親セミナー	斎藤 久男…81
展げゆく地域社会との交流(4)	
大切な母親の役割	奥井 悦子…83
賛助会員手帳から	甲斐 照子…84
台所からの声	藤井 京子…86
与えられた使命	諸岡 英子…87
若い芽を信じて	加藤ケイ子…88
ポピーと歩む	栗原 松江…90
励ましの言葉と共に	三好磨智子…91
働くお母さんに代って	波部 信子…92
二十年後の日本を	池上さち子…93
良きモニターをめざして	池満 久代…94
会員の和を求めて	中村比沙子…96
関係資料	98~112
財団設立趣意書・寄附行為・事業報告・事業計画	
全家研設立趣意書・規約・教育対話主事名簿	

脳と教育



全日本家庭教育研究会は、昭和53年度新参画・教育対話主事会を、5月13、14日東京、17、18日京都に於て開催しました。その両会場に於ける平澤興先生の記念講演は、参加者に深い感銘をあたえました。依って、ここにその速記を再録して、大方の御参考に供します。

このたび、新しく教育対話主事に、御就任になりました各位に、きょう、ここでお会いできることは、大変、私としても、うれしいことでございます。

全家研の仕事については、だいぶ、いろいろ印刷にもなっておりますので、皆さんもうすでに、大方は御理解になっておられると思います。

教育には実に、多種多様の面がありますが、皆さんは、小学、中学等々の教育については豊富な御経験をおもちなのであります。私は、子供は非常に好きでありましたし、いまでも好きであります。いつも、笑い話のようになるのであります。私が若い時から、自慢で

特に自己の構成、克己の本質、抑制の問題等について

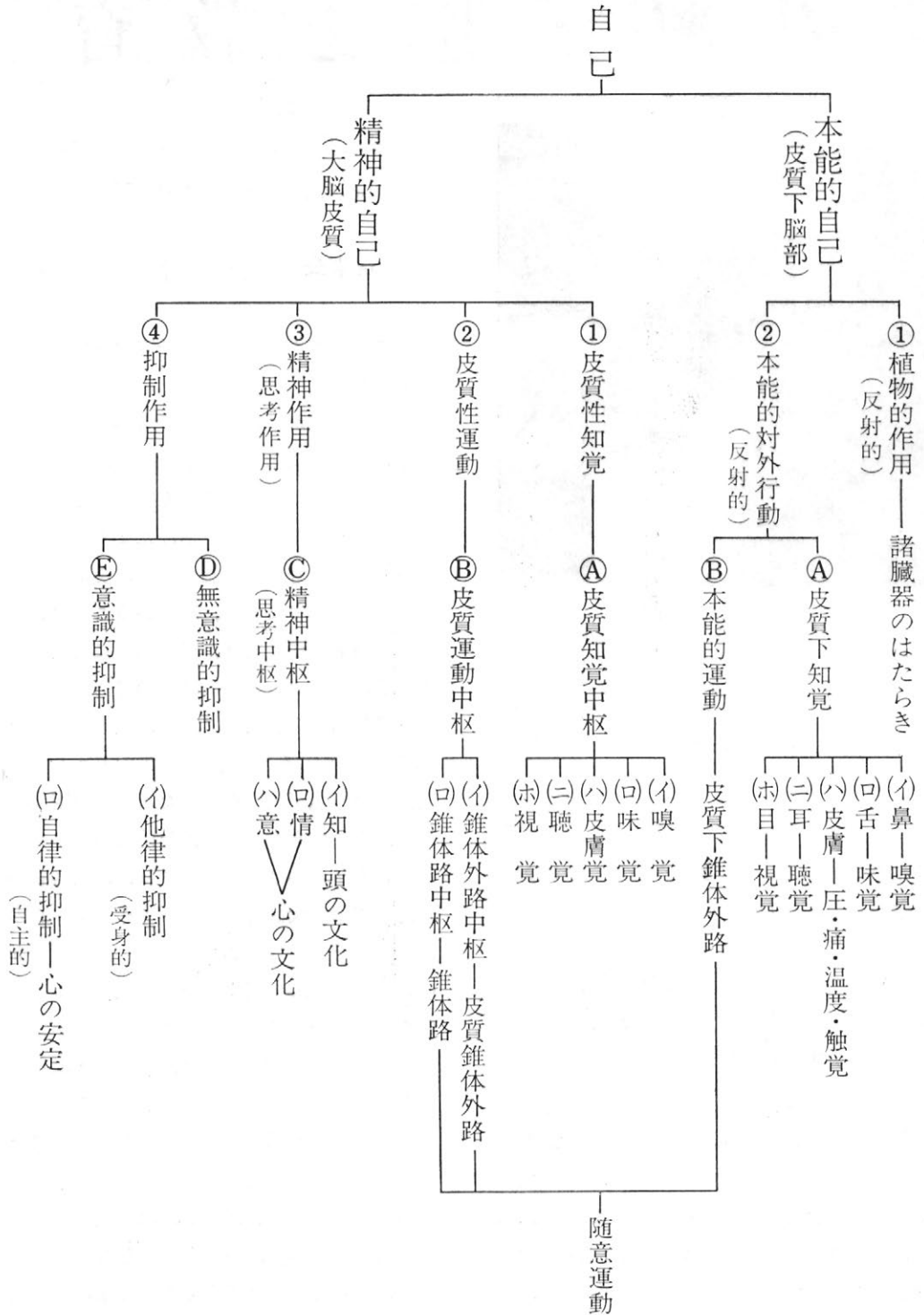
理事長 平澤 興

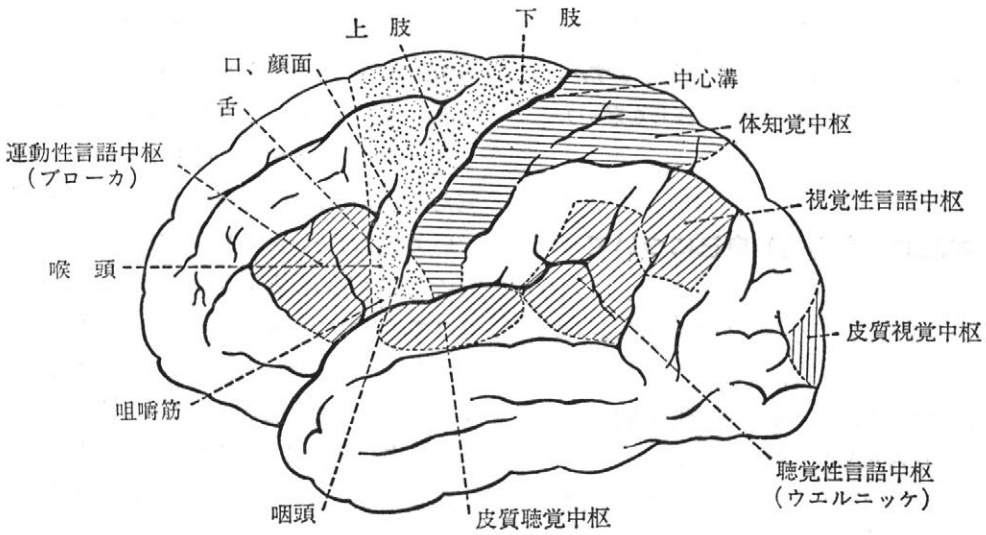
きることと言えば、まあ、子守ぐらいのものであります。

子守は、確かに、小学校の時からうまかったし、また、欧米の留学中なども、クリスマスなどには、あまりたくさん招待状をもらいまして、うれしい悲鳴をあげたようなことであります。子守の自慢話ならば、実にたくさんあるのであります。そういうことは、きょうは略します。まあ、私が本当に自慢できることと言えば、それ位のものであります。

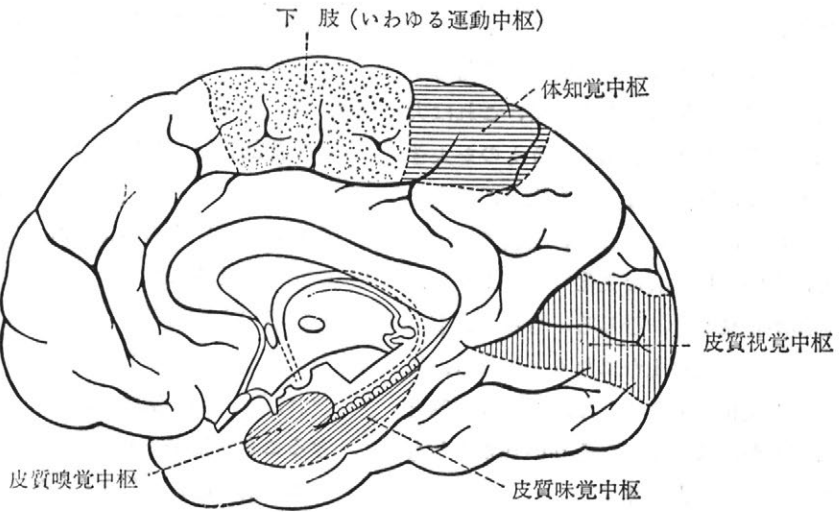
私は、新潟医科大学に20年、京都大学医学部に20年、ちょうど40年、大学にりましたが、新潟では、私が大学をやめたら、私を園長にして、どこにもまけぬ立派な幼稚園をつくらうという話がありました。これは、当時新潟の財界では、大御所ともいうべき方が、腹の底から、そういう話をしておられ、「それは面白い。大学をやめられたらやりましょう。」ということになっておったのであります。なかなか、人生というものは、思うままには行かないものであります。しかし、その後、どうしても京都大学へ帰らねばならんことになり、これは物語に終わりましたが、もし私が新潟におったとすれば、これは実現したであります。私は、いま申しましたように、まあ、特長と言えば子守ぐらいのもので、残念ながら、そのほかのことには、あまり自信の

第一表 自己の構成





第1図 大脳皮質にある諸中枢 (外側面)



第2図 大脳皮質にある諸中枢 (内側面)

の部分は、いわゆる運動中枢で、主として錐体路を出す錐体路中枢である。但しこの部分からも一部は錐体外路をも出している。錐体外路中枢、及び抑制中枢は書き入れてないが、大脳皮質の広範囲に亘っている。思考中枢はだいたい白い皮質部。

ない人間であります。

そういう私が、幼児教育、初等教育、中等教育などに、長年の経験を持たれる皆さんの前で、何か、そういう関係の話をするということは、大変おこがましいことではありますが、その点は、どうぞ、ひとつ、お許しを願いたく存じます。

本能的（動物的）自己について

私の専門は、脳でございます。人間の一番大きな特長はと言えば、すばらしい脳の発達と、それによる、たくましい可能性を持つ文化的能力だろうと思うのであります。

きょうは、脳を中心として、教育の基本的なことを二、三述べたいと思います。特に目立つことは、このごろは過保護の時代で、自分で自分を修めるとか、自ら自分を抑制して、自己を掌握するというふうな教育は、あまりなされていない、ということであります。

その教育は、日本において弱いのみならず、世界的にみても同様でありまして、これは大きな問題であります。文化というものを大きく分けますと、科学的な頭の文化と、情意的な心の文化とに分けられます。狭義で文化というと、大体、科学的な文化であります。文化全体から見ると、むしろ、もっと大事なものは、科学的文化の土台になるところの、情意的な心の文化でありまして、これは道徳とか、信仰とか、芸術とか、そういうふうなものをも含む文化であります。

教育でも、いまは、一番基礎になる、心の文化がおろそかにされ、知識に重点がおかれすぎておるのであります。しかも、その知識に重点がおかれておると言うが、ものを深く考える、ということよりも、知識の外形や、外観だけに重点がおかれるような教育であります。

ものを知っていると云いますが、ただ暗記をしているようなことで、実は、そういうものは、きびしくいうと、純粋な知識とも言い兼ねる、知識のかすであります。知識は、日進月歩止まないものでありますから、ものを考えるという、そういう能力を身につけるのならいいのであります。過去のものを、ただ覚えていてだけのもの知りでは、ものを知らないよりは、いいかもしれませんが、たいしたことではない、と思うのであります。

さて、だれでも皆、自己をもっておりますが、その自己には、本能的な動物的自己と、もう一つ精神的自己とがあり、本能的自己の本部は皮質下脳部に、精神的自己の本部は大脳皮質にあるのであります。動物には殆んど本能的自己だけしかありませんが、動物でも高等になると、多少は精神的な自己も加わるのであります。

人間の生活は、動物的な自己と、精神的な自己との絶えざる競争だと思えます。それは子供の時はもちろん、老人になっても、そうであります。

本能的自己、動物的自己と申しますと、とかく、ただ下等な自己のように考えられていましたし、いまも考えられていますが、これは実は、そうではないのであります。いかなる聖者でも、君子でも、仏でも本能的自己のない人はいないのであります。本能的自己がなければ、内臓が働けず、従って人間として生きることが出来ません。すべての人間にとって本能的自己は、絶対に必要なものであります。

本能というものは、今日もなお学問的には、充分には解明されないもので、生物学における最大の問題の一つであります。例えば、なぜ、子供が生まれると、すぐ母親のお乳が吸えるのか、などということはわかりません。

乳を飲む働きは、牛の子が飲むのも、豚の子が飲むのも、人間の子が飲むのも、同じようなことであります。この本能の働きは、生まれながらにして与えられておる、能力であります。

きょうも、ありがたいことに、胃袋も、心臓も、またその他の内臓も、みな、うまく働いていますが、これは全部、本能的、動物的自己に属するものであります。

(以下、第一表を参照)

本能的自己は、さらに大きく分けるとその一つは、①反射的な植物的作用であり、他の一つは、②本能的対外行動であります。内臓の働きは、すべて①の植物的反射作用であります。脳の病気で精神的自己がだめになりますと、この植物的作用だけの、植物人間になり、生きてはいるが精神作用は全くだめになります。

②の本能的対外行動は、鳥が飛ぶとか、とまるとか、というような本能的な、動物的行動でありまして、本能的対外行動であります。

④の皮質下知覚といいますのは、皮質下脳部にその本部のある知覚で、例えば動物が、目は見えるけれども、それは、食物をさがすとか、敵がきたら逃げるとか、仲間がきたらとんで行くとか、そういうものであって、人間がものを見て、それが何であるかとか、を考えるような、そういう感覚ではないのであります。動物の感覚には、人間におけるように、見たものは何かというような、考える感覚はないのであります。ただ、見たものが食べられるものなら、それにとびつく、魚が泳いでおって、他のものが食べにくると逃げる、そういうふうに働くので、人間におけるように、見たものを考えるということはないのであります。

次に⑥の本能的運動であります。鳥がうまく枝にとまったり、空を飛んだりしており

ますのも、考えてやっておるのではなく、生まれながらに与えられている、本能的のものであります。人間の子供が生まれてすぐ、乳が飲めるのも同じく本能であります。しかし、乳を飲む運動は、きわめて複雑な運動で、決して簡単ではなく、おとなでもむずかしい運動であります。それが、不思議にも、生まれながらにして、考えなくとも、練習しなくとも出来る本能的運動であります。本能的運動は、すべて考えてやっておるわけではなく、全く本能的に与えられておるのであります。

とにかく、本能というものは、その内容から見ると複雑で不思議なものでありますが、すべて、生まれながらにして与えられている、ありがたいものであり、人間の生命も生きるということ自体は、実にこの本能的活動のおかげであります。

ですから、そういう意味で、本能的自己も、生きること自体に対しては、絶対に必要であります。しかし、本能のままに動くだけでは、まだ人間とは言えないのであります。

人間が人間として立派に生きるには、どうしても、考えて行動する精神的自己が必要であります。この精神的自己が本能的な自己を適当に調節して使いながら、精神的自己の完成を目ざして進むのが人間であります。本能的自己を利用はしておるが、これにとらわれないのであります。しかし、これを無視は出来ません。よく己に克つなどといいますが、これは人間の精神的自己が動物的、本能的自己に克つことであります。これは我々人間が、一部は動物的、一部は精神的な生活をしておるからであります。動物的本能のままでは、とても望ましい人間にはなれません。脳のほうでみますと、精神的自己の中核は、大脳皮質、即ち大脳表面に位置し、本能的自己の中核はそれよりも下の脳部、即ち皮質下脳部に

あるのであります。

精神的自己

人間の脳は、すばらしく発達していますが、特に精神的自己の中枢がある大脳表面、即ち大脳皮質の発達は驚くべきものであります。この大脳表面の発育は、他の動物と比べると、問題にならないほど、すばらしい発達をしているのであります。この大脳表面だけに約140億の神経細胞がありますが、これは、ウィーン大学のエコノモ博士の研究によるものであります。大脳表面の140億の神経細胞は、我々人間には生まれた時既に与えられているのであります。しかし、これらの神経細胞は、生まれた初めから全部働ける状態にはなっておりませんが、必要に応じて次第に成熟して参ります。細かい問題になりますと、まだ、現在の学問でも、いろいろ分からぬ点が残っておりますが、10歳ぐらいになりますと、大体、ほとんど、おとなと同じぐらいまで成長するのです。特に注目すべきことは第一に、この140億の神経細胞が、すべての人間に用意されておるといふこと、第二に世界の天才でも、この140億の神経細胞を全部使った者は、まだ一人もいないといふことであります。これがいままでの研究成果であります。これはいろいろの事を暗示します。平凡な人間なら、大体どのぐらいの神経細胞を使うのか、まだ正確のことはわかりませんが、大体4割ぐらい使えば、普通の人間のやることぐらいは、何とかやれるようであります。凡人とか偉人とかと申しますが、これは、実は、先天的にきまっているというよりは、与えられた140億の神経細胞を、いか程利用したか、否かの問題であります。これには、広い意味で環境は大きな意味を持つでしょう。家庭とか、

職場とか、あらゆるものを含めた意味での環境であります。

例えばある子供を考えてみても、その子供がいつどこで、勉強をすることに、よこびをもつようになれたか、遂にそういう機会に恵まれなかった、ということは大きな問題であります。

普通の人が考えるように、生まれた時から、神経細胞が違っておって、甲はだめ、乙はいい、というふうな考え方は神経学的な立場からは、どうも無理なのであります。そうではなくて、凡、非凡の差はこれらの神経細胞を、宝のもちぐされ式に僅かしか使わないか、否かということにあるのであります。

頭の働き方にはいろいろの型があり、例えば、のみ込みの早い頭、記憶のいい頭、連想の広い頭、のみ込みはおそいが深く考える頭等々があります。これらの型は、同じ両親から生まれたきようだいでも、いろいろ違います。

知能検査は、ある程度たよりになりますが、決して絶対的のものではありません。例えば、知能検査では、人間の忍耐力とか、意志力とか、努力とか、そういうものは出てこないが、しかし、実際に人の生涯を決めるのには、何が大事かと言うと、知能検査や学力テストで測りうる知力や学力よりも、むしろ忍耐力、意志力、努力といったような性格的のものが大きかろうと思うのであります。

皮質知覚中枢と皮質運動中枢

大脳皮質には、いろいろの本部があります。即ち、皮質性の知覚、運動、思考及び抑制等の中枢があるのであります。

①の皮質知覚中枢とは何かというと、これは判断力を持つようになった諸知覚の中枢で

あります。きれいだな、きたないな、これは
たいしたものだな、これは何かと考えるよう
になるのは、大脳皮質の知覚中枢が出来てか
らであります。これは更に進めば思考中枢と
連絡して、哲学的な意味までも考えるよう
なるのであります。

皮質性の知覚には、嗅覚、味覚、皮膚覚、
聴覚、視覚等がありますが、このうちの嗅覚
と味覚は、感覚としては最も本能的で、植物
的作用に関係の深い感覚であります。皮膚覚
や聴覚、視覚などには、人間になると、すば
らしい飛躍の発展がありますが、ここではそ
の詳細は略します。

次に、大脳皮質には④皮質運動中枢があり
ますが、これは更に錐体路中枢と錐体外路中
枢とに分かれます。本能的運動は、大脳皮質
がなくてもできるのであります。随意運動
は大脳皮質がなくては出来ません。

随意運動は、これをうまくやるには、どう
しても熟練がいりますが、それは随意運動の
中に、随意的要素のほか、不随意的要素が
あるからであります。

随意運動には、実は二つの要素があるので
あります。

その一つは、錐体外路という運動神経であ
り、もう一つは、錐体路という運動神経であ
ります。いま、手を上にあげようと思えば、
すぐ自分の思うとおりになりますから、いか
にも、すべてが随意的に行われる運動のよう
に思うのであります。今から50年ほど前ま
では、学界でも皆そう思っておったのであり
ます。手が、自分の思うとおりになるので、
結果的には、たしかに随意運動でありませ
うが、しかし、この運動のすべてが随意的
に行われているのではなく、このいわゆる随
意運動には、随意的な要素と不随意的な要
素があるのであります。随意的な要素は錐体路に

よる命令であります。しかし、命令を出し
たあとで、いくつの筋肉がどのように参加し
て運動をするかということは、我々の知らぬ
間に錐体外路と呼ぶ神経によって、世話され
るのであります。

つまり、随意運動のうちで、随意的に筋肉
に命令を出すところまでは随意的で、錐体路
がやるのであります。知らぬ間に多数の筋
肉で運動そのものを行行するのは、錐体外路
という神経であります。

ですから、簡単なような手の仕事も、実は
大変なことなのであります。これは直接命令
を出す錐体路と、楽屋裏でちゃんと運動の世
話をする錐体外路の協同作業があって初めて
できるのであります。

つまり文字通りの意味の随意運動などとい
うものは、ないのであります。

ある種の脳の病気になると随意運動の二つ
の要素の協調が出来なくなり、例えば、手
をあげると命令は出せるが、錐体外路がだめ
になって、手をあげることができないような
ことがあります。舞蹈病なんかも、そういう
例の一つで、これは、命令が出ないのに、錐
体外路が勝手に動くので、踊るような格好に
なる病気です。考えてみると、手を一つ動
かせるのも、平凡なことではなく、まこと
に、ただごとではないのであります。

今の子供は、鉛筆削りもできないなどと言
われますが、これは、その練習をしていない
からであります。どんな随意運動も、うまく
やるには、練習が絶対必要でありまして、練
習をしなくてもうまくできる運動などは、ま
ず、ないのであります。

皆さんは、外科医になるには、手先が器用
なほうがいいと思われましょう。これは、常
識であります。事実はそうではないのであ
ります。俗人を驚かすには、手先の器用なほ

うがけっこうであります、外科の名人というものは、器用な人からは出難いそうであります。これは、大変大事なことを暗示する、重要な事実であります。

例えば、両手が使えて、盲腸の手術を5分でやる。そんな評判をとって流行っている医者がありますが、そんなことに感心するのは、愚かなことであります。真の医師にとって最も大事なことは、100人でも、200人でも、絶対に一つもミスを犯さないということで、5分とか10分とかいう問題ではありません。器用さは、それ自体としては、無器用よりもよいことですが、恐ろしいことは、器用な人は、器用さに溺れることです。それで基礎的実技の習得を充分やらぬ場合が多く、器用さに溺れて、我流にやるのであります。

しかし、一つの手術にも、それぞれ長い道程があり、その手技には、先輩諸士の苦勞と学習とが含まれており、みだりにその型をくずしたりしては、ならぬのであります。

無器用な人なら、うまいことやろうと思っても、できませんから、勢い、先輩の型をよく守ることになります。天下の名医に、あまりいわゆる器用人がいないということは、大いに、心すべきことであります。

精神(思考)中枢

第三として、大脳皮質には、いわゆる思考或は精神中枢がありますが、これは、人間で最も発達したものであります。恐らくこれは、脳に与えられた各種の情報をもとにして、総合的に考える部位で、主として、知的に働くものと思われませんが、やはり、情的、意志的にも重要な関連を持つものと思われま

しかし、今日、比較的良好にわかっているのは、大脳皮質と知的の面で、情的、意志的の

面との関連の詳細は、なお、今後の問題であります。

抑 制 作 用

第四に、大脳皮質の抑制作用について考えてみたいと思います。大脳における抑制については、従来あまり注意を払われていませんが、教育的には極めて重要なことだと思

大脳皮質の作用は、主として興奮性、積極性であります。そのほかに抑制作用、即ち止めるほうの働きもあるのであります。これは大別して、無意識性の抑制と意識性の抑制の二つに分けることができます。

表の⑩の無意識的抑制というのは、例えば、膝の反射に対する抑制などであります。医者が膝を叩くのは、身体の興奮状態が、どうかというのを見るためであります。大脳皮質からは、我々にはわかりませんが、絶えず身体の興奮を抑える働きが出ておるのであります。だから、健康な場合は、膝を叩いても、足先はあまりあがらないのであります。神経衰弱とか、あるいは、脳溢血などになると、ちょっと膝を叩いただけでも、ひどく足先があがるのであります。これは、大脳皮質の働きに変化があり、健康時のように抑制作用がきかないからであります。

次に、⑪の意識的抑制作用というのは、やっではならぬというようなことを、自主的且つ意識的に止める働きを言います。例えば、酒飲みの人が、あまり飲んでではならぬと、自ら止めるようなことであります。

しかし、小さい子供などでは、お菓子は食べすぎてはならぬ、というようなことは、わかりませんから、自主的な意識的な抑制はなく、親のほうから他律的に、子供から言えば

受身的に、抑制をさせるほかはありません。

意識的抑制には、幼時の他律的受身的の抑制と、もう一つは、自分で進んでやる自主的な意識的抑制とがあります。また、精神的自己で、本能的自己をおさえるなどということも、やはり意識的抑制作用になるのであります。

昔の教育と今の教育とを較べますと、昔の教育は、まず、自ら抑制して、がまんをするということ、理屈でなく、身体で教えこんだのであります。例えば、大工の親方へ、大工仕事を習おうと思って、奉公に行っても、初めはノミやカンナの使い方などは教えず、1年とか2年は、専ら、掃除をしたり、風呂を沸かしたり、そんなことばかりさせられました。だから、とかく馬鹿らしくなって、逃げ出す人も多かったわけでありました。

この間、ある新聞に、博多人形づくりの名人の話が出ておりましたが、この人は、3年目に師匠の家から逃げたのであります。ところが、家に帰ったら、父に、こっぴどく叱られて、また、戻ったのであります。叱られて戻ったのですから、これは他律的抑制であります。

しかし、その時から、やっと少しずつ本人も、やはり、がまんとせねばいかんのだなど、というようなことを感じるようになり、次第にがまんの修業をしたというのであります。

いろいろ調べてみますと、名人と言われておるような人でも、修業時代は、2年も3年も、仕事については何も教えられないで、風呂沸かしばかりをさせられては、いやになって、よく逃げて帰ったりしたのでありますが、その家庭が、しっかりしておるか否かで、後の運命がきまったような例も少なくないであります。

昔は、ものを教える前に、先ず忍耐とか、抑制とか、そういう、人間の一生にとって一

番大事な心構えを教えたのであります。その心構えがしっかり出来れば、何事も辛抱づよくやれるわけで、これは今日から考えても、大いに参考になることと思います。

子供の場合でも、子供の言う通りになるのではなく、いけないことはいけないとして、他律的な抑制を加えるのが大切であります。子供の躾は、充分、学問的にも意味のあることだと思えます。

同じようなことをさせていても、真に人間というものを理解しながら、承知の上で、弟子に厳しい躾をしておる師匠と、そうではなくて、ただ弟子を道具のように使う師匠とでは、その結果には大きな違いがあらましよう。

昔のやり方に感心するものがあるとしても、今日そのままやれ、ということにはならないと思えますが、神経学的に考えても、辛抱とか抑制には、よき習慣形成に充分な根拠があり、叱るべき時には叱り、がまんとすべき時には、がまんとさせるということが、極めて大事だと思えます。

いまの教育では、知情意の中で、知的なものが主になり過ぎ、情とか意とかの面は、疎んじられがちになっているのであります。情意の教育をどのように、小さい子供にやるかについては、いろいろの方法があらましようが、いまの子供は、一般に、甘やかされており、どこの家庭でも、昔のような厳しさはないようであります。

しかし、出来れば、1歳・2歳・3歳ぐらいから、ある程度、忍耐とか抑制を教え得れば、そのほうが、ただ甘やかすよりは遙かに賢明であらましよう。教えるといっても、とても理屈で教えることはできませんから、やるべからざることをやった時には、むしろ体罰的に、叩くとか、つねるとかして、反射的に子供に苦痛を与えるほうが、よいかと思

ます。

このことは、実際問題になると、相手の子供の条件にもよりますし、いろいろむずかしい点もありますが、しかし、世界的に成功した実例があります。

他律的抑制——ヘレン・ケラーのこと

それは、目が見えず、口がきけず、耳が聞こえぬ、いわゆる三重苦のヘレン・ケラーの例であります。彼女は、生まれつきの不具者ではなく、生後19か月目ぐらいに、重い熱病にかかって不具者になったのであります。

7歳までは親のほうでも、何しろ片輪の子なので、不憫さが加わって人一倍かわいがり、ヘレンの思うままにさせておいたのであります。だから、機嫌の悪い時には、食事の最中でも、食卓にあがり、そこらじゅうのものを投げとばすようなことも決して珍しくなかったのであります。だから、人間の子というよりは、むしろ動物の子でありました。そんなヘレンに、7歳の時、サリバン先生が見えたのであります。

世界の歴史上、偉い先生はたくさんおられますが、しかし、サリバン先生こそは、人の師として、最も偉い方だろうと、私は思います。サリバン先生は、人というよりも、むしろ、神の仕事をなされたのであります。その時、先生は21歳でした。

サリバン先生がおいでになって、ヘレンの様子を見ると、人間の子供ではない、まったくの動物であります。とても、どうにもならないので、先生は両親に、

『しばらく両親と離れて、ヘレンと私と2人だけで、別棟で暮らすことをお許し願えませんか。』

と相談されました。その時の母親の態度が

実に立派でありました。父親は、サリバン先生が、あまりきびしいので、

『あんなきびしい先生は、断ろうじゃないか。子供がかわいそうだ。』

などと言って、はじめはむしろ反対でありました。

ところが、賢明な母親は、深くサリバン先生を信頼し、

『いえ、あなたはそう言われますが、サリバン先生は、まことに立派な方であります。サリバン先生の言われるとおりに、お願いしようではありませんか。』

といて、先生の申し出を承知したのであります。

調べてみますと、ヘレンと先生の別棟生活は、僅か2週間ぐらいなのです。その間に、動物のような子が、りっぱな人間の子に生まれ変わったということは、全く驚くべきことであります。

ヘレン・ケラーの伝記は、アメリカで映画になって、日本にも参りました。皆さんの中でも、ごらんになった方もあると思います。私はアメリカで見ましたが、しかし、今お話ししましたことの、一番大事な部分は、どうも、映画では充分ではなく、忽ちうまくいったようになっておりますが、実際は、そう簡単ではなかったと思うのであります。

どういう方法がとられたか。叩いたり、叱ったり、いろいろ体罰を与え、肉体的な痛みを与えたことは、確かでありますが、具体的に詳しいことは分かりません。

理屈を言っても分からない子供に、分かってもらうには、肉体的苦痛を与える体罰もやむを得ません。しかし、僅か2週間で、動物の子が人間の子に変わったという大きな変化は、全く驚くべきことであり、これがヘレンの一生に、決定的変化を起した最初であります。

ヘレンは、16歳で、目が見えず、口がきけず、耳も聞こえない、そういうままで、ケンブリッジ女学校という、ふつうの女学校に入り、24歳でラドクリフ大学を優等で卒業するのであります。もちろん、すべてが指話を通してであります。サリバン先生は、ヘレンのあるところ、どこでも、いつでも、常に一緒にあり、文字通り一心同体であります。家に帰って、ノートを整理する、辞書をひく、予習をする、全部一緒にあります。想像すらできません。

三重苦の人が、普通の大学を出たということ自体が、20世紀の一大驚異であります。しかも、優等で出ておるのであります。正に人類史上の驚異であります。

とかく世人は、すぐヘレン・ケラーを天才として取扱いますが、これは適当な考え方ではないと思います。むしろヘレンは、人類史上での最大の努力家の一人であって、彼女の如く努力すれば、誰でもが、大学ぐらいは、優等で出られると思います。

ヘレン・ケラーを天才扱いにするのは、日本だけではなく、アメリカでも同じです。ヘレンの目・耳・口の役目をしていたのは指で、その指は、特別な指だろうと、スタンフォード大学の生理学教室で研究をしておりますが、その結果は、普通人とちっとも変わりがなく、触覚自体は、普通人よりも、むしろ悪いぐらいでありました。ですから、その指に特別のものがあるという説も、生理学的研究によって否定されておるのであります。

ヘレン・ケラーは、要するに、天才とか、特別のものをもった人ではなくして、人類のなしうる、最大の努力、最大の燃焼をした一人であります。

燃えて生きる —— 山下清君のこと

私は、燃焼の極端な例として、よく、日本の山下清君、精薄児の山下清君の例を出すのであります。ヘレン・ケラーという人と、精薄児の山下清君を同列に扱うのは、無礼ではないか、という人もあるかも知れませんが、私は、少しも無礼だとは思わないのであります。

山下清君は、精薄児ではありました。しかし、彼はやがて、式場隆三郎医学博士の指導によって、むずかしい理屈はわかりませんが、絵をかくことに燃えたのです。全く、燃えたのであります。

私が、まだ、京都大学医学部の教授をしておりました時に、山下清君が研究室へ訪ねてきました。弟と新聞記者が1人、3人でした。

そして、「ひとつ、勉強のために、解剖学の標本を見せてくれませんか。」というのであります。実は、解剖学の標本は、学問的には非常に興味がありますが、何しろ、素人には見きれいだとか、おもしろいかいというものではありませんから、素人には見せないことにしているのであります。しかし、どうしても、山下君が勉強のために見たいということなので、見せることに致しました。30分間ということで、標本室へはいりましたが、結局は、3時間半かかりました。

標本室では、私は全く感動をしました。私の人生における、最大の感動の一つでありました。初め、胃袋から描いていきました。

『これは、胃袋です。ものを食べてこなすところです。』

と説明する。分かったような顔をしているが、5分ぐらいたつと、また聞く。

『これは胃袋やな。』

『ああ、胃袋や。』

『ものを食べて、こなすところか。』

『ああ、そうや。』

それで分かったかと思うと、そんなことを何度も繰り返しました。初めの間は、なるほど、精薄とは、こういうものかと思ったのでありますが、さて、いよいよ、彼が写生を始めた時の表情というものは、実に素晴らしいものであります。大学院の優等生よりも、もっと素晴らしいものであります。一杯飲んだような、赤味のさした表情をして、眼は、全く燃えております。一つぐらい殴っても、分からんんじゃないかと思ったぐらいであります。なるほど、精薄の山下清君と画家の山下清君は違うんだ。私は感動をしました。

実は、その日は会議があったのでありますが、私用に会議を延ばしたのは、40年の大学生活中、ただこれが1回だけあります。その日は結局においては、私自身が深く教えられたのであります。文字通り彼は燃えておるのであります。式場隆三郎君という人が火をつけて、彼を燃やしたのであります。あの燃えておる姿は、ヘレン・ケラーと較べても、ちっとも変わらぬだろうと思うのであります。

山下君は、精薄でありますから、恐らく、大脳皮質には、140億の神経細胞は、なかったらと思うのですが、しかし、それでも、あれだけの絵がかけるのであります。だが、徹底的の写実で、この写実的な絵を、抽象画的に、と言われても、それは彼にはできません。ものを抽象化するというふうな思考作用は、彼にはないのであります。

この山下清君のことは、私の生涯でも、最大の感激の一つでありました。山下君の燃える姿も、ヘレン・ケラーの燃える姿も、学問的には一つであって、燃えるということによ

って、我々は生来与えられている神経細胞を生かすことができるのであります。

天才とか、凡才とかいうものは、恐らく本質的な差異ではなく、考え方とか、生き方とか、努力のし方の問題だと思います。ノーベル賞をもらった湯川さんとか朝永さんなどを見ましても、いわゆる学校の優等生ではありませんが、いつでも、クラスの上の部であります。本人も家庭も成績などというものを、あまり問題にせず、楽しんで勉強するということに、焦点をおいておられたのであります。

自律的抑制——足立文太郎先生のこと

ヘレン・ケラーの例で、サリバン先生がヘレンと二人で、しばらく両親と別居をしたということは、正に他律的抑制の典型であります。こうした他律的抑制が、どのくらい効果をもつかということは、そのやり方と子供の性格などで違いますが、幼時期のある時には、必ず、そうした他律的抑制が必要であるということは、はっきりと言うことができます。

自律的抑制は、子供が次第に大きくなって、自らものを考え、自らを制する力ができてきて、初めて可能になるもので、一人の人間として自立するには、絶対に必要なものであります。これによって人間は、自分が自分に規制を加えて、断乎として、わが道をゆくのであります。

私が心から尊敬をしております、足立文太郎先生なども、そういう方であります。

先生は、人間血管系の肉眼的研究では、正に世界の第一人者であります。先生は、学問も酒も、本当に好きでありましたが、飲んだ時などは、そのエネルギーを学問へということで、夜を徹して勉強されたのであります。

ところが、その先生も50歳になられた時、よほどしっかりせんと、一生のうち、血管系の研究も、まとめかねるのではないかと考えられ、酒は1日100cc、但し、お客のある時は例外ということに、奥さんと共に決められたのであります。

好きな酒も抑制して、精神的自己を生かそう、学問を生かそうと決心され、それを実行されました。しかし、どうにも飲みたくなされると、助手などを客として連れて行かれました。そして、その時は、必ず玄関で大声で、

『ああ、きょうは、お客さんだぞ！』

と言われるのであります。きょうは、いくらでも飲むぞ、という意味でありましょう。いかにも、それが自然でありました。

抑制もいいですけれども、はち巻をした窮屈な抑制ではなく、そこにユーモアとゆとりがあるのです。そうした抑制は、実にすばらしいと思います。しかし、これは誰にでもできることではないでしょう。だから、先生は、どんなことがあっても、悠々たるものであります。自らを抑えるけれども、そこに、何か、自然が残されております。

自律的抑制——心の安定

自律的抑制即ち自主的抑制が、完全にできるようになれば、おのずから、心の安定も生まれ、それができれば、おのずからゆとりも喜びもでるわけであります。

さきほど申しましたように、大脳表面には、140億の神経細胞が、すべての人間に与えられておるのですが、まだ、天才といえども、それを全部使っておらないのであります。しかし、おそるべきことには、世界には、現在、どの国にもノイローゼというふうな、心の不

安定な状態が起っておるのであります。こういう状態が起きては、与えられた神経細胞を使う前に、まず、身体がまいってしまい、せっかくの宝も充分利用することができません。

ノイローゼなどという病気は、知情意の中の、情的な面、意志的な面の訓練が充分でないために起るもので、こういう不安定状態では、与えられた無限の可能性も、大半その意義を失ってしまうのであります。

現在は、子供に対しては、確かに過保護の時代かと存じます。しかし、これも激しい交通事情、社会悪などのために、ある程度、やむを得ぬ面もあるようです。だが、よく考えると、それだけ、子供自身に、自分に対する抑制力を持たせることが極めて大切だと思います。

もし子供が、自分を自分でおさえる力、抑制力や意志力を充分持っておれば、子供は、苦しい時にもがまんができて、進むべき道を進むことが出来ますから、いわゆる不安定状態にはならないのであります。

ところが、過保護で、甘やかされて育った場合には、自分で自分をおさえるような力が全然なく、ちょっとした、つまらないことでも、すぐ、まいってしまい、心の安定を失って、ノイローゼになるのであります。

だから、小さい時、若い時に、できるだけ抑制力、忍耐力を養うということは、みずから心の安定を与えることにもなり、非常に、大事なことであります。

全家研の祈り

これから、皆さんは、子供さんや親御さんなど、いろいろの方々にお会いになり、教育相談を受けられるのでありますが、なかなか簡単に解決できない問題が多いかと思えます。

なぜなら、子供よりも、むしろ親のほうの問題点を取り除くことが大切なのですが、実はそれが非常に困難だからであります。親は子供だけが問題だと思っておりますが、むしろ、これは本末転倒が多いのであります。親のほうの原因、家庭における原因などを取り除いて、親子もろとも進んでゆくことが出来れば、歩き出しも容易ですが、なかなか、そうはいきません。

ですから、何よりも先ず心のゆとりが大切で、あまり急いではなりません。すぐ何とかうまくいくということは、嬉しいことではあります。むしろ、それは例外で、うまくいかないほうが多いかも知れません。しかし、一生懸命やってみてもうまくいかないと、何もやらないでうまくいかないというのでは、大いに意味が違います。だから、私は、全家研というような組織には、大きな意義があると思うのであります。

そもそも、この全家研の運動は、理屈っぽい話で始まったわけではなく、母の苦勞への讚美からスタートし、少しでもそれを軽くしたいというような気持ちから始まったのであります。

私は、新潟県の片田舎の生まれであります。私の母などは、もちろん、英語だとか、そんなものを読めるような時代の人ではありません。しかし、母の歩んだ生涯を見ますと、年をとるほどに、いよいよ心うたれるものを感じ

るのであります。そして、お母さんは、大事なものだ、ほんとうに御苦勞だ、何かちょっとでもお母さんの、お手伝いができないものかな。そして、子供たちをよくしたいものだ。そんなような思いが、いろいろと重なって、全家研が生まれたのであります。

大きな夢は、決して捨てないが、しかし、決して急いではなりません。急いでノイローゼになるようなことでは、全家研は、とても大成はしないと思うのであります。大切なことは、しくじっても、しくじっても、夢をもちながら、祈りをもちながら、進むということです。

全家研の最高の憲法は、皆さんの熱意と良心と深い知性です。

まだ述べたいことは、いろいろありますが、今日はこれで話を終わります。

ありがとうございました。

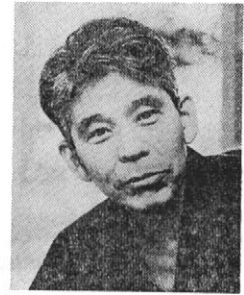
〔講師紹介〕 医学博士、京都大学名誉教授、日本学士院会員、第19回日本医学会総会会長、新学社総裁、財団法人日本教材文化研究財団理事長。

〔略歴〕 明治33年、新潟県に生まれる。大正13年、京都帝国大学医学部卒業、同大学解剖学教室助手、助教授、新潟医大助教授を経て、欧米に留学。昭和5年、新潟医大教授。21年、京都大学教授、附属医学専門部長、教養部長及び医学部長を歴任。26年、日本学士院賞（錐体外路系の研究による）。28年、武田医学賞。32年12月、京都大学総長。38年退任、名誉教授。42年、日本学士院会員。42～43年国際ロータリーガバナー。45年、勲一等瑞宝章。52年、医学教育功勞賞。

學校・家庭・教育

——偏向を嫌ふ皇朝の學風——

保田與重郎



近頃は、色々の知識が豊富になつてゐる。生徒も學生も、さうであらうが、就學前の幼児の知識の多彩さに、驚くのである。さうして、時々かういふ子供が成長した將來社會はどうなるかと思ふ。よいか悪いかわからぬのは、過去に經驗がないからである。

戦前の一時代には、小學校へ入る以前に、文字を教へることを嫌つてゐた。小學校の方がさういふ方針だつた。初めて文字を習ふといふことに對する一種の感動を、嚴肅な形で與へようとしたからでなからうかと思ふ。正しく書くといふことへの教育的配慮もあつたのであらうが、その根柢には無意識に、文字に對して精神的な畏敬の思ひがあつたのであらう。これは舊時代の思想の影響かとも考へられる。

文字は特權階級が民衆を支配する力の一つとしたといつた議論は、明治の文明開化以後、現状反對派の説によく云はれた。しかしわが封建時代に於ては、必ずしも學問を特權階級の占有とする考へ方は濃厚でなかつた。戰國時代が終り、太閤の天下統一の後には、和漢の古典の刊行が次々に行はれた。江戸幕府となつて、學問の獎勵はしきりになされた。民をして知らしめずといふならば、學問をすすめるべきでない。文字を知り、古典を學ぶといふことは、政治に對する批判の根據を與へ、

又さうした思想發生の原因となる。江戸の五代將軍は經學を好み、江戸に京風を入れやうとし、六代將軍は實證の學問をひろめ、八代將軍は實學を重んじ、思想の學を抑へる傾向であつた。

わが國人は、王仁博士の儒學傳來の上古から、寛容の民族であつた。異國渡來の物品を選択して珍重したが、思想を受け入れる點でも極めて大様であつた。この點隣大陸の人は、自己を中華と自尊し、四方の異國を蠻夷として遇し、その物品は受け入れたが、思想に對して排他だつた。現在の我國の讀書人は、大體として東洋の精神文明が西洋に勝るといふ内心をもつてゐるが、それによつて西洋文化を輕侮するところはない。隣大陸の讀書人は、今日も内心で、自國傳統の精神文明から、西洋文化を輕侮してゐると思はれる。わが國の和魂漢才といふ輕快な處生法に當るものは、彼の歴史にはなかつたやうである。それはそれとして一つの見識であるが、四隣平等、人倫不偏の上で、つき合ひにくい見識である。個人としての人は、人といふ點でつねに自然なものである。わが皇朝の學風は、元來に於て偏向がなかつた。自然な人といふ實體のあり方と、人のつくつた學問や思想や宗教に偏向することとは、分別しておくべきである。奇怪なものとなつた今日の進歩主義を、素朴な

人間の根源にひき戻すといふことは容易なことでない。つねに新しく、さうして實現されない言葉は、自然に歸れといふ格言である。一般の近代の知識の中では、自然といふことが悟達できないのである。あまりに單純にして無垢なものゆゑ、理解できないといふことは、人智の不幸であり悲劇である。

明治以前の日本の教育

内村鑑三氏は外國の宣教師から、日本に近代の學校制度が行はれない明治以前には、どのやうにして教育が行はれてゐたかと質問された。内村氏は、日本の母によつてなされてゐた、家庭教育があつたと、丈高く誇りを以て答へた。

日本に於ては、近來の學校制度の以前に、學校に代る教育機關があつた。全國にゆきわたつてゐた寺子屋は、近代の産業革命の初期に於て、わが國の文字を解する子女の數を、世界の最高においてゐた。男子にて半數以上、女子はその割合やや落ちるが、これは英國マンチエスター市の倍にあたる高い割合である。十八世紀末の江戸に於て、婦人の寺子屋教師が、全體教師の約三分の一に近かつたということは、文明普及の密度からして、驚くべきものである。全國の寺子屋の數は、大小併せて、義務教育施行後の學校の數と、數のうへでは匹敵した。これらの寺子屋の仕組と別に、封建諸侯は藩校をもつてゐた。

寺子屋の上には學塾があつて、ここには歴史に残るやうな儒者もゐて、旨として修身平天下の政治哲學の理想を説いた。大坂では、今日いふところの公開の大學講義が行はれてゐた。しかし、大坂の蘭學塾であつた緒方氏の適塾では、士人以外には入門を許さなかつた。

文字の讀み書き及び算數を教へた寺子屋の以外に、遊藝の師匠、稽古事、藝能作法の教授所の存在が、教育上に重大な影響を與へた。わが國の都會の演劇は、その出現した時に、殆どが古典を大衆化するといふ建てまへのものだつた。田舎の祭禮で行はれた藝能にしても、その始つた日に、古典だつた。幕府の御用役者の能樂を、幕府は獨占したのでない。どこかの山村の祭禮で行はれることに、何らの干涉もなかつた。そしてこの事情は、千三百年以前の萬葉集以來のものにて、その始まりは千何百年以前にあつた習俗かわからぬのである。これがわが朝廷の御歌所の傳統にて、藝能二面に於けるこの事情は、平安時代の史實に見える。

豊太閤の恩顧をうけた藝術家は無數であつたが、彼らは通常の國際概念にいふ御用作家とは性質を異にしてゐる。皇帝のみが行ひうる祭禮といふものは、わが國にない。これはわが國の祭祀の信實である、即位後始めての大嘗祭、即ち年々の新嘗祭に新穀を上つて天津神を祭ることは、天皇陛下の特權でなく、すべて國中の民が同一に行ひうるところであり、自ら進んで行はねばならぬところである、この意味から、わが國の古神道にはタブーといふものがない。それにあたる言葉がないのである。上古は國家、社會の生活に於てタブーがなかつたのである。今日は教育問題に於てさへ、タブーが少くない。御歌所に於て、君臣貴賤を區別せず、和歌は神ながらの道とされ、これをしきしまの道となへ、國本と考へた。神の道と考へたのである。このことが平安末期から教へとして意識されるやうになつたのは、所謂武士の起りといふ文明變遷の風潮の中で、國本來の文明の理念を教育もし、さらに後代に傳へようといふ思ひが、誰彼と

ない國人の心の中におのづからに芽生えた風潮だつたのである。和歌に於ては、現世の貴賤の差別がないといふ、傳統思想を、連歌俳諧にまでひろめたのは、戦國末期の風潮の産んだところにて、これに格式をつけたのが後水尾院の勅許となつてゐる。連歌俳諧の本願はしきしまの道を一般民衆に親しませようといふところにあつた。この俳諧も和歌勅撰に準じ扱ふといふことは、わが佛教各派寺院が、勅願寺の認可を得ることに努力したことと似てゐる。その意圖を云々し批判するよりも、さういふ事實そのものを、わが國の社會人心の水平線で考へることが歴史の學びでは大切である。

上代からの學藝の傳統

江戸時代は、元和偃武五十年にして、所謂元祿時代の文明出現するのである。學問、文藝、美術に於て、一せいに出現した偉人の群は、驚嘆すべきわが國史上の壯觀であつた。そして日本の武士道といふものも、この時代に思想として樹立されたのである。明治の乃木大將、佐久間艇長の如き武士道の權化たる人々は、元祿の武士道精神の象徴にて、この兩者に勝る武士道の龜鑑たる存在は、源平時代の鎌倉武士の中に一人もないのである。この元祿時代を區分として、この頃から往時の武藝に代り、學問が立身出世の一つの方便となる。五代將軍の好學とは別に、經濟の發展と幕府の官僚制度化から、政治經濟の學問を修めることが、出世の道となつた。その頃より少し以前に於て、俳諧連歌師は如何なる貴紳とも同座しうるといふことから、僧侶となつて立身出世するよりも、俳諧師たることが出世の近道と考へ、僧より轉じて俳諧師となり、その願望をとげた人の逸話もある。こ

れは、人心藝道の墮落傾向を示すが、片方風雅の傳統のしきしまの道の在りし姿を示してゐる。江戸幕府の學藝の獎勵は、思想に於ても、文學美術の面でも、君に君ある國の眞姿を考へさせ、大義名分を明らかにして、王道霸道を分つといふ、幕府否定の根據を他方でひろめたのである。皇朝の風雅といふ、もののはれの情緒は、人間性の本姿にて、この文藝の復興が幕府權力の根柢をゆさぶることとなるのは、大近松の心中物の影響に極まつた。近松は反幕府の意識をもつたのでなく、人情の眞姿と歴史の信實を、極めて自然に描いたのである。觀念のイデオロギーを顯示したのでなく、人の自然をあはれに美しく描いたのが、人心をさますのである。

わが國の學校の制度は、奈良朝の以前からあつた。聖德太子が百濟から歸化した味摩之が傳へた吳の伎樂舞を御覽になつた時、これを我國でも行はうと思召されて舞臺を作り、その舞を習はずための學校を建てられたといふ史實が、日本書紀などに傳へられてゐる。少子部のスガルの面白い話も、小學校のおこりのやうな物語である。雄略天皇が宮中の女性に養蠶をさせようと、スガルにコ（蠶）を集め参れと命ぜられたのを、スガルはコを人の兒と思ひ違ひし、小兒を集めてきた。スガルは天皇の命で、宮の垣の外に長屋をたて、その子供らをここにて教育したといふのが、歴史的な逸話となつてゐる。

奈良朝時代には、都には大學があり、地方には國の學校をつくつてゐる。各貴族の家でも一族の子弟のための學校をたてて獨自の教育をしたが、平安時代になると、その門を開放する貴族も出てきた。圖書館はすでに奈良時代に建てられてゐる。空海のたてた學校は、今日にまで連綿とつづいて、今も大學として

京都に残り、宗門以外の學生もここで學んでゐるのである。比叡山の法華大會廣學堅儀は、大學の卒業試験のやうな形式を残したものだ、その儀式はまことに精神の嚴肅を極め、威儀の美しさ、近代の大學の制度の中へ、その精神の片鱗でもとり入れて欲しかつたものと思つたことである。法華大會は、叡山で教學の傳統が途切れんとした時、南都の學僧を招じてその教學を再興した時以來今につづく傳統行事である。南都や叡山は、學校としての性格をもつてゐた。すぐれた學僧が住し、多數の書籍教典を藏してゐたのである。

伴林光平翁はもと眞宗の僧であつた。南都で因明を學ぼうとしたが、當時の眞宗は一向一揆以來の習性を嫌はれてゐて、南都の大寺は眞宗の僧の入室を拒んでゐた。光平翁は掃除人といふ名目で、藥師寺の書庫に出入することを許された。光平翁の同志の林豹吉郎氏は大和宇陀の鍛冶職人だつたが、國事に志を立てて、大坂の緒方塾にて蘭學を學ぼうとしたが、士以外の入門を許さなかつたので、炊夫となつて奉公し、ひそかにぬすび學びに、蘭學を修めた。後に砲術を修め諸侯に招かれたが、天誅組の義擧に加はり大砲をつくつた。林氏は年少にして學問を修め、大義を悟り、風雅にふかく、書畫に於ても一家をなしてゐる。彼の製圖した大砲の設計圖が、その書畫とともに、葛籠一杯に遺されてゐるのを見て、私は深く感銘したことがある。

應仁の亂頃には、戰亂の京都を避けて地方に下る公卿が少くなかつたが、それらの人々は地方の豪族に被護されて、學藝をひろめた俳諧連歌師の一段上で、所謂しきしまのみちを各地にさかんにしたのである。上杉謙信が陣中にあつて、その子の習字を検し、評語を附してゐる如きは、また心うたれるものであ

る。當時の豪族の雄たる人物は、京の公卿を家庭教師の如くに招いてゐる。わが國の學藝は、千年に餘る貴族世襲によつて、公卿の家の學として傳へられた。平安京以來の貴族世襲の朝廷の制は、支那歷代の科擧による人材登庸の制と異つてゐた。世襲は沈滞する如くであるが、學問史實に於ては必ずしも輕率の斷定は出來ない。文明の保持繼承といふ點で、いづれがよいか輕々に論じ得ない。わが國の勅撰和歌集の文明や、源氏物語は、わが朝廷の公卿の世襲によつてうまれた文明である。

鎖國時代の學藝と文化

江戸時代の鎖國による、國內文化の充實には驚くべきものがあつた。契沖、芭蕉、大近松などと、海外發展時代の港を封鎖した直後に出現した人々の業績を考へるだけでも、今日の私には気の遠くなるやうな思ひがする。如何なる條件に於て、如何になせば、かつての文明の榮光の再現が可能なるか、といふことに今私には何の思案もない。近代開國すでに百何十年にして、日本人はどのやうな文藝美術を後代に残しうるのであらうか。町繪師の描いたわが國人の世俗の美術が、近代西洋世界に及したやうな驚異の感激を與へるものが、開國以後の文物の中に果していくばくもあるであらうか。私は何かあることを信じ、生れることを信じ、しかし今日、それをこれと指し得ない。鎖國時代の好奇の學人が、長崎出島を僅かにもれる西洋の光に、まぶしく目をこらしたさまには、心うたれるものが多い。幻燈寫眞によつて、西洋の圖を憬がれた時代の、明治の少年から、最も近代風の大詩人や大藝術家が生れたのである。西洋の土を踏んだ人たちでない。幻燈寫眞で西洋を心象にまで高めた人々が、最も斬新な近代を、

我々に與へてくれたのである。

舊時代の鎖國を、當時のわが國の知識人は、道徳の見地から肯定してゐた。世界市場を争はない、土地の侵略をあへてしない、それは戦争をせぬといふことであり、これが鎖國の念願だつた。開國が利益繁榮につながることを知つてゐるが、そのためには西洋の近世史のやうに、必ず戦争といふものがつきまといふことを知つてゐた。それゆゑ利といふ繁榮と贅澤を思はず、よし貧しくとも、人互につつましく、平和に暮さうではないか、といふのが鎖國の道徳であつた。幕府の役人は、當時世界中で行はれてゐる戦争の實状は知らないが、年中どこかで戦争の行はれてゐる事實は知つてゐた。繁榮と贅澤のために、さういふ生活をしたくないといふのが、鎖國の願ひだつた。しかしこれは、戦争に敗けるといふ理由からでない、西洋人と戦争をしても、勝つ自信はもつてゐるうへでの判断だと、當時の幕府の役人が云つたといふことが、日本の捕虜となつた露國の提督の幽囚記に書かれてゐる。もともと鎖國の原則では、外國人と一切接觸せぬとしてゐた。この原理からは、西洋の軍人が海岸に上陸してくれば、わが海邊防備の武士は、ただ逃げるだけしかなかつた。侵略者を海邊で撃退してもよろしいといふのが、海防論であつた。この海防論が、輿論として、さらに政治方針としても認められた次に、攘夷論に轉じたのである。

出島をもれる西洋の光に好奇心を燃やしてゐた舊時代の人々の心を思ひ起しつつ、私は幻燈寫真によつて西洋にあこがれた少年の日から生れ育つたわが國の最も近代的な文人藝術家のことを考へた。開港の日が來て、どつと海外へ赴いた人々は、女性も交へて、驚くべき數であつた。しかもさらに驚くべきこと

は、彼らは大方が精神の光をめざし、高い文明の地を夢見て旅したのである。それは千年昔の求道僧が、生命の危険ものかは、唐宋へ大海を渡つた思ひと同じだつた。しかし千年昔、渡唐、渡宋の高僧が輩出し、佛の教がひろまつたのにくらべて、西洋の宗教教學はどのやうな流布と影響を及したか。明治の最大の基督者にして、最も尊敬すべき教師だつた内村鑑三氏は、教會制と宣教師の風儀に敢然とした強烈な批判者となる。

内村氏が、外國宣教師に對して、わが國には、近代の學校制度の思ひ及ばぬすぐれた家庭教育があつたと宣言した時には、上古以來のわが國の教學の制度など、何ら問題でなかつた。それとは別個の、教育の信實のものを考へてをられたのであらう。わが國の家庭の母は、子供に宗教の教學教理を教へることに熱心でなかつたが、その暮しの行儀作法の中で、宗教の情緒を體にしみつかせた、と内村氏は云ふ。奈良時代のあと平安時代を通じて多數の高僧が出現してゐる。そして教學論議の上で優秀な僧は少くなかつた。それらは當時の國際的基準で最もすぐれた思想家だつた。しかし、わが國の家の子供らが教へられ、うけついできたものは、學術の進歩と関係ない昔の人心の自然のものだつた。その情緒は生命の自然がもつてゐるやうな性質のものであつた。一言でいへば、ものあはれである。生活の日常にそれを感じるやうに、子供はそだてられてきた。その方法も仕組も近代の學校の體系には入つてゐない。たまたま心美しい教師の個人的影響ということがあつたが、これは期して得るにむつかしいものである。しかし我々の經驗では、さういふ教師に出會ふといふことは決して少くはなかつた。小學校時代に心のうつくしい先生に遭ふことは、その

子供の生涯の幸福だつた。これは組織の上から與へる方法はない。今や本人の運不運である。しかし本人の運不運には、うけ入れる心の支度にも問題がある。家の教へしつけの風儀が、多大な作用をしてゐる例が多い。家風はいく世をへて成るものでもある。

心の消沈してゐる子供が、たまたまよい先生の担任をうけたことによつて、その心が生れかへつたやうにいきいきとなり、心も魂も大きく成長したといふ話を以前は多くの家庭の人からきいたことだつた。それは皆にうれしい話である。その子供はおのづから學業にも興味をもち、それがうれしいことと思ふやうになる。そのよろこびやはげみから、いつか感謝といふことを知る。人の今生に於ける最高の幸福は、尊敬することを知り、感謝の心をもつといふことにつきるのである。諸悪慾望を無くせよとの、難題を押しつけるまへに、慾望を思はない心の平常状態をつくることの方が、少しやさしいのである。互に行ひ易いのだ。ある時代のわが國の家庭では、さういふ方向におもむく心術をはぐくむ感情の教育が、非常に廣範圍になされてゐた。内村氏はさういふ家庭教育の姿を思ひ描かれたのであらうと、私は思ひ定める。

關東大震災以前と以後

近代の學校教育が普及してからの家庭の變化は、關東大震災以後、昭和改元頃が、大きい區劃のやうである。高等女學校の教育が普及した頃から、女子會話や料理から情緒が失はれた。會話の言葉が標準語的知識的になつたことや食品營養學の普及は、針仕事の放棄と相俟つて、まさしく進歩といふものであるが、それは情緒と感情の自然を失はせる進歩だつた。

舊時代の家庭では、その言葉は、自慢と感謝が合體したやうな、情緒のものだつた。國土の美しさを讃める言葉は、國土の自然を造られた神々に感謝する言葉と一連だつた。神々とは造物主だ。この神々を親たちだと簡単に答へる感情をもつてゐた。この幾千萬年の親々を象徴に抽象する論理は、その生活の事實に較べると、さして高尚な意味があるわけでない。

私は第一次大戦後の小學校の教育をうけたのだが、この頃から舊來の家庭は、新制度の學校教育によつて、顯著な變化をうけ初めてゐた。日本に學校制度が行はれぬ以前の、家庭の情緒的雰囲気はかなり變化し始めてゐた。私の町の小學校では、自學自習を主旨とし、ダルトンプランといふ方法を唱へてゐた。當時の日本では最尖端の小學校だつた。教室の机は、そのプランの方法によつてならべられ、それは國定教科書に描かれた教室の様式でない。教科書に描かれた教室では、生徒の机は、教壇に向つて整然と並んでゐたが、わが小學校の教室では、教壇に對して背を向けた机もあつた。生徒同志で眉をよせ集めるやうな形に、八人程の机を集めてならべた。小學校教師の好奇心の實驗だつたやうに思ふが、町の人々も大いに共鳴してゐた。大正時代の自由主義の氣分の産物だつたに違ひない、かういふ雰囲気の結果として、後にわかつたことの一つだが、私らの一代前の生徒は、小學校、中學校と進みつつ、暗記暗誦に努力させられたが、我々の時代にはそれがなかつた。暗記よりも理解が大切だとする考へ方だつた。一代まへの生徒は、古典の詩歌美文や聖人の語まつ暗誦させられたが、私らの學校時代はそれが空しいことのやうに教育された。古典の詩歌美文や聖人の語を簡単に理解出来る

とすることは、高慢心の思ひあがりである。進歩主義者の通弊である。私は後年、一代前の學生が、唐詩などの長篇を暗んじてゐることに非常に驚いたが、歳漸く長ずるに及び、彼らが酒席で盃を傾けつつ楚辭などを延々と微聲で吟じつづけるやうな時、今生の一つの思ひのここにあることを悟り、羨望に耐へない。舊時代の暗誦の教育は、人間の文明あつてこの方の、根柢の人間の情緒を心に植ゑつけるものであつた。それは知識でなく、知識以上に尊く高尚で楽しいものを、情緒として心に植ゑるのである。

最も正しい教育といふものは、二つが兩立すべきだらうが、學校の教育以上に家庭の情緒教育が大事といふことは、内村氏に限らず、多數の近來の先賢の後世への遺言とされたところである。また人の各々、應分の人生の經驗をへて、苦難も哀歡も、程々に受けとつた晩年に、その最後に思ひいたるところは、幼時の教育への感謝であり、それは代々をへてきた親々への感恩となる。人生の目的とか、人の生甲斐について、人は今生にて、少くとも一度は考へるところである。すべての學問の終點ともいふべきものである。幸福論を素朴な形で、人間の自然の情に従つて考へる學問が、ギリシヤにあり、近代で薄らいだのは、人心が不正直不自然になつたからである。今日の世界中の後進國の目標が、近代化計畫と云ひ、アメリカのやうな富裕と贅澤と、經濟の繁榮と、強力な軍備を、自らも持つことに、國家全體の目標をおいてゐることは、如何やうにも空しいことであり、人心に立戻れば、さびしいと思ふ、さびしさの思ひに耐へない。

宗教の教學を知るよりも、信仰の情緒をく

らしに即してもつてゐることの方が大事だ、といはれた先人の感慨は、教育の何であるかの根本をわきまへた人の言葉である。日本人はキリスト教徒のやうに罪をつぐなふために、神社佛寺に詣でない。極樂往生を願ふといふ目的をもつて、佛寺に詣でる人は案外に少く、大多數の人々は、ただ何ともない心安らぎのために、社寺に詣でるのである。正月の初詣の大群衆にしても、誰もが自分を自分もしようといふ氣分で、それをするによつて、心が安らぎ、ひいては心魂太り、生命が新しくなつたことを感じる。これが自然の人のこころであり、むしろそれ以上のことを知つて何があるかといひうるものである。普通の日本人は、誰も神の僕であると思つてゐないが、拙者も遠御祖の神の子だと威張ることは、誰にも出来たのである。すでに大震災前の大正時代にも、渡來の異教を信ずるゆゑに、神社を拜がまぬといふ者がゐた、その家の子は學校の修學旅行に神社參拜がある場合、必ず不參した。さういふ子供は何かにおそれてゐた。それは潔癖でなく、不自然な偏向である。心を閉すことは、日本の常人にとつて自然だつた寛容の氣風から、自ら離れてゐる。さういふ人は我と世間をかたくなにしてゐるのである。

〔筆者紹介〕 当財団理事。国学、文明評論家。主な著書、「日本の橋」(昭和10年第一回池谷信三郎賞)、「戴冠詩人の御一人者」(昭和13年北村透谷賞)、「後鳥羽院」(14年)、「萬葉集の精神」(17年)、「現代崎人伝」(39年)、「山の辺の道」(48年)、「大和長谷寺」(40年)、「日本の美術史」(43年)、「日本の文学史」(47年)、「保田與重郎選集」(46年)、歌集「木丹木母集」(46年)等がある。

家庭と学校・これからの教育



国際的展望の中で思うこと

平塚 益徳

はしがき

全日本家庭教育研究会の名古屋支部では、同地区内の各支部が連合して、去る6月10日、市公会堂に国立教育研究所長・平塚益徳先生を招き、教育講演を開催しました。

「家庭と学校・これからの教育」と題するこの講演会は、かねて国立教育研究所長の要職のほかに、日本ユネスコ国内委員会、日本及び世界比較教育学会の各会長を兼ねて、国際的にも大いに活躍しておられる先生の講演とあって、当日は、早朝10時からの開会にもかかわらず、会員のお母さんがた、ならびに賛助会員、約600名が参集して、2時間にわたる講演を熱心に聴講し、主催者側を感動させました。ここに、その速記を再録して、広くご参考に供します。

(文責記者)

ただ今は、大変ご丁寧なご紹介いただきまして恐縮に存じます。土曜日の午前、いろいろとお差し繰りいただきまして、かくも沢山の方がお集まりいただいておりますことに対して、私はまず敬意を表したいと思います。

これから、与えられました時間、これからの日本の教育をどうすればいいかということ、私なりに考えておりますことを皆様方にお話し申し上げるといよりも、むしろ現在の私の気持ちをそのまま率直に申しますならば、訴えるというほうが強いわけです。訴えたい。何か少し思い詰めた言い方で恐縮でございますが、本当に私は心配しているのです。

日本の教育が現在のままでいいのかということ、これはおそらく皆さん方も思い当ることが多いかと思えます。私は、教育について一生懸命勉強させていただいております一人として、心配しております。

大変失礼なことを申しますが、どうぞお許しいただきたい。私、昭和3年に大学に入りました。おそらくここにいらっしゃる絶対多数の方々、まだお生まれになっていないときです。ちょうど今年で50年です。もちろん遅々として進みませんけれども、終始、私なりに勉強させていただきました。例えば、昔の大学は、大学に入りまして3年、その前に3年の旧制の高等学校がありまして、大学の学部は3年でございました。私はこの3年間、今思い返しましても大変良かったと思えます。悔いのないという言葉をあえて使わせていただきますが、運動ももちろんいたしました。しかし私は真剣に勉強させていただきました。どういう勉強をしたかという、教育の根本の問題を勉強させていただきました。

当時は、大学の主任の先生のお許しを得なければ卒業論文が書けないという、指導体制の大変厳しい時代でございましたが、私の恩師はそれこそ日本の代表的なりっぱな教育学者で、今も私は心から尊敬し感謝いたしております。その先生はご自分のお考えの中に少し、キリスト教というものをきらいな……こ

れはまあいたし方のないことですが、そういうお考えの先生でございました。私は元来キリスト教徒なのです。私は、卒業論文をキリスト教の教育の根本の考え方から勉強させていただきたいということで、「旧約聖書」を材料として卒業論文を書こうと思いました。ところが先生が「そんな古いものをやる必要はない」と反対されたのです。

反時代的な研究と考察

皆さん方をご承知かどうか存じませんが、1933年にドイツはヒットラーの天下になったわけですが、私が卒業論文を出したのは1931年です。ヒットラーがああいう全体主義的な独特な教育の考え方でみんなをしめつけて、そして、ドイツだけが世界で一番いいというような極端な考え方でだんだんとドイツをまとめていった、ちょうどそのさ中に、ドイツでいわゆる御用学者が出てきたわけです。ヒットラーにおもねる、ヒットラーをおだてるというような学者が出てまいりまして、これは世界的にも有名な学者で、今でも私はよく覚えています。クリークとかポイムラーとかいう学者が次々に、教育の哲学の本をお出しになった。私の恩師は、大変面白い本が今ドイツでどんどん出ているから、そういうのを取り上げて、ひとつ卒業論文にしたらどうだ、というお話がありました。然し私は生意気にも、先生はそうおっしゃってくださいるけれども、私はぜひ、私の希望といえますかお願いで、教育の根本の問題から勉強させていただきたいということで、「旧約聖書」というキリスト教のバイブルの一つですが、それを材料にして教育思想の研究を進めるということのお願いをいたしました。ところが最後に先生は「私はもう知らん。そんなにやりたければ勝手にしたらいいだろう」

と、いわば突き放されてしまいました。

当時の学生が先生からそんな扱いを受けるということは大変な寂しいことでしたが、私はしかし、いつかわかっていたかと思うておりました。先生はこうおっしゃったのです。「旧約聖書」なんてそんな古いものを勉強しなくて、今の教育の問題を一生懸命勉強すれば、その方がむしろお役に立つのだからというお考えで、私に、いま申したようなお勧めをなさったわけです。然し私は、それもいかしいけれど、私は少なくとも教育の根本の問題から、ということで、いわば先生にたてつきまして、そのあげくが「勝手にしろ」と突き放されたわけです。

それで私は一生懸命勉強しました。ヘブライ語という古代ユダヤの言葉を私なりに勉強いたしました。そうして、現在でも使われておりますが、「旧約聖書」を、誤訳ではございませんが不十分な訳を、私なりに一生懸命勉強して、その不十分なところを直して、その「旧約聖書」における教育の根本の考え方をまとめて、学部の卒業論文として先生に提出致しました。

そうしましたら、私は夢にも思わないことでしたが「よせ」と言った「そんなものはだめだ」と言われた先生が、その論文を高く評価して下さいました。これはなかなかよろしいと。そして「本にしてやろう」とまで仰言して下さいました。これは例外中の例外でした。3ヶ年の学部の卒業論文を本にして出版、つまり学界に出そうというわけです。私はその本のお陰で、学界に受け入れられて、大学院に入って勉強させられました。そして広島的高等師範学校、昭和10年代に九州帝国大学の教授に招かれて、戦後は九州大学の教育学部の創設という大役を、失礼ですがその重責を負わされました。当時九大では教育関係で

はたった一人の教授でした。それなのに学部をつくるという責任を負わされたのです。そして、今からちょうど15年前に、ただ今の国立教育研究所に招かれまして今日に至っているわけです。

注目される日本の教育

戦時中も私は中国に勉強に行っておりました。北京に行って、中国の教育の歴史を勉強してこいということで、当時の帝国学士院の先生方が非常なご好意で私に奨学金を出して下さいました。当時私は、中国の教育関係のある本を出しましたら、これだけの本を内地で書くならば、現地に行ってもっと勉強してこい、ということで、戦時中、中国に勉強に行くことを許されまして、お陰で徹底的に勉強させていただきました。そして今日までに私は、30数回海外の大学、あるいは研究所、国際会議に招かれて、日本の教育の講義なり講演なり、あるいは報告をさせられました。

実はちょうど一月ほど前に約1ヶ月間ほど、ソ連を始めとして東欧諸国に行ってまいりました。これはユネスコの国際会議に招かれまして、ブルガリアのソフィアに出張し、そのついでにいろいろな国を経巡って、ちょうど一月ほど前に帰ってまいりました。

いまご紹介いただきましたように、私たちの国立教育研究所には、ここ10年間で特にそうなっているのですが、海外から沢山のお客様がいらっしゃいます。このことは、大変感謝しておりますが、ある場合には悲鳴をあげるぐらい、次から次へと大事なお客様がまいります。年間200名を超える各国の代表的な方々の来訪を受けるわけです。例えばつい3日前には、ニュージーランドの文部次官、2日前には、敗戦直後マッカーサー司令部のもとに、日本の教育を根本的に指導するという

ことで司令部に特設されましたCIEという機関に務められた教育学専門の先生が何十年ぶりに日本にまいりまして、どうしても私に会いたいということでおいでになりました。

どうしてそういう方々が次々に日本にいらっしゃるかということ、ここでまず申し上げますと、日本の教育が世界で非常に注目されているからです。私の今日のお話の第一の柱はこの点です。皆さん方はご承知でしょうか。今、世界で国と称するものが150余りございます。この150余りの世界の国々で、教育を特に一生懸命やっている国は……もちろん後で申しますが、どこの国でも教育を一生懸命やっているわけですが……、特に教育を一生懸命やっているということで世界から注目されている国は、アメリカ合衆国とソ連とユダヤ——イスラエルですね、それと日本なのです。国際連合に参加している国が149。それに参加していない国が若干ございますので、いま申しましたように世界には150余り国があるのですが、それらの中でこの四つの国が、いろいろな意味で教育、特に学校教育で非常に高い水準にある。わが日本は、この四つの特別な、ずぬけて教育の盛んな国の一つであるということを確認していただきたい。まずこれが一つ。

ですから、沢山のお客様が私たちの研究所に来られるわけです。そして私の如き者がしょっちゅう海外に呼ばれるわけです。日本の教育について話を聞きたい、ということで、招かれるわけです。

知られない日本の一面

私がさきほど申しましたように、そういう体験を持っております私が、どうしても皆さん方に訴えざるを得ないのは、今の日本の教育をこのままにしておけば、日本はつぶれる

だろうということです。私は学者としてこういうことを申し上げるのです。政治家ではない。学者として、そういうことを申し上げるのは、むしろ義務だと思うのです。勉強させていただいている一人としてどうしても訴えたいのです。もちろん遅々として進みませんが、私なりに勉強させていただいている一人として、皆さん方に、全国民に、申し上げておきたいと思いますことは、今のままだったらだめだということです。

どうして今のままだったらだめかと申しますと、日本ぐらい民主主義をはき違えてしまっている国はないからです。今日の話の根本をまず最初に申し上げて、後でそれをだんだん具体的にお話ししますが、二つあるのです。根本の問題が。

今日の日本の大きな根本の問題は何かと申しますと、教育は盛んです。しかし、教育の向かっている目標が間違っているわけです。自分勝手ということ。日本人ぐらい自分勝手な国民はない。だからきらわれてしまう。いやがられる。いやしめられる。私は失礼ですが世界150の国々のうち70ぐらいの国を知っています。現実に50ぐらいの国に招かれて行ってますし、先方からもしょっちゅう研究所にお出になるから自然と知っているわけです。それで、私は皆さん方に申し上げるわけですが、今のままでしたら、結局きらわれてしまうわけです。どうしましょ。いったい、どうしてそういうことになるかという、二つの根本の問題があるのです。

一つは何かと申しますと、これは大事なお話ですから、根本の話としてよくお聞き取りいただければありがたいと思うのですが、1937年、昭和12年までの日本の教育は、世界のどこの国と比較いたしましても断然りっぱでした。これをひとつ確認いたしましょう。

敢えて高かったとは申しませんが、断然りっぱでした。後で具体的に申しますが、本当にりっぱな教育を日本は積み重ねてまいりました。もちろん昭和12年前の時代、その前の大正、その前の明治、明治以前の江戸時代、それ以前から私は申し上げているわけです。私が海外の大学で、明治以前の教育の講義をする時、聴講の皆さんに喜ばれるのです。これにはみんな驚かれる。皆さん方ご承知ですか。明治以前の日本の教育がどんなに高い水準を持っていたか。外国の人は、今の日本の教育の水準が高いということは、専門家ならほとんどが知っているわけです。もう一つ、外国の方が知っていることは何かと申しますと、1872年の8月、明治5年の8月に、それまでの寺子屋だとか藩校とか、後で申しますが、そういう学校の形態を改めまして、世界に通用する小学校、中学校、大学という、国際的に同じ名前、同じ制度を、日本は明治5年の8月に初めて制定したということ、外国の人は知っている。現在の水準はすばらしく高いということ、そしてこの日本の教育が明治5年の8月に近代的教育制度を制定してスタートを切ったということは知っている。

然し残念なことに、次の二つの重要なことを知らないのです。第一はどういうことかという、いま私が申しましたように、明治以後の日本は確かに教育の点において注目する努力をつみ重ねた。そして立派な教育国になったに違いないけれども、明治以前の日本は、ほとんど無知、野蛮だったと思っている。これは私たちが悪いのです。外国の方に日本のことをお知らせしなかったからです。

昭和12年から20年までの事情

もう一つ、私が大変残念に思いますのは、どういうことかという、日本人というのは

おそろしく物まねが上手だ、と考えているのです。物まねの天才だというふうに思っている。この四つを結合すると、どういうことになるかと申しますと、無知な国、野蛮な国の日本が国を開いて、お得意の物まねを上手に発揮して、明治5年に新しい制度をつくった。そしてそれ以後は、日本人独特の追いつけ追い越せの努力で、あれよあれよと言う間にぐっと教育水準が高くなって、今は世界の最高の水準になっている。だから私を呼んで、私の講義の後で質問する内容はどういうことかという、まねのしかたと努力の跡、追いつけ追い越せの努力の跡を教えて欲しいということですよ。

いかがですか。私はこういう質問なり、こういう背景でもって私をお呼びくださる国のことをしばしば体験いたしまして、本当に情なくなりました。情なくなっただけでなく、外国の方を責めるわけにいきませんが、私たちがお知らせしないのですから責めるわけにいきませんが、よく考えてみますと、日本人自身が案外このことを知らないのではないかと、だんだん思うようになりました。よろしいですか。

そこで私は今日、大切なお話の一つをいま申し上げつつあるわけですが、もう一度ここで、1937年、昭和12年までということをお記憶してください。逆を言えば、昭和12年から昭和20年まで、この時代は、今考えてみましても、本来の日本のあり方から完全に逸脱していた。皆さん方は或は十分にご承知いかも知れませんが。この時代がどんなに暗い時代であったかを。だんだん食糧もなくなった時代です。失礼ですが私は、統制経済という規則を守って、とうとう立てなくなってしまった。もし私が九州大学の教授でなければ、また私が九州大学の付属病院に入院させられて、医

学部の方の本当の献身的なご看護がなければ、私は死亡していた筈です。食糧不足で栄養失調で。この時の情勢は、今日皆さん方にはとても考えられないと思う。その時に、この時代——昭和12年から20年、特に昭和17、18年からそうなんです——この時代の私たちのあり方がどんなに間違っていたか、これを一口で言えば、日本が、日本が、日本がと、何でも日本が偉いというふうに考えていた。日本が世界で一番だと考えていた。これは後ですぐ申し上げますが、こうした思い上りは本来の日本の考え方ではないんですね。本来の日本の考え方はそうじゃないのです。それが明治の終わりあたりから、だんだん自分ということが出てまいりまして、とうとうそういう間違った時代に入ってしまった。言いたくありませんが、文部省も思想統制をやった。軍隊が非常に横暴を極めた。どのくらい軍隊が横暴を極めたかということの一つを申し上げます。

ゴースト事件前後

実は私の本に書いておきましたが、どうしたことかという、さっき申しましたように私たちは統制経済を守って細々と生活をしてきた。当時、昭和18年頃のことですが、ある日私が高等師範学校から自宅に帰りましたら、家内が泣いているのです。どうしたんだ。そうしたら、今でも忘れませんが、3人娘たちがおりましたが、みんなたんの前に横になって立てないというのです。妻は泣いているのです。私はショックを受けましたね。どうしてか。これはまさしく栄養失調なのです。統制経済を守ってそういうことになってしまったわけです。

これは広島時代の話です。当時、私は広島

の高等師範学校の教授でした。ところが、私たちが住んでおりました宇品という町で、数軒隔てた所に陸軍大尉の……宇品には有名な部隊がございまして、そこのある係を受持っていた大尉の方で、まだ若い方でしたが、職場に軍馬で堂々とお通いになっていました。私よりももちろん若い方でした。ところが、何と、その方のお宅のごみ箱にはいつでも野犬と野猫が群がり集まっていました。このことの意味はおわかりでしょうね。物資が余っていたから惜しみなく捨てたわけでしょう。それを野犬野猫がいつでもあさっていたわけです。片や、数軒隣りの高等師範学校教授の私の宅の娘たちは歩けなくなっていました。これが当時のあり方でした。これは一つのシンボルとして申し上げたい。ひどい時代でしたね。

皆さん方をご承知でしょうか。大阪のゴースト事件という有名な事件があった。兵隊さんが赤の標識のときにそれを無視して歩いたのを、警官がとがめだてたところ「われわれ軍人に対して何事か」ということで抗争になりまして、これが結局最高まで行きました。警察の最高と軍の最高まで。そして結局警察が負けたのです。これは大阪のゴースト事件として有名でした。いま申しましたように、文部省が全部とは言いませんが、思想統制をやり、軍部がそういうことでもって横暴を極め……もちろん兵隊さんの中にもりっぱな方もいたでしょうが、しかし全体としてはそういうことでした。そしてもう一つは、その軍に押えられた警察がまた特高警察でした。時々今でもテレビに出るでしょう、特高警察というのが。徹底的に一般の人たちの、特に思想を取り締まるということで、平気で人権をじゅうりんしました。これは何といても日本にとって最悪の時代だったと思います。これが長続きしないで戦争が終わった

わけでございます。

ところで、戦後になって、いま私の申し上げているのは、日本人の非常な欠点が出たわけです。どういう欠点かという、戦時中の反省は絶対にしなければなりませんけれども、反省を通りこして、今は反動になっています。よろしいですか。反動です。私が皆さんと一緒にここでもって、日本人の根本的な欠点の一つとして徹底的に反省し改めなければいけないと思いますのは、日本人は一つの極端に行くと、反省をしないで、反省を通りこして、他の極端に走りがちな悪い癖がある。これは、国際的にみて、徹底的に改めなければいけない。これが今、日本の病気です。具体的に言えば、何でも文部省のやることを悪口言うことが進歩的だと思っている。文部省が白と言えば黒、黒と言えば白。何でも反文部省、反政府的なことが進歩であると思っている。もちろん全部ではありませんが、そういう人が少なくないのです。今日は公開講演でいま録音されて後で雑誌に載せられるそうですが、是非次のことを申し上げたい。

極端な反動を戒める

どういうことかという、この国際情勢の厳しいときに、自衛隊の存在を疑うような人がいる国を、私は知りません。そんな国は世界にない。自衛隊——自分の国を守る兵隊。攻めるのではない。あったら教えていただきたい。これは、いま申しました戦時中の軍の横暴に対する極端な反動です。さっき申しましたように、私たちの研究所にもしょっちゅうお客さんがまいります。毎年2月17日にスイスの大使館の方が来られます。大使が来たり、あるいは参事官が来たり。今年も来られました。今年来られた参事官が私に、実に赤面したようなお話をされましたが、どうい

ことかという「所長、大変失礼なことを率直に申し上げるが、日本の方が私たちの国に来て、私たちが本当に驚き、困ることがあるんですよ」「どういうことですか」と聞くと、「日本の方が来て必ずおっしゃることの一つは、スイスという国は永世中立、平和の国だと聞いていたが、永世中立、平和の国だから兵隊さんなんか全然いないと思って来た。ところが軍備に一生懸命なので驚いた」というそうです。

皆さんご承知ですか、スイスは国民皆兵ですよ。私は、スイスは少し軍備に熱心すぎるとさえ思っているわけです。然し、実はそれで平和が守れているのです。このことを日本の方は知らないで、平和の国だから兵隊さん方はいないと思って来て『どうして兵隊さんが沢山いるのですか』と、そういう愚問を提出するわけで、先方では、私たちはこれには閉口しているんですよ」と言っている。

もう一つは警官です。この間、変な警官が出ましたね。あれで私はちょっと言いにくくなったのですが、元来日本の警官というのは、とても程度が高いんです。皆さん方ご承知ですか。皆さん方は特にテレビと映画、外国のギャングものがありますが、あれを見ておられて、必ずお気づきになったと思いますが、海外の映画には買収された警官がよく出て来ます。ところが、ありがたいことに、日本にはそういうのは先ずありませんね。日本にはそういう人は先ずいません。たまに出るかもしれないけれど、先ずいないと言ってよろしい。世界で一番上品な警官は、ご承知かと思いますが、ニューヨーク市とロンドン市だと言われています。ニューヨークの警官とロンドンの警官というのは国際的にとても信用が高いのです。然し私から言わせれば、この名古屋だってそういう信用に値する警察官がお

られるわけです。日本全国の警官というのは信用のおける人たちなのです。この間の不祥事件は例外中の例外なのです。ところがその警察官を蛇蝎の如くきらう人がいる。大学の若い教官、あるいはその影響を受けた学生です。警察官を税金どろぼうなんて呼んでいるわけです。これは戦時中の極端な警察官の横暴に対する反省を通りこして反動です。この反動から一日も早く私たちは脱出すること。これが第一。

教育における二つの柱

これからの日本の第二番目の大事なことは何かと申しますと、教育というものには二つの大きな柱があるということを確認することです。これから、今日のお話の本論に入ります。教育というものには大きな柱が二つある。柱というのは大切ということです。小さな柱は沢山あります。例えば健康の教育であるとか、芸術の教育であるとか、技術の教育、みんな大切な柱です。しかし、そういう小柱に対しまして、どうしてもそれなくしては教育とならない二つの根本の、いわば大黒柱がある。この大黒柱を確立することが、これからの日本の教育の根本的課題なのです。これについては、家庭教育を含めましてお話ししたいと思います。

二つの大きな柱の一つは、およそ教育には不易の世界があるということを確認することです。不易ということは、変わらないということです。皆さん方の中にお茶をされる方、お花をされる方があって良いでしょう。不易というのはお茶やお花の言葉です。これに対応する言葉は流行です。この流行は後ですぐ申しますが、不易ということは一体どういうことかと申しますと、いま言いましたように変わらないということですが、もう少し具体的に申

しますと、時代が変わっても、国が変わっても、また同じ国、同じ時代に住んでいる人々の生活条件が変わっていても、それにかかわりなく、およそ人間であればだれでもが追求しなければならない価値を不易の世界と申します。だれでもが持っていなければならない値打ちを不易の世界と申します。

例えば江戸時代の人でも現代の人でも、ソ連の人でもアフリカの人でも日本人でもフランス人でも変わりなく、だれでも人間ということでもって持っていなければならない値打ちを不易の世界と言います。これは一口で申しますと、道徳の世界と宗教の世界に深く根を下ろしている。よろしいですか。私が今日皆さん方に訴えたい一つは、日本の教育は、もっと真剣に道徳教育ということを考えなければだめだということ。宗教教育ということをもっと真剣に考えなければだめだということなのです。なぜならば、道徳の世界、宗教の世界は、それ自身が不易とは申しませんが、不易の世界に深く根を下ろしているからです。

私の大好きな日本語の一つに、これは本来中国の言葉でございますが、孔子様がお弟子に、儒教の本質は何ですかという質問を受けたときに「其恕乎」とお答えになっています。私はこの言葉は大好きです。今日のお話の一つの大きな山でございまして、それは思いやりということでございます。思いやりがあるかないかということは、人間であるかどうかの決め手なのです。いくら勉強ができて、いくら技術が優れていても、思いやりというものがないと人間でないということを、私たちは日本の教育で確立しましょう。

大変面白いことに、皆さん方の中に仏教にご信仰の厚い人がおられると思いますが、仏教ではこれを慈悲と申します。キリスト教はこれを愛と言います。同じことです。思いや

りとか慈しみとか愛、みんな同じ。世界の大きな教えが奇しくも、期せずして一つの根本的な思いやり……。よろしいですか。約束してください。皆様方の家庭教育、それに続く学校教育、それと合わせて社会教育、あらゆる教育の活動の中において、思いやりというもの、慈しみというもの、愛というものを基礎に置くか置かないかということが、本当の人間教育であるかどうかの決め手になる。これだけをしっかりとやれば、日本人は世界からもっと親しまれる、世界からもっと尊敬されると私は確信しているのです。現在これがあまりにもなさすぎるわけです。後で申しましょう。いいですか。私は大変面白いお話をここで申し上げます。

ザビエルの報告書に見える日本観

どういうことかという、ろくすっぽ勉強もしない、いわゆる進歩的な学者の一群れがしょっちゅうおっしゃることは、戦前の日本の教育は全部だめだ、これから民主教育で日本をやり直すのだということをよくおっしゃいます。

然し私は、勉強しないからそんなこと言うのだと思う。さっきから申し上げているように、昭和12年から20年まではもちろんだめです。しかし、昭和12年以前の日本の教育は、思いやりとか慈しみとか愛というこの世界を、日本の教育は追求していたのです。はっきり申しましょう。これはどういうことかという、昔から、江戸時代以前から日本はありがたいことに、儒教の教えと仏教の教えを非常に深く学んだわけです。そこで私、皆さん方と一緒に、私達の祖先の努力のことを、ここで考えておきたいと思うのですが、1549年にフランシスコ・ザビエルという方が日本へまいました。覚えているでしょう。学校で習

ったはずです。フランシスコ・ザビエル。カトリックのお坊さんです。ご当地にもカトリックの大学がありますが、東京に上智大学という大学があります。あれと同じ団体で、ジェズイットと申しますが、このジェズイットの教団から派遣されたフランシスコ・ザビエルという方が、1549年に日本においでになった。この方はスペインの方ですが、フランスでよく勉強され、伝道師としてアジアにおいでになった。日本の鹿児島に上陸されたのが1549年ですが、その前に、いろいろとアジアの国々を経巡って貴重な体験を積まれて、日本に來られて、滞在された期間はわずかでございましたけれども、単に上層階級だけでなく、当時の一般庶民の私たちの祖先と深く接触をされて、そのときに得た彼自身の印象を、たびたび手紙に書いて、パリの教団の本部に送った。それが2冊、本になって残っているのです。もし興味があったら読んでください。ザビエル聖人の日本についての報告書が2冊、本になって残っている。これを読みますと、私たちは本当に、私たちの祖先を改めて見直しますね。いま申しましたように、いろいろな国を知っているザビエル聖人が、ひとり日本の上層階層だけではなくて、一般の庶民とのおつき合いの結果、日本人を激賞しました。この言葉が一番当たります。最大級に日本人をほめたわけです。手紙の中に書いてあります。特に三つの点ではめている。これが日本人の特色だから、ここで皆さんとよく確認しておきたいと思いますが、第一の点は何かということ、おそろしく節度の高い国民だということ。節度ということはおわかりですね、礼儀作法。英語ではモデストと申します。第二番目は、恥を知る。恥というものをよく心得ている。そして第三は何かというと、これが本当にありがたい証言です

が、日本人はほかと比べてまことに一つの大きな特色なんです、勉強好き——学問を尊重する国民だ。この三つの点で激賞しました。これが16世紀です。

日本人の根本の特色

私は海外の大学でこの話をするのです。あなた方は、江戸時代以前、日本が野蛮であり無知であるとお考えになっているかもしれませんが、世界的な学問僧のザビエル聖人がこういうことを言っているのですよ、ということ。私は必ず、海外の大学で言う。そしてその次に私は必ず黒板を使ってこういうまるをか。世界地図ですね。日本という国は太平洋上の本当にちっぽけな国です。世界からみると、全く小さな国です。この小さな国日本が、朝鮮半島と中国大陸というこの二つのルートを通して……中国の背景にはインドがあり、その背景にはヨーロッパがあったわけですが……、この二つのルートを通して、望ましい技術、芸術、学術、思想、宗教というものを、二つの大きな特色で、私たちの祖先は勉強したわけですよ。まねたのではない、勉強したのです。

二つの特色といえますのは、これは覚えてください。日本人の根本の特色です。これは、一つは謙虚。私たちの祖先は驚くほど謙遜でした。いいものに対してはあくまでもそれを学ぼうとする態度。これは日本人の特色です。謙虚。もう一つは、ただ単なる謙虚ではなくて、もう一つの大きな特色でございますが、熱心さです。この謙虚さと熱心さで、私たちの祖先は、朝鮮半島と中国大陸の二つのルートを通して、いま申しましたような尊い人間のもろもろの価値を学び取ったのです。

皆さん方ご承知ですか。仏教はインドから始まりました。仏教は朝鮮半島と中国から日

本へ入ってきたわけですが、実は、仏教はある意味で日本に来て、本当の仏教の良さを発揮したわけです。

皆さん方の中に真宗の方がおられましょか。浄土真宗の方です。また禅宗の方もいらっしゃるましょ。この禅宗とか真宗というのは、仏教の本当の深い真理を追求したものです。もちろん禅宗も中国の本土に端を發しました。それが日本へ来て、大変な努力をして、日本的な禅宗を確立したわけです。だから今、諸外国の人は日本に来て禅宗を勉強しようとしている。儒教でもそうです。肝心の中国大陸では、今批判の対象となっています。ですから日本のほうがよっぽど儒教的です。日本では朱子学とか陽明学とか古学とか、いろいろの学派が發達した。しかも氣をつけていただきたいことは、この儒教なり仏教は、単に上層階層の人たち、学者であるとか、政治をする人たちだけではなくて、一般の庶民に深く根を下ろしたということです。

ついでに申し上げますが、私が外国で申し上げることの一つは、1603年から1868年がご承知の江戸時代。265年続いたわけです。こんな長い間、一つの国でもって平和が維持された国は世界に絶対にありません。私はロンドン大学、キャリホルニヤ大学等、世界の有名な大学で講義をしたときに、これを書きまして、1603年から1868年のこの長い間平和が続いた国は世界に絶対にない、あれば私に教えてください、と申しました。ないのです。もちろん内乱はありました。数回。けれどもこれは一部局でした。そして長い間平和が続いた。この長い間平和が続いたときに、日本はどうだったかと申しますと、江戸幕府は偉かった。文武兩道と定めたわけです。いかがですか。文が先なんです。武ではない。しかも兩道、道德でした。

文武の道ということ

私はいつか、パリから三時間ぐらい、ちょうど東京と名古屋ぐらいの距離の所に、リモージュという陶器の有名な産地がございます。そこへ道德教育の実態調査をするために出かけましたときに、その都市の柔道クラブの方が、日本から学者が道德教育の調査に来た(当時は九州大学の時代ですが)、というので大歓迎を受けまして、柔道クラブへ案内されました。私ばかりでなく、九大の先生方、私を入れて五人。柔道クラブへ歓迎の案内です。そして向こうでちゃんと柔道着を用意して、乱取りと申しますが、柔道の型でもってお互いにひとつ親睦を表わそう、と。

私は剣道はいたしますが、柔道はやらないので、剣道ならやると言ったら、剣道はこわいからいやだと言うんです。柔道をやろうと言うのです。ところが私を含めて、九大からまいりました五人の者がだれも柔道ができない。向こうで驚きまして、日本の男子で揃いも揃って柔道ができないのかということで面目を失いましたが、時間が余ったわけです、歓迎の。柔道着に着がえてやる時間が。そこで一策を案じまして、私は大変良かったと思うのですが、なぜ柔道という言葉が出たかというお話をした。皆さんご承知ですか。なぜ剣術と言わないで剣道と言い、柔道と言い、弓道と言う、道ですね。このお話を約30分、私はレクチャーしました。フランスの柔道クラブでレクチャーをしました。これは江戸の初めから、いま申しました文武兩道ですね。そうしましたら、けがの功名と申しますか、とっても喜ばれた。自分たちは「柔道、柔道」と言っていたけど、柔道というのはどういう意味か知らなかった。いま、プロフェッサー平塚からそういうレクチャーを聞いて本当に

ありがとう、ということで、けがの功名みたいに私たちは大変面目を施しましたが、いずれにしても、ここでもって皆さん方と一緒に確認したいことは、わが国は長い間、儒教と仏教の影響を受けて、国が単に維持されただけでなくて、蓄積と申しましょうか、明治以後の大発展のいわば予備的な力がここに、非常に蓄えられたということを確認したいと思います。

江戸時代の高等教育機関

皆さん方はこういうことをご承知ですか。江戸時代——この文武両道という江戸時代、中央に大学がございました。セントラルカレッジと、私は海外の大学で申しますが、昌平坂学問所という江戸幕府直轄の高等教育機関——大学がありました。これに対応して、藩校——藩の学校が285ありました。この地区にもあったのですよ。中央に大学が一つに対して、地方の大学が285ございました。さらに驚いたことには家塾、私塾が2,000からあった。ちゃんと数がわかっているのです。その家塾の一つには日田にございました咸宜園という広瀬淡窓という大先生の私塾でございまして、5,000人の学生が集まっていた。大分県の日田というあんな辺鄙な所に5,000人、学生が集まった。そのくらい日本は勉強好きの国民性を持っている。これに対応いたしまして、寺子屋が50,000ございました。これは、愛知県の方がご承知かどうか存じませんが、実は愛知県はこの点で有名なんです、寺子屋で。どういうことかという、さっき申しました明治5年の学制が始まりましてちょうど百年たちました、いまから6年前になりますが、1972年に、わが国は文部省を初めといたしまして、至る所で学制百年——新しい学校の制度の百年のお祝いをいたしました。その

お祝いの一つといたしまして、愛知県は、愛知県の教育の歴史を編纂いたしました。もしましたら、今までに800ぐらいしかわかっていなかった寺子屋の存在が、何と3,000もあるということがわかった。愛知県だけで。これが、県の教育研究所から本になって出ている。3,000のお師匠さんの名前と所在地がずっとリストアップされているのです。これは有名です、愛知県は。日本全体では28,000と推定されておりましたのが、今はっきりわかりましたことは、50,000以上あったということです。寺子屋が50,000ですよ。しかも寺子屋というのは、若干の例外はあったかもしれませんが、先生がしっかりしてた。寺子屋の先生はしっかりしていたのです。どういう意味でしっかりしてたかという、幾らお金持ってこなければ教えないという、そういう言い方ではない。親の財政状態で「これしかありませんが、教えてください」「ああ結構」と。これを束脩そくしゅうと申します。何円持ってこなければ教えない、と、そんなことじゃなかったのです。そして、ワン・ティチャー、ワン・ルームと申しまして、寺子屋は小さな自分の自宅を教場とするわけでございまして、必ず仏壇かあるいは神棚をそこへ置いたわけです。さっき申しました人の道です。おわかりですか。だから寺子屋で勉強する場合には、神棚、仏壇の前でもって勉強したわけです。先生と生徒が一生懸命勉強したわけです。

江戸時代の庶民教育

もう一つ大切なことは、皆さん方ご承知でしょうか。江戸時代に、今で言うドレメがあったという話。お裁縫の先生があった。ドレメです。この江戸時代のお裁縫の先生方のことをお針屋と申しました。裁縫を教える場所です。全国都々浦々にお針屋がございました

が、驚いたことに、そのお針屋の教えの根本は単なる裁縫ではない。エチケット、モラルでした。私は海外からいらっしゃるお客様に必ず説明するのは、そういう江戸時代のお針屋のあり方です。ご説明し、また現実に使われた教科書をご覧に入れて、いま私が申し上げている不易の世界に通ずる教育が、江戸の昔からずっとその根底にあったということをお話するのです。みんな感心します。

これからのお話は、インドの研究所で大変暑いときにお話を申し上げたときに、インドの学者先生が舌を巻いて、みんなでびっくり仰天した。どういうことかと申しますと、江戸時代には武士と農民と大工さんたちと商人、士農工商という四つの階層がございました。非常に特色あることはどういうことかと申しますと、これは今でもそうなので、日本人の特色の一つです。皆さん方はもちろんそれをお持ちだと確信いたしますが……だからこういう朝にもかかわらずお集まりになっていると、本当に感謝の気持ちでそれを確認いたしたいと思いますが、海外と比較いたしまして、日本の昔からの特色の一つは、お父さんお母さんが経済的な余裕を持ってまいりますと、そのお金を子供の教育に使うのです。これは日本の特色です。皆さんもそうでしょう。このごろ少し、それが間違った方向、海外旅行とかに使われているようですね。とにかく昔から日本は、お金があると、子供の教育に使った。これは実にすばらしい伝統なのです。そこで、士農工商の第四階層としての商人の中から、貨幣経済の結果、江戸の中期以後になりますと、お金持ちが出てまいりました。そのお金持ちは、当然のことですが、自分の子供たちの教育のことを考えて、寺子屋とか私塾とかお針屋とか……寺子屋には女の子も行ったのです。そういった所に、子供さんた

ちを勉強させるだけでなく、特にお金持ちの商人は、武士の家庭に自分のかわいい娘を預けた。これをお女中奉公制度と申します。

皆さん方は、女中と下女を区別してください。女中と下女は違うのです。どう違うかという、富裕の家庭の15、6歳のお嬢さんたちが行儀見習いのために上層の武士の家庭に預けられた場合に、全部ではありませんけれども、ある方々は、自分の身のまわりの世話を下女を連れてお女中として見習いに行ったのです。2年ないし3年。何を勉強したかという、言葉づかいと行儀作法と趣味教養を徹底的に身につける。そして、2、3年でそれぞれ実家に帰ったのです。

うちに帰ってきたこの女性、富裕の商人の娘さんたちが大体17、8歳で帰ってくるわけですが、その方々をお屋敷出と呼びました。これは女子大出という意味です。一番高い教養、女子大出。私いま申しましたことで、皆さん方に大変面白い本をご紹介します。

岩波文庫というのがあるでしょう。あれに式亭三馬という人の書いた「浮世風呂」という本と「浮世床」という本があります。江戸時代のお風呂屋さんと床屋さんについての実に面白い小説です。これを読んでください。どんなにこのお屋敷出がいばっていたか、また、ほかの人が「あれはお屋敷出だ」と言っただけ一目も二目も置いていたか。ちょうど大正から昭和の初期にかけて女子大出という言葉がありましたね。あの人は女子大出だ。あれと同じで、お屋敷出。

こうした私の話に、インドの学者がびっくりしたのはどういうことかという、インドでは絶対にそんなことはできない。日本は階層ですがインドは階級です。階級が違ってもう口もきかない。いわんやそこへ勉強に行くなんていうことは絶対に許されない。ところ

が、日本はこのことを通してどういうことがなされたかという、武士の階層のものの考え方、趣味教養が、お嬢さんたちを通して町人の中へ入っていった。逆に町人の間に生れた趣味が武士の階層に伝わった。要するに階層同士の交流というものができる。これが明治の維新の基礎になった。四百余州と申しまして藩が沢山あった。それがてんでんばらばらと考えると大間違いで、交流が出来ていた。武士と農村の間の交流。この点でもう一つ大きな役割を果たしたのは参勤交替の制度であります。とにかく、そういう特別に生み出した制度によって、日本は明治以後のりっぱな国づくりの基礎を、この江戸時代に既に大方つくり上げていたわけでありませう。

江戸時代の家庭教育

いろいろ申し上げたいのですが、時間を考えまして、もう一つだけ申し上げて、後は明治の話若干申し上げ、本論に入りたいと思います。ところで皆さん方にぜひ読んでいただきたい本を今日、幾つかご紹介いたしますが、読んでいただければありがたいと思います。本の一つはケーベルという先生が書き残した随筆でございます。

ケーベル博士というのはドイツ系統の哲学者で、明治20年代から大正10年ちょっと前まで、東京帝国大学で哲学を教えられた実にりっぱな学者でございましたが、その先生が香り高い随筆を幾つかお残しになっております。その随筆の中の、私の大好きな内容を少しだけご紹介したいと思います。

「自分はなまはんに欧米かぶれした近代人……これはもちろん日本人のことですが……、近代人よりも、古風な教養を持った生粋の日本人をはるかに尊敬する。」

いい言葉ですね。古風な教養を持った生粋

の日本人をはるかに尊敬する。なぜならば、そういう人たちは例外なく私心がない。これがさっきの思いやりとか慈しみの精神に通じるわけです。ケーベル先生は「私心がない」と。そして、私たちにとって一番ありがたいことは、そういう私心のない、古風な教養を持った生粋の日本人は、今、農村地帯に行けば幾らでもいると仰言った。大正時代のことです。農村地帯に行けば、幾らでも親切きわまりない人がいますぞということを、ケーベル博士は随筆にお残しになっているのでございます。

このケーベル先生や、さきほど申しましたザビエル聖人が非常に激賞したこの、節度が高い、私心がなくて親切だということは、実は特に江戸時代、いま申しました士農工商という四つの階層の家庭教育がこれを養ったのです。

私は、江戸時代の家庭教育は今の家庭教育よりもよかったと思います。なぜならば、武士の間でも農民でも、大工さんたちでも、いわゆる一般の商人、農民、町人でも、家庭教育の根本原理はたった一つだ。よろしいですか。それは人様に迷惑をかけない、ということです。私は、これだけでも皆さんに守っていただきたいのです。人様に迷惑をかけないように子供さんたちをしつける。人様に迷惑をかけないということは、江戸時代の家庭教育の根本です。

道徳教育の国際会議で

いま申し上げたことを要約いたしますと、儒教、仏教の影響というのが大変大きな伝統として残っていることを確認したいのですが、これが明治23年、1890年、教育勅語として出てくるわけです。さっきから申し上げているように、ろくに勉強しない人……学者と称し

でも勉強しない人がありますね、そういう勉強しない学者と言われる方々の中には、教育勅語なんて、ああいうものがあつたから日本が負けたなぞと、実に冒瀆もはなはだしいことを平気でおっしゃったり書いたりされていますが、私は昔からそういう先生方に警告を発して、もっと勉強してください、と申して来ました。失礼ですが私は教育勅語を一生懸命勉強させていただいたつもりでございますが、驚いたことに1908年に、世界で初めて道徳教育の国際会議がロンドンで開かれましたときに、教育勅語を中心とした日本の道徳教育、これが、1908年、明治41年のこの世界道徳教育の学者たちの集まりにおいて、高く評価された。日本の道徳教育は大したものだという高い評価。そのときの報告書が二冊残っている。私、持っているのですが、その報告書がちゃんとしまわれております、ジュネーブの国際教育局についてこの間行って、また確認してきました。私は、私たちの祖先に感謝の気持ちをもって、昔の教育のよかった点をもう一度見直すことが、現在の日本人にとって最大の義務だと思っております。

なぜ私がそういうふうに言うか。今から9年ほど前にアメリカ大陸——カナダ、アメリカ合衆国、メキシコ、南米と、全部がアメリカ大陸ですが、アメリカ大陸の沢山の大学の心理学の教授たちの年一回の総会がございまして、9年前、その総会に私は特別に名指しで、しかも、題名も「日本の教育について」という2時間の講演のご依頼を受けまして、ペルーの首府のリマという所へまいりました。サンマルコス大学のあるリマです。そのときに、私は日本の教育について一生懸命お話し申し上げたのです。いままでも皆さんに明治時代のお話を若干いたしました、実は明治の初めの日本の指導者たちは、日本の国づく

りの場合に、明治5年以前の当時の先進諸国の教育の長所を徹底的に調べ上げたのです。そして世界で三番目という榮譽を担っておりますが、小国民全部が同じく小学校に入る制度をつくりました。ここに申します……全部の者というのは、お百姓でも武士の子弟でも、みんな同じように、また男子も女子も同じく、まず小学校に入るという、まことにデモクラティックな制度を、1872年に制定したという話を致しました。そしたらお聴きになって学者たちが、みんなびっくりしました。この素晴らしい制度は、実は世界で三番目なのです。

世界の模範とされる日本の学制

江戸時代は、さっき申しましたように、藩校は武士の子弟を原則とし、寺子屋は町人、要するに武士とか町人という階層の違いによって学校は差別されていたわけです。これは非民主主義です。これを明治5年に私たちの祖先はかなぐり捨てて、スコットランドが一番最初です、その次がオランダ、そして日本、小学校に全部の者が行くという制度をつくったのです。

もう一つ、私とそのサンマルコス大学で講演をしてみんながびっくりしたのは、どういうことかということ、日本はこのときに全国を八つの大学の区域にし、一つ一つの大学の区域を32の中学校の区域にし、一つ一つの中学校の区域を210の小学校の区域にするという学区制を試みました。これはフランスの制度をモデルにしたわけですが、フランスよりもはるかに進歩的な制度をつくらうとした。どういうことかということ、八つの大学と256の中学校と53,760という小学校をつくるという計画をそのときたてたわけですから、これはもちろん希望です。然し素晴らしい計画でした。

数日前にマクナマラという方がNHKの朝

の102の番組に出ましたね、世界銀行総裁です。あの方は、4年ほど前に私の所へ電話をかけてきた。どういう内容かという、日本は先ず大学によって国づくりを計画したのではない、中学校でもなくて、実に、小学校を先ず全国都々浦々にしっかり網の目の如く張り巡らして、国民全体のレベルを上げるという政策を1872年にたてた。これは今、世界中がびっくりしているのですが、マクナマラさんはこのことを知っておられるのです。そこで、このことを論文に書いて、今、百を超えている開発途上国に、この日本の政策を模範としてそれぞれ国民初等教育を中核にした立派な教育政策をたててもらいたいから、ぜひ論文を書いてください、との要請なのでした。私は同僚と共にこれを書きました。去年、それが英訳されて今、各国で読まれている筈です。いかがですか。

ライシャワーさんという人がいますね。アメリカ大使だった方で、ハーバード大学の教授です。この方が、かつて、日本という国は不思議な国だ、明治の初めにあんなにりっぱな人たちが沢山輩出したのは、まさに奇蹟だ、と申されました。とにかく明治初年の日本の教育の近代化の努力の跡は大したものです。

私は、今日せっかくお集まりいただいた皆さん方に、お願いしたいことは、もっと、私たちの祖先のしてくださったよい教育の面について、感謝の気持ちで記憶すべきだということです。このことを申し上げるのは、私の義務だとさえ思うのです。私が訴えるというのはこのことなのです。あまりにも祖先をないがしろにしすぎている、現在の日本人は。逆に外国の人が一生懸命、日本の教育の歴史を勉強しておられるのです。

皆さん方ご承知ですか。今、世界で一番寺子屋のことを勉強している方は、ドーアとい

うイギリスの学者なのです。寺子屋のことをとってよく勉強している。そのドーア先生は何と言うかと申すと、今の日本がこんなにりっぱな……何と申す……りっぱな国ですよ、日本は。それを切り開いたのは寺子屋がもとだ、と。これはどうしてかという、小学校がもとでしょう。その小学校というのは急にできたのではなく、寺子屋がもとなのです。だから昔から日本はそういうよい伝統を持っていた。

『教育勅語』が道徳教育の基礎

これに対してもう一つ、ここでどうしても申し上げたいことがあります。それはさっきから続けて申し上げていることですが、1890年、明治23年に教育勅語が公布されました。この教育勅語を基礎にした当時の日本の道徳教育が、明治41年に、世界の学者たちから非常に高く評価されたということです。皆さん方はおそらく中学で習っておられると思うのですが、あるいは高等学校で詳しくお習いになったと思いますが、1900年、明治33年に北京で大暴動が起こったお話をご承知でしょう。北清事変と申します。西太后という清朝末期の女帝ですね、彼女のそそのかして、北京に排外的な大騒乱がおこった。このときに、ロシア、ドイツ、イギリス、フランス、イタリア、アメリカ合衆国、そしてわが国から、北京に軍隊が派遣されました。世界に有名な話ですが、この時日本から派遣された軍隊が、その他のどの国の兵隊さんたちよりも、断然軍律が厳しかった。これは日本人の特色です。不易の世界につながる教育を、江戸時代からずっとやってきたからです。

面白いことに、戦後日本に来たマッカーサー元帥のお父さんが、その時のアメリカ派遣軍の総司令官だった。だからマッカーサー元

帥がお父さんからよく聞かされたことは、日本の兵隊は実にすばらしい、軍規を厳密に守る、という点でした。しょっちゅうそれを聞かされていたマッカーサー元帥が、「この間の第二次大戦中の日本兵が、南京事件を起こしたり、いろいろと不詳事件を起こした。その同じ日本の兵隊さんで、明治33年のときとこの度とで、どうしてそんなに違ったのか」ということを、質問したそうです。もちろんこの間の戦争の時、日本兵のすべてがだめだったわけではありませんが、同じ日本人でとにかく大きな違いが出たことは否定できません。だれに質問したかというと、亡くなった吉田元総理にです。吉田茂氏、この質問には困り切ってたそうです。

然し、私はちっとも困りません。原因ははっきりしています。つまりどういうことかという、さっきから申しましたように、謙遜の精神をなくしたからです。明治末期ごろから日本には、事あるごとに、日本が、日本が、という思い上がった風が生じたからです。それが昭和6年から特に12年、さらに16年以降と、私は調べて、ちゃんとその年代もわかっているのですが、とにかく昭和6年から始まって、12年、16年、そして20年まで、ぐーっと日本人全体が思い上がった。何でも日本が、日本が、ということになりがちでした。反省いたしましょう。もちろん反動はだめです。然し大いに反省いたしましょう。

ペルーの「文部大臣」の感動

私は昭和12年までの日本の教育を、さっきから何回も言うようですが、世界の教育と比較いたしましてまことに立派だったと確信しております。……これは私の専門です。イギリスの教育、フランスの教育、世界のいろいろな国の教育と比べて、とにかく遜色はなかつ

たと言えます。

この間、ヴィレンドラというネパールの皇帝がいらっしゃいました。実にりっぱな方です。この方は私たちの研究所に勉強にいらっしゃいましたとき、私が日本の教育の特色を、イギリス、フランス、アメリカ、ドイツ、ソ連の五つの国と比較しながら、日本の教育の長所と短所とをご講義申し上げましたら、とっても喜ばれました。初め1回で済ませるつもりが合計4回、しかも3時間ずつ4回も来所されて、徹底的に日本の教育の長所と短所とを勉強されました。この間いらっしゃって、私は特別にお目にかかる機会を与えられて、何と皇帝がおっしゃられたかという「先生、もう一度日本の教育を勉強したい」と言うことでした。

今でも忘れませんが、4年ほど前に、ペルーの文部大臣を約束された方が、日本の外務省、文部省の招待で日本に来られました。その方が、私の所に、日本の教育についてのいろいろご質問に来られた。私は約2時間半ぐらい、所長室で黒板を使いながら、1対1でご説明申し上げました。そうしましたら、1時間50分ぐらい、まだ2時間にならないうちに、ペルーは軍政ですから軍人さんです、軍服を着た50代のりっぱな紳士でしたが、その方が——私は驚きましたね、涙を流されたのです。私をご説明してましたら、涙をはらはらと落とされた。私はびっくりして「どうかされましたか」と伺いましたら、その方は私の手をかたくお握りになって「プロフェッサー、ありがとう」と。

自分は、世界地図の中でちっぽけな日本が、今ご承知のように、日本はいろいろ問題を持っておりますね、経済でも、その他いろいろ問題はありますが、何と、西ドイツと日本とアメリカが世界経済を引っ張る牽引車と言わ

れているでしょう、それだけの實力を持って
いる日本ということ、ペルーの文部大臣を
約束された方が日本へ来て勉強をされたわけ
ですが、その先生が、私がいままでお話し
したようなことを申し上げましたところ、非
常に感じ入って、昭和12年までの日本の教育
に対して国民が払った並々ならぬ努力に対し
て、いまさらの如くびっくりされると同時に、
帰ったら、今日お話を承ったそのことを、ひ
とつ大きな指針として、ペルーもしっかりや
るから見ていてください、と言って握手され
ました。私も、相手が涙を落とされたので、
思わず目頭が熱くなってきました、本当に日
本の教育を大切にしなければ、とつくづく思
いました。

今は反省すべき五つの点

まだ、いろいろありますが、時間の関係で
この程度にしたいと思います。

ただし、日本は決して神様の国ではありま
せんね。いままで申しましたことは、現在、
あまりにも過去の日本をないがしろにする
というあり方がジャーナリズムを賑わして
おりますから、私は皆さん方に、皆さん方の
大事なお子さんをお育てになる根本の心構
えとして、ご参考までに申し上げました。
つまり日本には大した国の伝統があるのだ
ということ、私は皆さん方と一緒にこの点
をあらためて確認させていただいたわけ
ですが、かく申す日本にも、幾つかの欠
点、弱点がございました。これはどう
しても、これからの問題として考え直
さなければなりません。

第一の弱点は何かというと、さっき申し
ました土農工商みんなが、人様に迷惑を
かけないというしつけをしたということ
を申し上げました。確かにそうでした。
儒教、仏教のよき影響として、人様に
迷惑をかけないと

いうしつけは、ずっと長く続きました。
少なくとも昭和12年までの日本は
そうだったわけです。ケーベル先生は
これを激賞されたわけですが、いかん
せん、実はこの点との関連でも日本
には根本の間違いが昔からあったの
です。これから申しますのは根本の
間違いです。改めましょう。

第一、日本人は確かに親切です。しかし
これは自分の知り合いに対しての親切
です。いけませんね。私は日本語で一
番きれいな言葉は「どこの馬の骨か」
という言葉です。よろしいですか。一
たび自分の知らない人になれば、全然
親切さがなくなって平気でいられる。
そうでしょう。皆さん方ご承知です
か。どこの馬の骨というのは、あれは
日本独特の用語です。それに加えて「
旅の恥はかき捨て」とかという言葉も
ある。これらは江戸時代からずっと
今日まで使われている。今ではもっと
ふえている。自分の知り合い以外の者
には不親切です、日本人は。いけませ
んね。

ところで、昭和12年以前の日本の教育
の中で、何といたって私たちが反省す
べき点は少なくとも以下五つあるの
です。

第一は個人の尊重の精神が欠けていた。
これは根本の問題です。全然ないとは
申しません。然し、足りなかった。そ
こで戦後には、さっき言いましたよ
うに行きすぎた。昔の個人の尊重の
足りなさを反省して、正しく位置づ
ければよいわけですが、それが行き
すぎて、何でも個人個人ということに
なっている。とにかく、これが日本
の大きな欠点の一つです。

第二番の弱点は、世界の教育と比較
しまして、戦前の日本の教育の短所
は、女子の高等教育をないがしろに
した。これは実に恥ずかしいこと
です。第三番目は私立の学校を正し
く位置づけなかった。そして第四番
目は心身障害児の教育が十分でな
かった。もっともこ

れは、世界的にそうだったのですが、不幸な子供さんたちの教育を、戦前は、何といても軽んじていたということを、強く反省しなければならぬのです。

こうした反省点を深く弁えた上で、これからの日本の教育はさきに申上げた教育における不易の世界を追求すべきですが、同時に流行の世界を、これまたしっかり追求すべきなのです。

不易と流行について

流行ということは、もちろん皆さん方よくご承知だと思いますが、単なる吹けば飛ぶようなものを言うのではないのです。然らば、流行ということはどういうことかという、時代とともに進歩することです。いま私はマイクを使っていますが、これは流行です。だから教育は根本問題として不易の世界を一生懸命やらなければだめです。慈しみとか、思いやりとか、愛とか、そういう不易の世界につながる道徳教育とか宗教教育というものをしっかり追求しなければならぬ。これが第一。

ところで、それと同様に大切な流行には、沢山ございますが、ここでは三つ取上げて、これからの日本教育をたしかなものにしたいものです。

第一は何かと申しますと、民主主義をしっかり理解することです。私はこの点で、皆さんにぜひ買って読んでいただきたい本がありますので申し上げます。必ず買ってください。私はよく言うのですが、私がかもし福田総理大臣だったら、2,000万部政府が買って国民全部に配る。お約束ください。必ず買って読んでください。それはどういふ本かという、『日本の自殺』というパンフレットです。これは、かつて雑誌「文芸春秋」が特集した素晴らしい内容のもので、今の日本人は、か

つてギリシャ人がギリシャを滅ぼし、ローマ人がローマを滅ぼしたと同じ愚かな道を日本人全体がとうとうとして歩んでいるという驚くべき、また恐るべき警告なのです。簡単に手に入ります。PHPという松下さんの団体がありますね。あのPHPが今この『日本の自殺』をパンフレットとして売っています。ですから本屋さん、PHPの『日本の自殺』を取り寄せてくださいとおっしゃると、必ず安く手に入ります。

この本の中で見事に指摘されている民主主義のはき違えは、五つに要約されているのです。第一、国民の多くが欲張りになった。第二番目は、欲張りも人様のために欲張るなら話は別ですが、自分のためのエゴ、驚くべきエゴ。これが、ギリシャがこうだった、今日本がこうだ、ローマがこうだった、今こうだということを、具体的に書いてあるのです。今、日本人のやっている誤りが明示されている。だから意味がある。

第三番目は、区別と差別を誤る。皆さんは大丈夫でしょうね。区別と差別の違いのわからないことは民主主義で一番の悲劇です。区別さるべきことが敷衍しているのに、それを差別としてすべて反対する。この区別と差別のわからないことは、どういうことになるかという、怠け者が得をし、全体として社会がレベル・ダウンしてろう。しかも民主主義の美名で。

誤った民主主義の風潮

その次はレジャーの行きすぎです。もっともこれは、私は少し酷だと思います。元来、レジャーというのは大切なものです。音楽であるとかスポーツであるとか。ただしそれが行き過ぎると困ります。行き過ぎると、働くことをいやがるようになる。レジャーのため

に働くことをいやがるのは墮落です。かつてローマはこの程度に墮落し、結局亡国の憂き目をみました。最後は政治をする人、政治家とは言えませんが、政治屋は何でも民衆に、おもねる。何でもいたしましょう。結果は財政の破綻です。

私はここで一言だけ申し上げて先へ進みますが、民主主義の根本は、どなたもご承知のように、一人一人を大事にするということです。今、日本の根本の間違ひは、この一人を自分と置きかえている。自分を大事にするのが民主主義だという。これは全然間違ひです。民主主義の根本は人様を大事にすることです。

ところで、流行の第二番は、今の日本の教育のこれからの家庭教育の根本に漸くつながるわけです。何かと申しますと、国際的に信頼され尊敬されるひとり一人をつくるということです。目を絶えず国際社会に向けることです。今まで日本は、海外からよい点を学んで自分を成長させてまいりました。然し現在の段階、特に21世紀に入るこれからの日本は、自分の持っているものを少しでも世界に還元し、世界の平和と人類の幸福のために、日本人が少しでも尽くすことが大事なのです。

私はフランスで覚えましたことわざをここでご紹介して、この点のご説明を終わりたいと思いますが、フランスのことわざに「国境までの愛国心と国境をこえた愛国心」という実にいいことわざがあるのです。国境までの愛国心は全く困ります。自分の国のことばかり考えるから、いやがられますね。はずかしめられますね。しかし、自分の国を大事にすることを基礎として、それを通して世界にプラスになるという愛国の精神が、21世紀につながる本当の大事な国際精神です。自分の国を大事にするという精神がなくて、外国に奉仕することはできません。日本人は時々こ

れがなくて、海外のことばかり気にしている人がある。これをコスモポリタンと申しますが、私たちはあくまでも日本を良くする、自分の周囲を良くする、まず家庭からですね。そして、これが結局自分のことばかりでなくて、世界にプラスになるという方向で日本の教育を考えること、これが流行の第二点と考ええます。

そして、流行の最後の第三は何かと申しますと、教育ということが一生の問題だということ、あらためて確認することです。これが生涯教育です。日本人はこの生涯教育という言葉を開きますと、四つ、間違った捉え方をしがちです。皆さん方はそうではないと思いますが、私が今まで接した方々の中には、第一に、ああいやだという考え方もたれるかたがあります。何故でしょう。勉強は学校だけで沢山なのに、一生勉強につきまといわれるというのは、何といういやなことだという考えです。これは学校が悪いのですよ。学校という所は本来楽しいはずで、楽しいはずの学校が楽しくないのは、学校が悪いのです。

第二は、ああ良かったという考え方。一生生涯勉強なら今少々怠けても、後で取り返しがつく。然し、そういう人に限って一生勉強しない。

第三は、これはさっきから申しておりますが、ひねくれた先生で、文部省が悪い、企業が悪い、と。現在の教育の悪い面を、生涯教育と言ってごまかしていると、こんな論文がある。とんでもないです。一生が勉強ですぞという考え方は、1965年の12月に国際機関で有名なユネスコが言い出したものです。その次の間違ひは、これこそ皆さん方とここでしっかり確認しておきたいのですが、一生が勉強だということは、学校だけが勉強の場所ではない、学校教育万能ではないということに

なるわけですが、そうなりますと驚いたことに、では学校は大したことはないと考えてしまう。さっき言ったように極端から極端に走る。これこそ、とんでもない間違いです。

生涯教育の三つの柱

ここで皆さん方と一緒に確認したいと思いますことは、生涯教育ということは、三つの大きな柱を考えるわけです。

第一の柱は家庭です。私が皆さん方のこの運動、全日本家庭教育研究会を、非常にありがたく大事に考えておりますことは、これからの日本の教育は、家庭をしっかりとなくちゃだめだからです。今まではあまりにも学校に頼りすぎた。大事なことは家庭です。しかし学校は全然意味がないというのでは断じてありません。学校はどのような点で意味があるかという、家庭が第一の基礎とすれば、学校は第二の基礎なのです。この二つが人間形成の教育の重要な基礎なのです。そして、これからの世界はこの二つが……大学教育も基礎ですよ、この二つの基礎を経て、社会に出た人たちが、いつでも勉強するために学校に帰る。これをリカーレント・エデュケーションと申します。学校に、社会教育機関に勉強しに帰ってくる。

私はここではっきり約束します。21世紀……皆さん方はそこで活躍していただくなくてはならない方々です。もうすぐです、20年余りで21世紀ですが、21世紀の世界の教育……日本の教育もそうですが、高等教育の段階では、大学と社会教育の区別がなくなることを、はっきり予言しておきます。もちろん大学がなくなるとは言いません。しかし社会教育機関がどんどん発達してくる。

もう一つ気をつけなければならないことは、世界の最近の動向として、大学の新入学生が

年を取ってからどんどん入ってくる。だから形態が変わってくる。これは私が言うのではなくて、私の知人の言葉でございますが、今までの世界の大学の学生は原則として若者だった。これから21世紀に通ずる世界の大学は、どういうふうになっていくかという、若者が直線的に大学に入ってくることをもちろん拒まないけども、より多くの学生は、リカーレントした学生。一度社会に出た人が勉強したくて学校に帰ってくる。しかも、それを行ったのはヘイワードというアメリカの学者ですが、ヘイワード先生は、そういう学校——大学ですが、リカーレントした学生の大部分は老人だとおっしゃった。

この間、アメリカの大学のある有名な総長が来られて、同じことをおっしゃった。驚きましたね。今アメリカでは、大学の新入学生の年齢がどんどん高くなっている。高等学校から一度社会に出て、そうしてまた勉強したくなって入ってくるのだ、というのです。

今までは、どこの大学をいつ出たか、ということが問題でした。学歴偏重ということですから。ところが生涯学習の時代に入ってくると、人間評価の尺度が全く変わってくる。第一は、何を知っており、何が出来るか、ということです。どこで学んでもよいわけです。そして第二は、いつでも勉強してたえず伸びているか否か。もう一つは、人柄です。こうした三つの尺度がものを言う社会を学習社会というのです。これは私が申すのではないのです。世界の動向で、ユネスコがこれをラーニングソサエティ（学習社会）と呼んでいるものです。こうしたこれから在るべき社会の根本は何かというと、絶えず勉強する一人一人。つまり自己学習者の存在です。ですから、自己学習と学習社会というものが、これからの日本の教育の根本の目標だということを申し上げ

げたわけです。

望ましい家庭教育

そこで、最後になりましたが、皆さん方が一番お聞きになりたいところで、この後、家庭教育の大事なところは申し上げるつもりですが、私は今まで、日本を始めとして、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカと、いろいろな国の家庭教育を私なりに一生懸命勉強させていただきまして、これからの家庭でどうしてもやっていただかなければならない教育の働きが六つあるという考えに立至っております。

第一は、どんな家庭でも、家庭教育の根本はやわらぎということです。家庭の落ち着いた雰囲気。ガサガサした環境ではだめだということ。落ち着き、やわらぎ、一家団欒ということ。これが家庭教育の根本の基礎なのです。

第二番目は何かというと、さっき申しました大黒柱、不易の世界につながるもので、思いやりです。そして先ず、人のことを考える。これは絶対に大切なことです。ただし、気をつけていただきたいことは、口先だけで思いやりのある子供さんをつくらうなんていうことは絶対に不可能だということです。イソップ物語りのカニの横ばいの有名な話ではありませんが、自分がやらなければだめですよ。家庭教育の根本は、お父さんお母さんの姿を後ろから見て、そこから学びとらせなければだめなのです。口でいくら言ったって、自分が実行しなければ、かえって反発します。

第三番目は、欲を押えることをぜひ心掛けてください。このごろの日本人はおしなべて欲張りに過ぎます。但し、人間というものは、根本的には欲を持たなければ育たないものです。カントという有名な哲学者が言ったよう

に、いい欲と悪い欲とがある。情ないことに打っちゃっておくと雑草が伸びてしまう。だから小さいときから、悪い欲は捨てさせて、こういうことはいけないことだということを、いろんな形で教える。これがしついで、絶対に必要なのです。

第四は、特にアメリカの家庭から学びたい点です。アメリカのよい家庭は、この点で、世界で一番優れているようです。それはどういうことかと言いますと、小さいときから人様に物を差し上げることを喜ぶ教育をする。人にプレゼントすることを喜ぶ。皆さん、ぜひこれをしてください。これはまず、何が必要かという点、家事の手伝いです、一番最初は。家庭生活はそれ自身社会生活です。ですから、2歳の子供さんからできること、またさせるべきことは、お膳にお皿を運ばせることです。家事の手伝いです。また、お父さんお母さんの誕生日とか、兄弟同士の誕生日に物をプレゼントする。それがやがて見知らない人にまでプレゼントするようになる。これが社会奉仕です。要するに、小さいときから人様に物を差し上げることを喜ぶような訓練。これは絶対に必要です。

その次は理性の教育です。理性とはどういうことかと言いますと、先ず約束を守ること。一番大事なことは何かと言いますと、人様から注意されることを喜ぶことです。人から注意されることを喜ぶことは本当に理性的なことなのです。だから、学者は批判されることを歓迎するわけです。自分の反省の材料として伸びていく。これが、小さいときからそういうしつけをするわけです。人から注意される……あなた方もそうですよ、人から注意されてブーッとするような家庭からは学者は育ちにくい。

以上に加えて最後は、身体です。世界のい

ろいろな国、特に韓国とか中国、ソ連などいろいろな国の子供さんたちのことを私は若干知っておりますが、皆さん方の子供さんはそうでないことを願いますが、日本の、大都会のお子さんは特にそうですが、ひ弱ですね。いけませんね。直してください。鍛えてください。その場合に、身体を鍛えるだけではなくて、根性も鍛えてください。がまんする精神を小さいときから養ってください。約束してください。私がしょっちゅう申していることは、なまかな勉強なんかよりも、いま申し上げた心身を鍛えることを家庭でしっかりやってくだされば、後はりっぱに学校でよい教育をくりひろげてくれます。もっとも、学校がりっぱでなければ困りますが。私は学校の先生に、りっぱな先生になっていただきたいということをしょっちゅう願っています。私たちは、先生方を大事にしますから、先生方は大事にされるに値する立派な先生になっていただきたい。そうですね。かつての日本はそうだったのです。

そこで、皆さん方とご一緒に確認したいことは、こういう家庭教育をしっかりやるということを基礎にして、学校と絶えず連絡する。しかも、これはあくまでも人間教育の基礎であるということを確認すべきです。そして、皆さん方に、このことがよくわかりいただけると思うのですが、実は家庭教育というのはお子さんたちだけのものではないのです。私たちの成人の教育でもあるわけです。私がよく言うことは、家風というものがいかに大事かということを考えていただきたい。

最後でございますが、私はお陰様で本当に元気です。実は普通の方なら亡くなったわけです。栄養失調で。九大の医学部の先生方が助けてくださいましたが、いくらお助けいただいても、こちら側が生き伸びるとい

うしなければ生きられなかったわけです。そのしんはどうして私にあったのか。よく私はいろいろな方から「なぜあなたはそんなに元気なのか」と言われますが、その時お答えすることは、私は小学校に入る前に剣道を習っていたということです。私は剣道の選手でした。中学の2年生のときに立派な辞令を校長先生からいただきまして、剣道部の助教に任じられました。これが沢山いただいた私の辞令の中で一番最初のものであります。大事にしております。私は皆さん方に申し上げたい。身体をしっかりしなければいくら勉強したってだめです。今、日本の子供さんたちは勉強しすぎていると思うのです。私は孫が沢山いますが、みんなに言っているのです。身体を鍛えなさい、と。

日本の今までの教育のことを申し上げたわけですが、ありがたいと思います。ただし、間違った時代もありましたね、それはあくまでも反省すること。但し、反動になっては困ります。そして今日申し上げた二つの大黒柱をしっかり打ち据えて、これから皆さんと共共前進して参りましょう。

実は私は日本の教育について、久しく心配をしておりましたが、この5、6年有難いことに反省の聲がとて強くなりました。今、そうした本は30冊以上もあります。こんなことではだめだ、という反省の本が。さっき申しました『日本の自殺』もその一つです。お忙しい中これだけ沢山の方がお集まりいただきましたこともその現れでしょう。ご静聴を感謝すると同時に、皆さん方の会が、これから先もさらに研究を進めていかれることを最後にお願ひして、今日のお話を終わりたいと思います。

(当財団理事)

家庭教育と学校教育・鼎談



は し が き

この鼎談は、去る3月14日、20世紀社の主催により、「現代社会における教育問題」と題して行われたもので、当面する学校教育の反省から、家庭教育の振興と充実の急務が強調され、勢い全日本家庭教育研究会が進める新しい教育運動が話題の中心となっており、今後の発展に期待が寄せられるところとなりました。概要ながら、ここにその談話を再録してご参考に供します。

出 席 者

文部政務次官 近藤 鉄雄

政治評論家 戸川 猪佐武
(司会)

当財団専務理事
全家研副会長 堀場 正夫

反省される学校教育

戸川 昨今は落ちこぼれ問題とともに少年の非行化や自殺行為がふえていますね。また一方では“子殺し多発社会”というか、若い母親たちの苦しみや身勝手な思いだけで、子どもの人生が、突然断たれるという風潮があります。こうした実情をみると、改めて教育のあり方を考え直すべき時期にきているんじゃないかと思えますけどね。

堀場 それも教育制度の改革ということよりも、まず教育の原点はどこにあるか、ということ、真剣に考えるべきでしょうね。

近藤 おっしゃるとおりでして、先日先輩

を殺傷したという事件が起きました滋賀県の野洲中学校に行き、校長や問題を起した生徒たちの担任の先生方をはじめ、関係者の方にお会いしたんですよ。そこで私が非常に驚いたのは校舎が立派だったんです(笑)。これは六人の生徒が卒業した小学校にも行ったんですが、その小学校の校舎もいいんです。また校長先生にしても担任の先生にしても、まじめで教育熱心なんです。そこで感じたことは、やはり教育というのは学校教育だけではない。家庭における教育も必要じゃないかということでした。

堀場 私どもは“家庭教育も必要”というより、むしろ“家庭教育こそ必要”だと思

ますね。なぜとって、すべての人は家庭から人生に入り、子どもから公民になる。そうしてみると、将来社会を良くするにも、また学校教育の効果を高めるためにも、家庭教育が基礎になるわけですからね。

戸川先生は子殺し多発社会といわれましたが、そういう母親はともかく、およそ人の親として、わが子の健やかな成長を願わない者はないわけです。ところで、その子どもですが、私どもの財団の理事長である平澤興先生の説によりますと、人間の精神中枢のある大脳表面には、およそ百四十億からの神経細胞で成っているとのことで、いかなる天才児といえども、これを完全に使い切った人は、まだないといわれています。すべての子どもには、それほど無限の可能性が秘められているということですよ。

近藤 可能性とは、やればできるという力ですね。

堀場 ええ。それも試験勉強のように、ねじり鉢巻で詰め込むのではなく、不断に、一歩ずつ進めることでしょね。たとえば、栄養があるからといって、一度に沢山食べたところで、にわかには身体が大きくなるわけのものではない。毎日三度三度お茶碗に一杯か二杯ずついただくから成長する。学習もそれと同じこと。まして品性を養うとなれば、即効薬的な効果を望んでもだめですね。そうして、こういうしつけができるのは家庭ではないでしょうか。そこには家庭教育の大きい役割があると思いますね。そのことを現に育ち盛りのお子さんをお持ちのお母さん方と、ともどもに考えて実践していこうというのが私どもの運動なんです。

近藤 その考えには大賛成ですね。けれども、最近は学校、家庭、社会の三者があまりにも自分たちの守備範囲を決めてしまってい

るように思うんですがね。そのために真空状況になっているところが多く、そこへ落ちこぼれた生徒がドロップアウトしていく。これは殺傷した生徒の家庭状況を見てもそのとおりでしたね。

戸川 学校の授業にしても理解している、していない、にかかわらずどんどん進めていくから、その面から授業についていけない生徒が出るでしょうね。

堀場 文部省その他の調査によっても、中学から高校へと、高学年に進むに従って、勉強の仕方がわからない生徒が多くなっています。それを救うにはどうしたらよいのか。

最近、札幌市内の小・中・高等学校の先生方が塾や家庭教師などによる学校外の学習状況について、いろいろ調査されたんです。

その結果を見ると、塾などに通うのは、成績の向上、学習方法の体得、受験技術の習得などを狙いとしているのですが、マイナス面として、学校での学習意欲の低下、思考過程の乱れ、生活の乱れ、体位・体力や、視力の減退などが見られるというんですね。そこで、知識の習得を重視するあまり、結論だけを覚えようとする姿勢——その転換を図る。言い換えれば、思考過程を大切にす自学自習の態度を育成するには、どうしたらよいかをいろいろと反省しておられるわけですが、それには児童・生徒の個性に応じた「魅力のある授業」を考えるとともに、家庭教育の責任を重視しておられます。つまり、家庭教育の機能を十分に生かすということが、学校教育にも大いにプラスになるというわけです。

近藤 なるほど。

堀場 これは全家研（全日本家庭教育研究会）が発足する当初から考えている平凡なことですが、実際に現職の先生方が調査されて、そういう結果が出たということは非常に良い

ことだと思えますね。おそらくこれは、全国の小・中・高等学校の先生方とか父兄の方々も考えておられることではないでしょうか。

教育の原点をめざして

戸川 ある意味では教育の原点に返りつつあるといえるでしょうね。

近藤 それは言えると思えますよ。と同時に、学校というものを聖域にはいけないと思えますね。学校は一種の特殊聖域だけに外部との競争がないわけだから、教師のなかには怠ける人も出てくるようになるんであって、家庭でも人間形成のための教育をしていれば、先生も怠けるわけにはいかない(笑)。

堀場 先生方にとっても励みになりましょうね(笑)。ただ、そのためには家庭自体が単なる憩いの場でなく、やはり人づくりのための基本的な教育の場であることをお互いに考える必要があると思えますね。いやしくも児童、生徒が先生の名前を呼び捨てにするとか、無礼な言葉づかいで対応するのはもってのほかで、こうしたことがないようにしつけるのも家庭でしょうね。

家庭教育には、二つの大きな役割があります。人づくりと自主学習ですね。特に子どもの人づくり、すなわち人間としての基礎的な性格をつくりあげることが重要なのです。それには、まじめさ、たくましさ、思いやり、感謝の心などいろいろありますが、一番基本となるのが誠実さだと思えますね。

近藤 まったくそのとおりです。

堀場 自己に対し、人に対し、物に対し、また仕事に対して、あくまでも素直に、まじめに、やるべきことはやり通す人間をつくる。それには子どものころから習慣的に身に付けさせることですよ。

学習の面からみますと、一般に勉強のでき

る子、できない子といいますが、先ほどお話しした子どものもつ無限の可能性を考えると、まことに近視的な見方というもので、のみこみの速い子が必ずしも物事を深く考え、創造性に富んだ有能な人とは限りません。

いま社会で立派な仕事をしている人たちの中には、学校の成績があまりよくなかったという人だっておられますよ。

戸川 小学生や中学生のときに秀才といわれていた人が、社会に出る頃にはただの人になっていたという事だっただけよくありますね。

堀場 “天才は汗だ”といわれるけども、学習も遅い早いの違いはあっても、手順よくやれば必ずできるものなんです。それには親が子どもの個性をよくわきまえ、スタートの時点から子どものつまづきを放っておかないで、わからないところはわかるまで自ら進んで学習するよう手当てを講じてやることです。つまり、子どもが途中でやめないように指導すること。それには、子どもが現在、学校でどんな学習をしているか、親も知っておかなければならない。全家研の「月刊ポピー」は、そういうことがわかるような仕組みになっている教材です。すでにご承知のように、勉強が面白くなるのは授業のなかで、理解しないうちに先に進んでしまい、だんだんわからない部分が増えてくる。すると面白くなくなってくるでしょう。これが落ちこぼれを生み出す原因になるわけですが、本来、子どもというのは、いろんな物事に大人よりも新鮮な興味や関心があるもので、わかれば勉強も楽しくなる。ところが、現在の学校教育には限界がありまして、なかなか個別にわかるまで教えるというわけにはいかないんです。だから、わからないところは家に帰ってから、学習指導を兼ねた自主学習のための教材「ポピー」を使って学習させる。そうすれば、誰でもわ

かと思うんです。わかれば面白いから勉強することが楽しくなる。これは小学生、中学生には、特に必要だと思いますね。こうして基礎学力をつけていけばいいんですが、現実には基本がしっかりしてないから、高校、大学と進学しても力がつかないんです。

これは全家研が会員家庭に配布している「月刊・ポピー」という学習教材ですが、小学1年から中学3年まで各学年とも文部省の学習指導要領と現行教科書に準拠して、小学生には国・算・理・社の四教科、中学生にはプラス英語の五教科、内容は子どもたちが楽しく学習できるように編集してあります。

近藤（小学3年用の「ポピー」の頁を繰りながら）これは非常に良く編集されていますねえ。親が子どもと一緒に勉強しても楽しいですよ。科目も算数、国語、理科、社会の主要科目が中心ですね。

戸川 この内容ならば母親もアレルギーを起こすことはないでしょう（笑）。

堀場 それが、私どもの重要な狙いなんです。ですから、会員の方には毎月家庭教育の資料として差し上げています。なぜならば、小・中学校では各教科の学習が課せられてますが、大部分の生徒は一斉授業だけでは会得してない。そこで帰宅してから教わった個所を繰り返し学習すると、基礎学力は身につくわけですね。ちょうど運動の選手が繰り返して反復練習するから、あれだけの能力を発揮できるのと同じことだと思います。

以前、家庭での学習は先走りして困るといわれたことがあったでしょう。

近藤 ありましたね。教育は学校で受けるものであり、家庭でやらせると困るといったような……。

堀場 あれは誤解だと思いますが、やはり家庭でも自習時間はほしいですね。しかもわ

ずかな時間でいいんです。あくまでもはつきりと理解することが目的ですからね。たとえば、この「ポピー」でも、小学生なら一日に、たった15分か20分ぐらいでいいですよ。実際に会員の方からは“おかげさまで自分で勉強するようになり、家庭教師も塾も必要ありません”という感謝のお手紙を多数頂いてます。「ポピー」を使った結果、成績が良くなったということよりも、自分で理解し解決していく力をつけるということが一番大切なことであって、これは将来、その子の人生に大きく役立つと思いますね。

社会の要請

戸川 堀場先生のお話を伺ってますと、家庭教育が教育の根本であることは、よくわかりますが、こうした考え方は財団法人・日本教材文化研究財団を設立された昭和四十五年のときには、すでにあったわけですね。

堀場 ええ。財団法人として設立したのは四十五年。その前年である四十四年にアメリカがアポロを打ち上げた。それから産業界もそうですが、教育界もずいぶん変わってきた。それも現代科学の粋を集めた教育機器などの利用による新しい教材教具の開発が重要な課題となってきたわけです。しかし、基礎学力を養う小・中学校の過程で、なんでもかんでも機器を導入することが良いのか悪いのか。これを私ども研究財団で研究しようじゃないか、というので設立したわけです。

発起人理事には、平澤先生をはじめ、国立教育研究所の平塚益徳先生、教育課程審議会の副会長・鯉坂二夫先生、筑波大学の辰野千寿先生といった方々をご参画くださいましてね。海外の教育事情調査もやりました。

近藤 いまは情報社会といわれるけれども、これからはもっと高度学習社会になり、生涯

教育の時代といわれますからね。

堀場 だから、その基礎ともなる学校教育にしても、従来の教授方法の上にさらに発展する社会にふさわしい学習指導上の技術の研究。さらに技術革新が進展する将来にわたって、その社会が要求する人間の能力開発と調和のある心性を養うための新しい教育システムの在り方。

設立以来二年間、そうした趣旨のもとに、西は大阪、東は東京で全国から小・中学校の各教科の先生方に集まっていたいただき研修会を開いたんです。その過程で問題になってきたのは、進学競争の激化とともに、児童生徒の学力の低下ということですね。学校多くして教育なしというのでしょうか、そこで考えたのは、家庭というもの、家庭教育を、もう少し考え直したほうがいいんじゃないか、ということでした。というのは、先にも申し述べたように、家庭生活は、子どもたちにとって社会に出る準備で、よい習慣がつくられたり、知識がめざまされたりするのは、みな家庭においてだからです。つまり、当面の学校教育を受けるにしても、家庭教育がしっかりしないと、本当の効果が現われないでしょう。そういうことから家全研の運動——すわなち、家庭こそ教育の基本、という運動が始まったわけです。

近藤 滋賀県で起こった問題にしても家庭に問題があったと思いますね。といっても、現実に関われば問題が起きたときは相談にのる人がいなければならないわけですよ。中学生にもなると親にも相談できなくなる。それが鬱屈してくると非行とか自殺をするようになるわけですよ。そうした教育相談もしておられるそうですね。

堀場 ええ、やっております。家庭教育といっても学校でする教課の学習だけでなく、

健康、進路、学習、生活指導等の問題が総合的に含まれていますからね。しかも地域や環境の変化などがあり、いろいろ千差万別の難しい問題が出てきます。その問題を誰かが相談に応じて解決していく努力をしなければなりません。そうすることによって望ましい家庭教育を、子どもたちにとって良い環境づくりをしようというのが、全家研の目的です。そのために会員家庭での学習指導のほかに、もう一つ重要なのが教育対話活動です。それには全国各支部に、小・中学校の校長をなさった、教職経験豊かな先生方が教育対話主宰としてご参画くださって、実に活発に対話活動を進めているわけです。現在、その担当主宰が200名あまりおられます。そのほかに、地域の会員のお世話をなさる賛助会員（モニター）が約一万名おられましてね。このかたがたは一般会員だったお母さんがたですが、この運動に共鳴してくださって進んで会員のお世話をさせていただいているんですが、こういう方々の協力によって、地域ごとに教育講演会、母親セミナーを行ったり、学習指導、個人的な教育相談など、時には母子ぐるみのレクリエーションを催したりして、いろいろと教育対話を進めているわけです。

豊かな総合能力を

近藤 簡単にいえば、共鳴の輪を広げる活動ということでしょうね。

堀場 そうですね。家庭教育となると、誰かが指導したり指図したりするものでなく、やはり相互理解のもとに対話を重ねることが必要ですからね。特に第一線に活動されるモニターの方々は、この教材を子どもに使わせ、自分も種々の行事に参加されているうちに、この運動に共鳴されてのことと思うんですが、積極的に一人で30人とか50人、多い方は100

人を超える会員を誘われた方もおられまして、それぞれお世話をねがっているわけです。で、その方がグループのリーダーとなって春秋二回は、母子ぐるみの何か会をもって楽しんでおられます。私どもはこれこそ地域社会の望ましい教育運動だと考えて、心から感謝していますけどね。

戸川 それが他社の組織と異なるところですね。会員は30万人ぐらいですか。

堀場 いえ、50万人を超えています。「ポピー」にしても、本来は子どもが日常しなければならない仕事のひとつと考え、それを遊びと同じように楽しくするには、どうしたらよいか。そんなことを充分考慮に入れて仕組んである。したがって、これを「総合システム教材」と呼んでいます。

近藤 単なる学習だけではないですからね。しかし、電話による相談も多いでしょう。

堀場 しょっちゅうかかってくるね。内容に応じて必要があれば教育対話主事の先生がその家庭に出向して、お母さん方と懇談する、あるいは子どもと話し合っただけで直接問題を解決するようにしております。これが私どもの運動の中でも、非常に大きな役割りを占めています。

近藤 この「ポピー」を拝見して感心したのは“こころの文庫”に見られるように、情操教育もなされていることですよ。

堀場 そうなんです。総合システム教材というのは、単に四科目のワークだけではなく、この教材全部をひっくるめて徳育とか情操教育にも役立つようにしてあります。“こころの文庫”は最近、小・中学生の国語力が低下していることから始めたわけです。すべての基礎は自国語に関する知識にあると言われますが、それには、なんとと言っても古今の名著名作といわれるものによって、生きた国語の

はたらきを学ぶのが一番です。それから学校で国語とか社会とか歴史を教えながら、改めて修身道徳を説かなければならないというの、ずいぶんおかしなことですよ。理科や算数にしても同じことです。そうしたことから、私どもは「総合システム教材」と呼んで、関連づけをしているわけです。

近藤 そうして関連づけていけば、他の科目にも自然に興味をもつでしょうし、また情操面でも豊かになり、かつ徳育もできる。こういうことこそ家庭でしか教育できないと思いますね。大変理想的ですよ。

堀場 お父さん、お母さんが子どもと一緒に勉強することは子どもにとって励みになるんですよ。機械的に勉強するよりも、わからない部分にぶつかったとき、傍でお母さんが、“どれ、いっしょに考えましょう”といえ、熱意も違ってきます。こうして親子で毎日楽しく勉強すれば、勉強すること自体が習慣になるし、喜んでするようになりますよ。

近藤 昔は両親と勉強するといったことがあったんですが、現在ではまったくない。親とのコミュニケーション、そして基礎学力のない人が子どもをもつと、平気で殺してしまうような人間になると思いますね。私も自分の子どもと、もう一度勉強し直しますよ。あまり、できは良くないですから(笑)。

堀場 いや、私なども同様です(笑)。

戸川 教育というのは人づくりの基礎になるわけですから、大変重要かつ有意義なお仕事です。今後はもっとこの運動の輪を広げていただきたいですね。

堀場 この全家研運動によって、何よりも私どもが大変勉強させていただいているわけですよ。

近藤 がんばってください。

戸川 今日は有意義なお話をありがとうございました。



地域改造と自然の報復

——ナイルからボルガ流域まで——

石 弘 之

世界各地で、自然の大改造が進んでいる。川がせき止められて巨大な人工湖が生れ、地表がえぐられて、長大な運河が掘られる。森林は広範囲に丸坊主にされて畑や放牧地へと変り、山は切り崩されて湖や海岸が埋立てられる。

人類の歴史は見方を変えれば、自然改造の歴史であった。近年、それは「改造」と呼ぶにはあまりにも規模が大きくなり、思いもかけぬ影響が深刻になってきた。もはや「破壊」と呼ぶべき改造も多い。このような自然改造は多くの場合、人類の自然に対する輝かしい勝利として語られてきた。だが本当に勝利だったのだろうか。

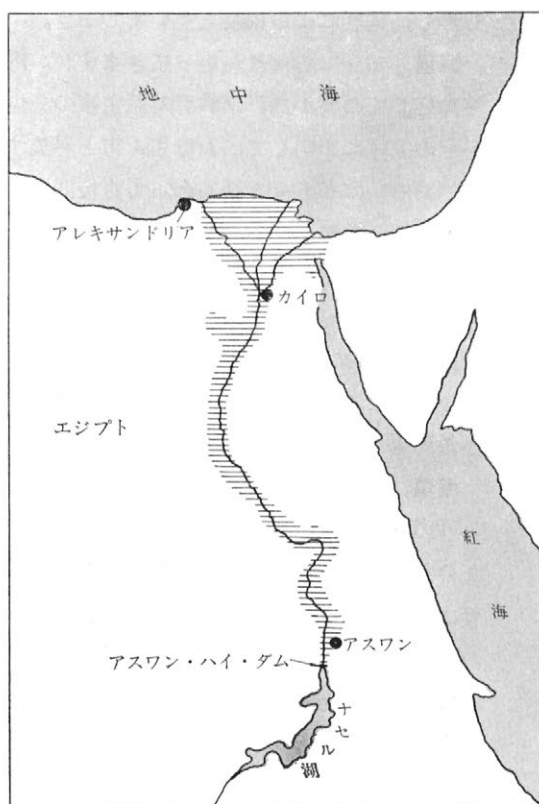
ここに二つの例を提示してみたい。とくに近年の世界的な水不足から進められている、水資源開発にまつわる自然大改造計画を取り上げてみよう。

アスワン・ハイ・ダム の功罪

エジプトの地形は、1本のユリにたとえられる。全長6,700 Kmという世界第三の長い曲りくねった川は「茎」。地中海にそそぐデルタ地帯が「花」となって開き、花の西側にはファイウム盆地が「蕾」となっている（地図1）。エジプトは「ナイルのたまもの」といわれるように、国土の97%は砂漠が占めるエ

ジプトにあつては、生産でも生活でもナイル川がすべてである。

有名なナイル川の氾濫は、きわめて雄大なものだった。5月から6月にかけて、上流のエチオピアの山地に季節風によって豪雨がやってくる。奔流が植物の残骸、動物の死体などの有機物を押し流し、網の目のような支流



〔図1〕 ナイル川の流域

が青ナイルとアトラバ川に集まり、少しずつ増水しながら、地中海を目指して流れていく。カイロ付近では7月中旬から水位が上がり始め、10月から11月にかけて最高の水位となり、しだいに減水していく。この増水は“静かな洪水”となって一面水浸しになるが、引いたあとは肥沃な沈澱物が大地を覆う。

古代ギリシャの歴史家ヘロドトス（BC. 484~425）は、ナイル川の氾濫の効用について次のように記している。

「彼らは鋤で畝をおこす労も、掘りさげる労も、ほかの人間が収穫について骨折るどんな仕事をする労もとらないで、川がおのずから水かさをましてきて、彼らの田畑を灌漑し、それがまたもとに減水するとすぐ、めいめいが田畑に種子をまき、そこへ豚を入れ、種子を踏みつけさせると、その後は収穫を待つだけであった」（大世界史1より）

この豊かなナイル川によって、輝かしい古代文明の花が開いたのである。

だが、この洪水の現象そのものだけにしか目を向けない人にとっては、ナイル川は困り者だった。年の3分の1は水びたしにするうえ、砂漠を流れる貴重な水を無駄に地中海に流してしまう。これをうまくせき止めることができれば、灌漑に回して砂漠を緑化し、また莫大な電力を産み出せる。エジプトのナセル大統領もこう考えた。

ナセル大統領は1956年にスエズ運河の国有化を宣言、これに反対するイギリス、フランスが軍事行動を起こした。だが、ソ連が介入、その強力な圧力で、撤兵せざるを得なかった。急速にソ連に近づいたエジプトはその援助で、念願のアスワン・ハイ・ダム計画に着手した。

エジプトに飢饉はないが、年間2.5%の人口増加率で、3960万人（1978年央推定）の人口は28年後には2倍にふくれ上がることが見込

まれている。耕地の不足も慢性化している。国民の57%は農業に従事し、GNPの31%、輸出総額の50%が農業に依存しているこの国にとっては深刻な問題だ。

もし、河口から960km上流のアスワンでナイル川をせき止めてダムをつくれれば、100万haの面積を灌漑でき、年間100億kw近い電力が供給できる。そうすれば、10年間で国民所得は2倍になり、後進地域から離陸できる——ナセル大統領はこの夢に賭け、ソ連からの全面的援助をあおいで、1960年に着工した。

64年から貯水を開始、67年には一部発電を始めた。そして、10余年の歳月をかけて、1971年1月15日に完成式をあげた。堰高155m、堰長3,800m、有効貯水量1630億tという、ロックフィル・ダムとしては世界最大のものとなった。総工費は当初の計画の3倍にふくれ上がり、約15億ドルにものぼり、毎年国家予算の4分の1を投入した。

この“現代のピラミッド”とも形容される大工事に、第三世界は拍手かっさいを送り、エジプトの威信も高まった。ところが、思わぬ伏兵が姿を現した。

68年12月、米国バージニア州で開かれたワシントン大学生物学センターとワシントン自然保護基金共催の「低開発国援助の環境的側面に関するセミナー」で、アスワン・ハイ・ダム批判の口火が切られた。この会議には、コロラド大学のケネス・ボールディング教授、ワシントン大学のバリー・コモナー教授など、20カ国から70人の専門家が集まった。席上、カール・ジョージ博士が、「東部地中海に対するアスワン・ハイ・ダムの環境学的影響の予備的考察」と題する発表を行い、このダムがいかに環境に大打撃を与えたかを、初めて指摘した。ボールディング教授は、この研究発表を聞いて、「これは開発恐怖物語だ」と

嘆息したという。

その後、米シガン大学の調査団、エジプト科学技術アカデミーの調査などによって、このダムがエジプトや地中海の生態系をズタズタにしてしまった実態が明らかになってきた。その大筋を紹介しよう。

ナイルは洪水とともに、有機物をいっぱい含んだ肥沃の土砂を運んできた。この天然の肥料は、毎年1億3,000万tにも及ぶ。ところが、ダムができたお蔭で、この「天然肥料」はダムがせき止めた人造湖と、その上流に堆積して、そこから1,000km近くも続いている下流の農業地帯には、回らなくなってしまった。最近のエジプトの調査によると、ダムから410km上流と345km上流の間で51%が沈積し、残りもダムから60kmぐらゐまでの間で沈むという。

熱帯の土地は、日本のような温暖なところとは違って、有機物の分解がきわめて早い。土の中の有機物が失われるのに、上流からの供給がないためにどんどん不毛化し始め、新たに化学肥料をやる必要が出てきた。エジプト政府と世界銀行がこの肥料の額を計算したところ、年間1億ドル以上もかかるという結果が出た。むろん、それまでは化学肥料など考えてもみなかった地域だ。

当然のことながら、ナイル川が地中海に運び込む有機物も激減し、これがめぐりめぐって漁業にまで深刻な影響を与えている。地中海にはナイル川から年間300億tの水がそそぎ込まれ、これには栄養分がたっぷり含まれていた。もともと栄養分の少ない地中海にとっては重要なもので、これによってプランクトンが発生、ナイル河口沖はプランクトンに魚が集まるため、好漁場だった。

それまで年間1万8,000t、700万ドル相当のイワシの水揚げがあった。それが、今では

500tにも満たない。漁民3万人が、生計の道を奪われたという。原因は栄養分が以前の3分の1に減って、プランクトンが少なくなり、イワシも減ってしまった、というわけだ。

イワシの激減したもう一つの理由は、大量の淡水が流れ込まなくなったために、海水の塩分濃度の下がる時期が消えうせてしまったことがあげられる。河口近くのイワシの孵化期は洪水の直前で、大量の淡水で海水が薄まったときに育つように適応している。洪水がなくなったために、孵化後も塩分濃度が下がらず、いつも洪水によって運ばれてくる栄養分が途絶え、姿を消さざるを得ない運命となった。むろん、イワシを食べているマグロなど他の魚種も減りつつある。このところ、地中海の漁獲量は、ほぼ頭打ちでむしろ下がり始めているのも、これが影響し、地中海最大の漁獲国イタリアでは、魚価が高騰している。

有機物の堆積する上流では、魚が今までになくとれるようになったが、人口稠密のデルタまでは遠すぎて、とって運べない。

海岸はつねに波によって削られ、それを上流から運ばれてくる土砂が補っている。しかし、この補給分がなくなって海岸の侵食は加速度的に進み、エジプト第2の都市アレキサンドリアでは、ソ連の援助でナイル川の支流のダミエッタ分流河口の港湾施設を作るはずだったのも侵食がひどすぎてご破算になった。

ダム建設最大の目的だった灌漑も思うように進んでいない。エジプト政府もこれには頭を抱えっぱなしだ。これまでは、年間3分の1も水浸しだから水をやる必要がなかった。今度は洪水の代わりに、灌漑水路を縦横に張りめぐらせてやる必要が出てきた。水路を整備するには1ha当たり1,500~3,000ドルもかかる。当初は計画から大幅に遅れていたが、政府当局者によると、当初計画の52万haの

うち 40 万 ha の灌漑が完成もしくは進行中だという。これによって、耕地面積は国土の 3% から 5% 近くにもなった。

だが、ようやく灌漑水路の整備されたところで、思わぬ落とし穴があった。土壌中の塩分濃度が徐々に上昇し、耕作不能地域が拡大していたのである。現在では、砂漠や乾燥地帯の灌漑では、この塩分蓄積が最大の障害であることはよく知られている。地下からは毛細管現象によって、水分にわずかに溶けた塩分が上昇してくる。日本のような国では豊富な降水がこれを薄めてしまい、ナイル川流域では洪水が塩分を洗い流していた。

この「洗浄水」がなくなって塩分がたまり出した。灌漑用水も、土中の塩分を溶かして運んでくる。適当な排水施設さえあれば問題ないが、灌漑網の末端の袋小路では、どんどん塩分が蓄積され、作物も育たなくなっていた。一般に、砂漠で植物が育ちにくいのは、雨そのものの不足というより、地表から浸み込む淡水が少ないため、地中の塩分濃度が上がって植物の成育を阻害するためだ。専門家は、このままでは、灌漑地のかなりの部分が不毛化すると警告している。

さらに、恐ろしいことが起こった。ダムが完成してから、住民の間にビルハルツ住血吸虫という寄生虫が蔓延し始めた。川で水浴しているときや、食物や飲み水にまぎれ込んで体内に侵入、血管や膀胱などの内臓に寄生する。これにかかると、心臓、肝臓、肺などに障害を起し、慢性的胃痛を訴えて、からだは衰弱して、ひどいときは内臓を食い破られて死に至る。昔からエジプトにはいた寄生虫で、ツタンカーメン王の墓のミイラを調べたら、その内臓にも卵があったというぐらいだ。

この寄生虫の中間宿主はカタツムリの一種。ダムのできる前は、洪水でカタツムリが洗い

流されていたから、大流行することもなかった。しかし、新たな作られた灌漑用水路は流れもゆるやかで、しかも雑草が繁茂したために、カタツムリの絶好の繁殖地となり、爆発的にふえた。これにつれて、人間の保虫者も激増、農村部では数倍にもなり、70% がこの寄生虫にとりつかれているという。

暑いさ中でも、子どもたちは用水路やため池に入るものが禁じられている。エジプトは農民保護のため、30 万 ha に薬剤を散布したが、サダト大統領は昨年、記者会見であまり効果のなかったことを認めた。世界保健機構（WHO）の推定では、寄生虫にとりつかれると、体が弱って 1 日 3 時間ぐらいしか働けなくなるため、労働損失は年間 4 億ドルにもぼると見積っている。

灌漑と並ぶもう一つの目的、発電の方はどうだろうか。12 基の巨大タービンが、100 億 kw の電力を産み出すはずだったが、まだ 7 ～ 8 基しか動いていない。4,000 の農村はいまだに電気が通っていない。送ろうにも送電網が完成していないのだ。一方では発電機を遊ばせ、一方で電気のない生活を送っている。また、ダムの管理が灌漑・農地改革省の下に置かれ、発電よりもつねに灌漑が優先されているのも、フル稼働していない一因だ。

その後、エジプトはソ連とたもとを分ち、70 年にナセル急死のあとを継いだサダト大統領は、72 年にはダム関係のソ連技術者もすべて追い出した。目下、ダムによる思わぬ副作用の対策は、米国が中心になって援助している。

ダム建設が開始された直後、エジプトの著名な水利学者アベル・アジツ・アームッド博士はロンドンの国際工学会で「ダムはエジプトの生態系や伝統的な灌漑法を根底からくつがえす危険なものだ」と警告した。ところ

が帰国後、ナセル大統領にいらまれてこの警告を撤回させられ、強制的に引退させられた。不幸にも博士の警告は次々に適中する結果となった。

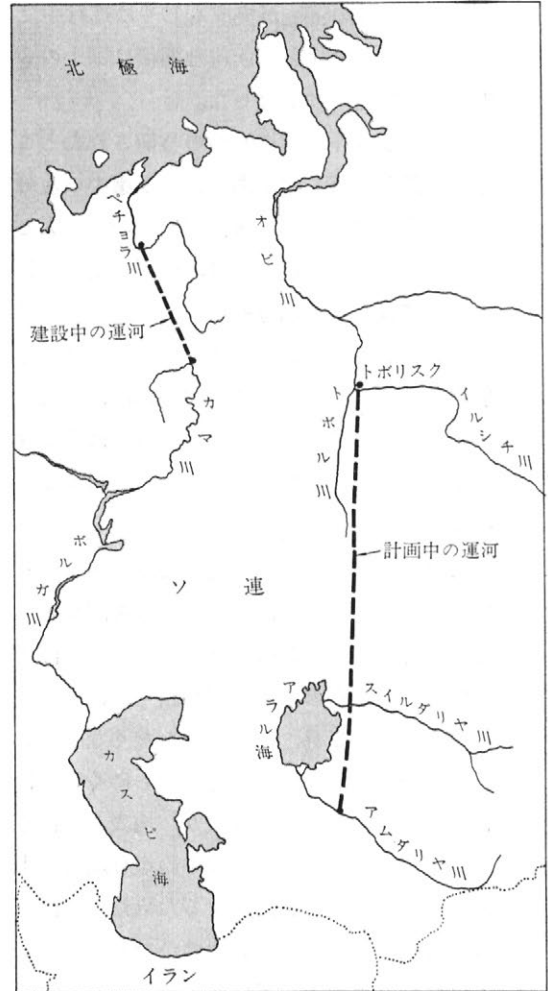
だが、一方的に欠陥だけをあげつらうのはフェアでないだろう。1972~73年のアフリカ大干ばつのときに、エジプトだけはこのダムのお陰で、ほとんど影響を蒙らず、コメと綿も豊作だった。また、今でこそ発電能力を利用しきれないが、これによって工業化を促進する潜在性も大きいだろう。ダムによって得た利益と、将来に重大な禍根を残す生態系的破壊と、そのバランスシートはまだ出ていない。それは、先進国が出すものではなく、エジプト自身が決めることであろう。

原発で運河掘削

数字の上では、ソ連は世界有数の水資源国だ。世界の淡水の12%はソ連にある。ところが、皮肉なことに、これらの豊富な水の85%は、北部や東部の人口稀薄地帯にあって、シベリアのタイガをぬって流れ、あるいは人の手に触れぬままに北極海へとそそぐ。農業や工業の集中している南部や西部は、15%の水しか存在しない。

この南、西部を中心に、1971~75年に水需要は39%も増大したのに、新規の水資源はわずか12%しかふえなかった。干ばつの影響も加わって、ボルガ川流域、コーカサス、カザフスタン、ヨーロッパ・ロシア北西部の水不足はこのところ深刻さをまし、政府は工場や一般市民に向けて再三、水の節約令を出している。

とくに、ソ連の穀倉地帯カザフスタンは、乾燥が一段と激しくなってきた。その良い例が、世界最大の湖カスピ海の水位の低下だ。1945年以来、水位は3mも下がっている。隣



〔図2〕ソ連の運河計画

のアラル海でもこの10年間に2.3m水位が低下した。カスピ海は単なる取水源だけではない。漁場としても重要であり、とくにここでとれるチョウザメの卵、キャビアは最も美味なものとして珍重されている。また、バク油田の石油をボルガ川沿いの内陸の港に運ぶ、オイル・ルートでもある。

この水位の異常低下で、1945年には60万tもあった漁獲量が、最近では10万t前後にまで落ち込み、かつての漁港や港湾施設も今でははるか岸の上になってしまった。

カスピ海やアラール海の異常の水位低下は、

この一帯の乾燥化に加えて、灌漑が進み、湖へ流れ込むボルガ川などの川からの取水が年々増大していることも原因だ。西側の専門家は、新たな水源が発見できなければ、1980年代末にはボルガ—カスピ海一帯で500億tの水が毎年不足すると見ている。これは、日本で1985年ごろに不足すると予想される水量の10倍もある。しかも、周辺の工場排水の流入もひどく、水質汚染も進行している。

この一帯の水不足のために、ついに政権から失脚したのは、フルシチョフ元首相だった。カザフスタン地方は、雨は少ないがソ連国内では最も日照量の豊富な一帯で、水さえあれば作柄が安定する。慢性的な農業不安を抱えて、フルシチョフはカザフスタンの開拓に力を入れた。一時はソ連の印刷物を埋め尽した「処女地開拓」計画である。だが、1963年の干ばつで、平年の3割以上もの減産になる凶作となり、カナダから大量の小麦を輸入して急場をしのいだ。「同志フルシチョフは奇跡の人だ。カザフスタンでタネをまいて、カナダでとり入れた」という笑話話がモスクワではやったのもこのころだ。

この失敗の責任を問われて、フルシチョフは翌64年に政権の座を追われた。

しかし、ブレジネフ政権もこの一帯の開拓を引き継いだ。これまでの地球の改造計画でも、例をみない雄大な構想がそれだ。北極海に流れ込む川をせき止めて、その水をボルガ上流の支流に流し込んで、カスピ海までもってこようというのだ。「ドミトリエフ計画」というのが、この世紀の大工事の名称だ。

まず、北極海に注ぐペチョラ川を上流に巨大なダムを作ってせき止める。これでできる人造湖は150万haという広大なものだ。一方、南下してカスピ海に注ぐヨーロッパ最大の川、ボルガ川は上流の支流のカマ川にダムを建設

する。この二つのダムは200kmも離れていない上、水位差も60mほどしかないので、運河で簡単につながることができる。ペチョラ川のダムの水を、運河を通じてカマ川のダムに流し、そこからボルガの本流を通してカスピ海までもっていくことができる。

ペチョラ川から南下させる水量は420億tは期待でき、ボルガ川とカスピ海を蘇生させるばかりでなく、乾燥地帯の10万haを灌漑できる計算だ。

この大工事が進んでいることは西側でも薄々感づいていたが、正式に発表されたのは、1975年3月ウィーンで開かれた国際原子力機関（IAEA）の会議のときだった。このとき、ソ連は1971年に原爆を使って二つのダムを結ぶ運河の掘削をしたことを公表して、衝撃を与えた。

その発表によると、15kt（広島原爆は20kt）の原爆をそれぞれ150m離して三つを一行に並べて、同時に爆発させた。このとき、運河の予定地の両側に強固な防壁を築いておいたという。その後、詳細を発表したソ連の「水文技術・建築」誌によると、この爆発で長さ700m、幅350m、深さ10~15mの溝ができた。数百カ所で放射能の測定をしたが、人体に影響のないほどわずかで、二日後には溝の中で作業が再開できた。被害らしきものといえば、近くの工事事務所のレンガのオープンと壁のしっくいにひびが入ったぐらいだったという。

このペチョラ川南流には、全部で10基のダムが必要だが、すでに3基が完成、2基が工事中という。完成がいつになるかはわからないが、総工費は数十億ドルにのぼるだろうと西側の専門家はみている。

さらにもう一つの野心的な計画も立てられている。やはり、北極海に流れるオビ川を上

流の支流トボル川でせき止め、それをアラル海に流れ込むスイルダリヤ川に運河でつなげるものだ。この総工費は1,000億ドルに達するとみられ、着工は当分先のことも考えられている。さらに、東側にあるエニセイ川についても、同様の構想を立てている。

以上が、俗にいわゆる「シベリア3大河川の反流計画」である。15年間でこの3つの大工事を完成させる意図ともいわれ、そのあかつきには、343haの不毛の土地が灌漑されるという。

以上の大計画に対して、欧米の気象学者らは、一様に大きな影響を心配している。アスワン・ハイ・ダムに比べて、その影響は地球全体に及ぶのではないか、というのだ。こうした不安は、イギリスの代表的気象学者ヒューバート・ラム氏の警告に代表される。

もしも、3大河川の逆流が実現すれば、現在北極海に流れ込んでいる水量は半減する。

すると北極海の塩分濃度が上がり、凍結点が下がって凍りにくくなり、極冠の氷の面積が縮んで北極の気候帯が小さくなる。この結果、世界の気候帯は順送りに北へ押し上げられ、たとえば、地中海一帯は北アフリカの気候となり、地中海型気候がヨーロッパの北方にまで広がってくる。北アメリカでは、穀倉

地帯の太平洋に、南の砂漠地帯がせり上がってくるかもしれない。

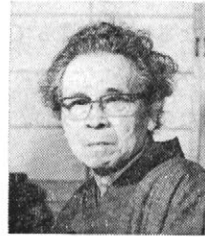
また、これと反対の見方もある。北極海に注ぎ込む川の水温は、海水温と比べればかなり暖かい。これが途絶えると、北極海の冷え込みが一段ときびしくなり、極冠の氷の面積も大きくなって、北半球が今よりも寒くなり、さらに、極冠が大きくなれば、それだけ海水が氷となって、海面が下がるというのだ。

いずれにせよ、北極の気候は北半球の気候にきわめて大きな影響力をもっている。日本の夏が暑くても寒くても、北極の気圧配置や大気の流れで説明されることからよくわかる。自然のことをよくわからないままにいじくり回すと、アスワン・ハイ・ダムのような結果にもなりかねないと、専門家は不安を抱いているのだ。

筆者紹介 朝日新聞外報部・資源、環境、軍縮などの問題を担当。移動特派員として、北アメリカ、南アメリカ、ヨーロッパ、アジア、オセアニアなどの各地取材。主な訳書に「土は生きている」「失われゆく大地」「石油汚染と海の生態」(紀伊国屋書店)など。主な著書に「PCB—人類を食う文明の先兵」「未来はあるか」(朝日新聞、共著)「よそもの紳士大いばり」(ブリタニカ)などがある。

墨筆談義

羽石光志・談



まえがき

羽石光志画伯は、日本美術院同人であり、大和絵の正統を承けついで、さきには法隆寺の壁面再現の事業に参画し、六号壁と二号壁を執筆、更に日光東照宮国宝陽明門天井の上り竜と下り竜を復元するなど、伝統美術史上に数々の業績をあげて今日の日本画壇に重きを成しておられますが、このたび当財団監修のもとに「こころの文庫」を発行するにあたっては、全日本家庭教育研究会の会員読者（小中学生）のために、その彩筆を請うたところ、幸い創刊の趣旨を諒とせられ、児童用には「日本武尊」（保田與重郎著）、「聖徳太子」（同著）、「菅原道真」（浅野晃著）、中学生用には「萬葉集物語」（保田與重郎著）、「芭蕉物語」（麻生磯次著）等の歴史風物画を快く揮毫。その水墨による鮮やかな線描の美は、読者に清新な印象をあたえ、大いによろこばれつつあります。その間、編集者はしばしば画伯の画房に参じ、大和絵の伝統美術にふれて、墨と筆との運用による創造の技法等につき趣味豊かな説をうかがうにつけ、門外漢ながら今日の日本画壇の新傾向と学芸一般について思いあたるふしがあり、それはまた戦後三十年にわたる教育上の問題でもあることを痛感しました。ここにその一端、某日某日の談話を再録し、大方のご参考に供します。（文責・記者）

——（先日、おうかがいした時、水墨画のことから、日ごろお使いになっている筆とか墨とかの運用技法について、いろいろとお話をうかがい、大変に興味豊かなものだなアと感心すると共に、門外漢の私どもには全く想像もつかないご苦心と工夫の秘密があることを知り、蒙を啓かれました。それにしては、今日の製版印刷技術が非常に進んでいるようであっても、墨色の濃淡以上に微妙な原画の味を充分に生かしていない

わけでした、まことに残念に思うのですが、あの時、たまたまマチスのお話が出まして、私、深く感銘しました。あの話は、私が一人だけでうかがうのは惜しいような気が強くしましたので、今日は「こころの文庫」の編集を担当する諸君と連れだって参りました。おそれいりますが、あの時の話を少し詳しくお聞かせねがえませんか。）

羽石 ああ、そのことですか。あれは、私がかた東京美術学校（現在芸術大学）の教官をしていた時分ですから、古いことになりますけれども、たしか昭和25年ごろのことでした。油絵のほうの先生に碓伊之助さんという方がおられまして、その方がマチスの弟子なものですから、先生に久しくご無沙汰しているし、先生も歳を取られたことだから、一べんお目にかかりたいというので、ヨーロッパへ行かれました。それで、久しぶりに先生に会ったわけですが、その時、おみやげに持って行ったのが、硯、墨、筆、紙。それも碓さんが持って行ったのですから、よほど質の良い物を持って行ったのでしょう。

中国でも、昔から高貴の人や文人への贈り物は文房四宝と言って、これが最高の贈り物とされていますから、それを持って行ったわけです。

さて、そのおみやげをマチス先生にさしあげたところが、先生はこれをどう使ったらよいかわからない。そこで碓さんが早速、墨

をすって、筆にふくませ、「さあ、書いてごらんさい」と言って、紙をひろげました。

そうすると、マチスは直ぐ筆をとって書き始めたのでしょね。婦人の顔を描いたとか言っていました。

ところが、持って行った紙は、画仙紙か唐紙か玉版箋か、いずれにしても和紙独特の「にじむ」紙だったわけです。だから「やっ」と筆をおろすと、ぼーっとにじむんですね。そこで、墨色というのは、洋紙と違って、ああいう墨の合う和紙にぶつつかると、本当に微妙な美しさを発揮するものでして、潤いのある墨が紙にぼーっとにじみこむ。そして紙は水を吸収しますから、引いていくうちに涸れる。それから筆先が割れる。そこに自ら濃淡もあり、微妙な変化に富んだ墨の色が出る。それでマチスは、描きながら驚嘆の声をあげたと言います。

「墨って、こんなにすばらしいものか」って。そして「われわれの使っている絵具の墨は、単なるブラックにすぎない。ところが、この墨には色がある。非常に美しい」と。

「墨に色がある」なんて言ったのは、さすがにマチスの偉いところですが、ほんとうに色があるんです。言うに言えぬ変化がありましてね、色を感じさせるのです。この味わいを称して、古くから「墨に五彩あり」というのですが、それをマチスは端的に言い当てたわけです。

それから、マチスは気の向くままに、いろいろなものを描いてみて、

「中国と日本には墨絵というものがあるけれども、なるほど東洋の水墨画というのは、こういうすばらしい材料があるからこそ、あの美事な作品が生まれたのにちがいない。これは、すばらしい。」

と、しみじみ言ったそうです。そのあとで、

裕さんに向かって言うには、

「君、君の国には、こんなすばらしい材料があるのに、なぜ好んで油絵など描いているのか。」

これには、裕さん、まいっらしいですね。「日本からの留学生は、必ずと言っていいくらい私の所を尋ねてくる。それで、私はその留学生に先ず聞く。自分は、日本の絵画に、中国の絵画についてもそうだけれども、非常に興味を持っている。いろいろ勉強させてもらっている。しかし、悲しいかな最早や老齢で、中国や日本に行って現物を見るという元気はない。それで、できるだけ雑誌や何かに紹介された絵画の中で、これほと思うものは、みんな切り抜いてスクラップにしてある。それが、こんなにあるんだよ。」

と言って見せてくれたそうです。なんでも秘書に、金庫から出させて見せてくれたというのですが、金庫というのは私の聞き違いかも知れません。大きなスクラップで、ものすごく立派なものだったそうです。

それには、びっしりと日本および中国の絵画が張ってあって、大変な蒐集だったらしい。まあ、白黒が多いのですけれどもね。マチスは、そのスクラップを見せながら、

「私は色が知りたいので、日本から来た学生たちに、この色を教えてくれ、この絵はどんな風な色かと聞く。ところが、だれ一人返事ができない。聞いてみると、『私は油絵をかいているのだから、日本画に用はない』とすましている。」

と言う。それで、マチスが怒って言うには、「日本画も油絵も、芸術を志す者にとっては同じじゃないか、道は一つじゃないか」と。

そして更に言うには、「日本の国は、すばらしい芸術品を持っているはずだ。われわれは、それを写真でのみ知

るよりほかないんだが、もっと若ければ、行って真物を見て勉強したいところだ。従って、君らは日本の国の優れた伝統的な作品について、まず勉強して、それからフランスへ来るべきだ。まず帰って日本画を勉強してきたまえ、と。私は、いつもそう言うんだよ。」

裕さんは、ピカソの所へも行ったそうです。それで、同じおみやげを贈ったところ、結局同じようなことを言われたと語っていました。要するに、なんでこんなすばらしい材料があるのに、油絵なんか描いているのだ、と。

これには裕さん自身非常に感激したと言って、帰国してから教官室で話してくれました。

——(その帰朝報告があってから、若い画学生の間などに、少しは自覚がたまるとか、反応があったでしょうか。)

羽石 昭和25年か6年に、国立博物館でマチス展が開かれました。左側に表慶館という建物があります。あそこを全館、マチスの作品で飾ったわけです。あれほど大がかりな個人の作品展というのは、自分の国フランスでもやったことのないような展覧会だったのですが……その時分。これは記事にされては、どうかと思いますけれども、日本画滅亡論といって、日本の伝統を日本人自身の手によって、ぶつつぶそうとする変な運動がありましたね、それをマチスは、聞いて知っていたものですから、

「日本画滅亡論なんて、とんでもない話だ。私は東洋画に随分負うところが多い。もし自分の作品を展示することによって、そういう無茶な運動が起らないよう、何らかの力になるならば……」

ということで、実はあのように大がかりな展覧会が開かれたと言われていました。

この前、たしか宗達の話もしましたね。俵屋宗達といえば、江戸初期の水墨画に新生面

を開き、また「源氏物語図屏風」「風神雷神図屏風」などの大作によって一般に知られています。ちょうどマチスの大展覧会をやっているときに、本館の方でその俵屋宗達の展覧会をやっておりましたね、いづれも戦後としては思いがけない大きな催しでしたから、人も多勢集まりましたが、私も近いものですから、たびたび足を運んだものでした。そうして観ているうちに、どういうものか、マチスの展覧会の方は三度、四度とたびを重ねると、申訳ないが、だんだん見飽きがしてきました。だが、宗達には、そういうことがない。観れば観るほど何とも底知れない魅力が感じられる。これは私ばかりかと思うと、そうではなくて、小林古徑先生や安井曾太郎先生、その他の芸大の教官たちも同じようなことを言っておられました。これは、宗達の方がすばらしい。マチスが若かったら飛行機で案内して、宗達を見せてやりたいものだ、と言うんですね。

——(確かに戦後、そういうことがありました。文芸、評論の方面でも。)

羽石 混乱時代ですね。あの当時、美術学校にも外国から参観人が随分来ましてね、その人たちが日本の美術学校に来て、何が面白いかという、最も東洋的な日本画を観にくるわけです。その次は、伝統工芸——金蒔絵です。これは世界のどこにもないからです。

ところが、戦後は、がらっと変わってしまって、油絵だとか日本画だとか、国籍のわからないような絵を描いているから、みんながっかりして帰って行きました。蒔絵の方は、金蒔絵なんかつくる人がなく、つまらない勝手なものをつくっている。もっとも、その時分は漆が手に入らないので、材料の関係もあったでしょうけれど。

——(おっしゃる通り、美術の方ばかりで

なく、文学でもそういう傾向がありまして、古典を大事にしなくなりました。戦後のどさくさまぎれに実施された教育改革、なかんずく国字国語改革と、歴史教育に問題があると思いますね。)

羽石 日本における伝統的な美しいものを、日本人自身の手で、つぶそうとする、何か外からの謀略だなんて言う人もいましたがね。こわすのが日本人だから情ないですよ。

——(安田鞆彦先生がお亡くなりになりました、その流派の正統を承けついでいらっしゃる歴史画などは、これからどうなるのでしょうか。)

羽石 われわれのは大和絵と言われまして、日本では一番古い伝統を持つ流派ですけれども、おそらく私どもの代で終るんじゃないですか。

——(先生がたの代といわれますと、何人ぐらいいらっしゃるのですか。)

羽石 心細いですよ。せいぜい院展に三人か四人で、日展の方には一人もありません。

——(ところで、こんど「こころの文庫」を発刊するについて、小学生用の「伝記による日本の歴史物語」と、中学生用の「日本の古典名作物語」では、是非とも大和絵と申しますか、伝統ある歴史画をもって飾らせていただきたいと思ひましてご無理をお願いしたわけですが、幸いご協力をいただきまして、おかげさまで、会員の皆さんから、絵がいいという評判をいただいております。やはり、読者には一番よくわかるんですね。)

羽石 歴史画となると、装束などに時代考証の必要がありますから、なかなか描ける人が少ないわけです。

さっきの裕さんの、マチスの話ですが、安田鞆彦先生が、芸大の教官室で裕さんからそ

の話をお聞きになって、

「ああ、これは一人で聞くのはもったいない。若い人たちにも聞かせたい。」

と言って、わざわざ大磯へ若い連中を呼んで、裕さんに来てもらって、みんなにその話をしてもらったんです。そんなことがありました。

——(ああ、そうでしたか。そうでしたでしょうね。私も、日ごろから先生がお使いになっている墨とか筆とかの運用技法について、いろいろと工夫をなさっているお話をうかがいまして、図らずも荒木十畝先生のことを思い起していた矢先、マチスの話をうかがったものですから、これは大事なお話だと思ひまして、今日はみんなでお邪魔することになったわけです。——もう30年の余も昔のことになりますが、東洋画論をお書きになった荒木十畝先生が、「東洋画の技法は西洋画のように絵具をべたべた塗り重ねるのでなく、毛筆による精緻な線描があくまで基本であり特徴である。毛筆は硬筆と違って、あたかも空に描く如く微妙な感覚の習練を必要とする。この精緻な感覚を養うには、小学児童のころから毛筆による習字の稽古をさせなければならないが、更にその基礎になるのは、幼児期から二本の箸を使って食事をする稽古にあって、教育上、この二つのことを忘れては、優れた技芸による日本の文化の向上を図ることはできない。かりそめにも今はフォークとナイフがあるから箸は要らないとか、あるいは鉛筆や万年筆があるから毛筆は不要だとかいうようなお粗末な便宜主義の考えを持つな」という意味のことを常々おっしゃっていました。これはもう、教育上の問題になります。今日は大変よいお話を、ありがとうございました。(H)



國語の勉強室

— 1 —

近藤達夫

小學國語一年の一學期用テスト教材（教師用）で、平假名の読み書き調査の爲の表を載せてあるものが、七種類ほどあつた。

どの教材も「診断と治療」を謳ひ文句に掲げてをり、しかも、全く同じ方式による調査表を載せてゐた。この《一邊倒》もさることながら、どうしたら、かうなつたものか、いささか不思議な感じであつた。

さて、その「読み」の調査表であるが、作りは五十音圖の座標に似せてあるものの、全く別の、名稱もわからぬ表になつてゐる。つまり、縦に五文字、横に九文字の座標に、平假名四十五文字（「ん」を入れて、「を」は入れてない）を、一字づつ割り振つて、その結果、上の二段に二音節語が九語、下の三段に三音節語が九語（いずれも名詞）が作り出せるやう工夫したものである。

であるからして、平假名を一字一字と拾つて讀むことも出来るし、二字三字とまとめて讀むことも出来るわけであつて、明らかに、

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

ほわおわあゆてくむ
ねらのにせりつさし

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

かめはいすけへもた
えろなよみいちうぬ
るんやこれとまふき

を

○印はカットであるが下の文字とは無關係である。

表音文字の原則を表の形に現はしたものであることが知られる。参考までに表の一例を掲げておく。

これで見ると、一音節語が一つも無いが、これは、元來、感覺的、擬音語的な一音節語、二音節語が基本になつてゐる和語においては、あり得ないことであつて、大きな間違いであるといはねばならない。

表音文字といふのは、一字一字は音だけで意味を持たず、それが二字以上綴られて、始めて語をなし、意味を生じるといふものである。この原則に、最も近いのは、いふまでもなくローマ字であるが、それとて、現實には、表音文字の表音機能が、遺憾なく發揮せられてゐるわけではない。

この點、國語の假名字は音節文字であつて、「あ行」母音のほかは、大體において、母音一つと子音一つとの結合による母子音未分の音を表してゐる。従つて、單音文字であるローマ字と、決定的な違ひがあるのである。

「現代かなづかい」は、國語の表音主義を根本方針としてゐるのであるが、實際には、音韻とは無關係な文字の使用を規定してゐるため、表音主義の方針にさへ忠實であり得ず、教育的見地からいへば、明らかに無責任な所業となつて、教へるものにも、學ぶものにも無用な混亂を與へ、自信を喪失せしめるやうなことになつてゐる。

そもそも、表音主義とは何であるか。それは、同じ音は何時も同じ文字で表され、同じ文字は何時も同じ音を表すといふ主義であつて、一音一字にして一字一音といふことを意味するのである。そこで、単音文字であるローマ字が、表音主義の實現に最も適合してゐると考へるやうになり、ローマ字國字化を唱へる表音主義者が、雨後の筍の如く簇出した。また、これと並行して、國語表記のカナモジ化も盛んに主張された。終戦後の十年間は、かうした表音主義の實現にとつて、またとなひ恰好の一時期であつた。

同じ「間」といふ文字に對して、時に「カン」と發音したり、時に「ケン」と發音したりする場合、また、同じ「カン」といふ音に對して「間」「閑」「簡」「管」などの文字が使へる場合、つまり漢字の場合においては、表音主義の可能性は全く存在しない。従つて、表音主義といふのは、使用する文字が表音文字である場合にのみ可能なのである。

であるからして、表音主義者たちは、表音文字に特別の價値を認め、文字の表音化を窮極の目標であると主張するに至つた。

しかし、表音文字の使用が、必ず表音主義であるとは限らない。歴史的假名遣においても、表記の素材は表音文字であつた。表音主義者はこの事實を忘れてゐる。

なほ、ついでに言へば、國語の假名文字に比べ、一段と表音性の高いローマ字綴りの英語でさへ、必ずしも表音主義の原則通りにはなつてゐない。例へば、Monitor, Monday, Morality の三語において、Oは三様に發音し分けられるのである。發音記號で示すと、[ʌ]・[ɔ]・[ə]といふことになる。これでは、一字三音であつて、表音主義の原則とは合致しないことになる。してみると、表音

主義といふものは、現實には何處にも存在しない、存在し得ない觀念の産物かも知れないのである。であればこそ、「理想」の名に値するともいへるのである。

さて、冒頭の表に戻ると、既述の通り、一音節語は全く見當らない。しかし、國語の事實としては、「蚊」は「カ」であつて一音節語であり、「目」は「メ」、「手」は「テ」、「齒」は「ハ」でそれぞれが一音節語なのである。この事實をなぜ認めようとしないのであるか。この調子で、子供たちに教へられたのでは、たまつたものではない。結局、表音文字に關する好加減な理解と、それを原因とする表音文字に對する誤解とが、かういふ教材作りに向はせたのであらう。

言葉といふものは、音聲と意味との結合したものであつて、音聲だけで成り立つ言葉も、意味だけで成り立つ言葉も、存在しない。その言葉を記述する文字の場合も同様であつて、音聲だけで成り立つ文字も、意味だけで成り立つ文字も、存在しないのである。

であるからして、表意文字といひ、表音文字といふも、實體的にさういふ文字があるのではなくて、文字の表意機能の比較的高いものと、文字の表音機能の比較的高いものといふ、いはば便宜的な區別があるのみである。大切なことは、表意あるいは表音といふことであつて、文字の機能として、そのいづれが望ましいかといふことである。

表音文字は、音だけで意味を持たぬといふが、音はどこまでも音に過ぎず、音に意味が内在してゐるわけではない。それが、意味を持つのは、表音文字といへども、音を寫してゐるからではなくて、意味、あるいは語を寫してゐるからである。つまり、表音文字であつても、それが文字である限り、意味、ある

いは語を寫すのであつて、そこに表音文字の表意性といはれるものがある。表音主義者は、この事實を何故か認めようとはしない。だから、表音文字の原則を誤解して、音はどこまでも音に過ぎず、音に義なしと考へることから脱け出せない。文字が語に仕へ、語を表すものと知りさへすれば、表音文字の意味志向性は否定できないはずである。

假名遣の問題が意識されるやうになつた、鎌倉初期以來、文字は「音を表すもの」から「語を表すもの」へ、その「性格を變じた」といふのが、橋本進吉博士の指摘であることは、すでに多言を要さぬことと思ふ。ただ、當面の必要として、次の言葉をあげておく。

然るに今の表音的假名遣は、専ら國語の音を寫すのを原則とするもので、假名を出来るだけ發音に一致させ、同じ音はいつも同じ假名で表はし、異なる音は異なる假名で表はすのを根本方針とする。即ち假名を定めるものは語ではなく音にあるのである。これは假名の見方取扱方に於て假名遣とは根本的に違つたものである。かやうに全く性質の異なるものを、同じ假名遣の名を以て呼ぶのは誠に不當であるといはなければならぬ。これは發生の當初から現今に至るまで一貫して變ずる事なき假名遣の本質に對する正當な認識を缺く所から起つたものと斷ぜざるを得ない。(『文字及び假名遣の研究』所載)

さて、調査表の「を」の扱ひ方であるが、一字だけ離して出しているのは、どういふ意味であらうか。「現代かなづかい」の規定によれば、助詞として用ゐる場合を除くと、「を」はすべて「お」と書くことになつてゐる。従つて、「を」は、音韻としての存在理

由を失つてしまつたのである。そこで、音韻とは無關係な、文法の法則から導入された助詞としての「を」だけ、いはば表外の文字としておいたのに違ひない。

もし、さうだとすると、同じやうな「は」「へ」との違ひは、どういふことになるか。早い話、「を」は表外に取り残され、「は」「へ」は表中におかれてゐる。「は」「へ」の場合は助詞だけではなく、「は行」音節としても用ゐられるのに對し、「を」の場合は、助詞として用ゐられるだけであるといふのは不當な差別待遇ではあるまいか。

「現代かなづかい」によれば、「は」「へ」は「わ」「え」と書いても誤りとはしないが、「を」だけは絶対に「お」と書いてはならないといふ。「を」に對する繼子いぢめの嫌らしさではないか。

もし、表音主義の趣旨に徹するならば、「私わ」「學校え」「先生お」と書くのが正しい。間違つても、「私は」「學校へ」「先生を」と書いてはならないはずである。ところが、「現代かなづかい」の規定では、「私わ」「學え」と書いても誤りとはしないが、「を」は絶対に「お」と書いてはならないといつてゐる。「私は」「學校へ」と書くのは、あくまで「本則」に過ぎないといふ理窟である。無論、理窟などと義理にもいへたものではないが、一方では表音主義へ義理を立て、他方では歴史的假名遣に色目を使ふ、八方美人的性格は疑ひやうもないのである。

「現代かなづかい」のいふ通りとすれば、「は」「へ」は「ハ」「ヘ」と發音する場合と、「ワ」「エ」と發音する場合との二様の讀み方が出来ることになる。これでは、一字一音ではなくて、一字二音である。また、「オ」の音に「を」を用ゐなければならぬとすると、同じ「オ」の音に「お」の字があるので、こ

れもまた、一音一字ではなくて、一音二字といふことになる。また、語頭を除く「は行」音が「あ行」音に移されてゐる点にも、表音主義の原則は内部崩壊を起してゐるのである。

どんな言語でもさうであるが、特に和語の場合では、もともとが感覺的、擬音語的な一音節語、二音節語が基本になつてゐる。これは、幼児の言語習得過程と同じであつて、興味ある問題を含んでゐるが、ここでは觸れないでおく。

さて、前に、調査表には一音節語が一つもないと書いたが、実際には、平假名の清音四十四文字（「ん」は入れないでおく）の大部分に語としての意味が認められる。（下圖参照）

わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
wa	ra	ja	ma	ha	na	ta	sa	ka	a
輪	等	矢	間	齒	名	田	差	蚊	痾
	り		み	ひ	に	ち	し	き	い
	ri		mi	hi	ni	ti	si	ki	i
	理		實	火	二	血	四	木	胃
	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
	ru	ju	mu	hu	nu	tu	su	ku	u
	ル	湯	無	麩	奴	津	巢	九	鶉
	れ		め	へ	ね	て	せ	け	え
	re		me	he	ne	te	se	ke	e
	レ		目	屁	根	手	背	毛	繪
	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お
	ro	jo	mo	ho	no	to	so	ko	o
	櫓	世	藻	穂	野	戸	祖	子	尾

ところが、これらの一文字一音節の語を、一音節語といふやうには言つてをらず、すべて、意味のない音だけの文字として扱つてゐるのである。これによつて、音と語義との内

面的なつながりを、言語の主體的意識の事實として捉へる可能性まで、奪い取つてしまつたのである。

表音文字は表音に本質があることは言ふまでもないが、それが語を表す文字である以上、表意性を志向するのは當然である。このやうにして、文字の言語的機能は、表音から表意へ移つて行くところに完成される。戦前の作文入門において、擬聲語をなるべく使はぬやう教へたのは、當にかうした理由からであつた。これに比べると、文字の表音化を窮極の目標とする表音主義は、言語の機能を幼稚な段階にとどめようとすることに、努力をかたむけてあるとしか見えないのである。現行の教科書を見てもわかるやうに、擬聲語の使用は一段と盛んになつてゐる。しかも、それは必ずしも低學年にばかり限らない。「ギンガシ、ギンガン」など、漫画または劇画の、餘りにも直接的な影響が感じられる。時勢といへばそれまでであるが、もう少し正面な配慮がほしいところである。

今年になつて、漢字の略字化を促進しようとする動きが、國會を軸として、俄かに目立つたものになつて來た。新聞は、これを「日中共通化をめざす」と報道した。漢字を簡略化することで、「漢字の最大の缺點」である複雑さを解消し、併せて「書寫の機械化」を実現させようといふものである。

推進者の一人長野利平氏は、本年四月十二日付『朝日新聞』に、「漢字簡略化へ一提案」と題する一文を寄せてゐるが、その中で氏は「難解で生産性の低い当用漢字は将来の日本の飛躍を阻害すると思う。それは、世界の興亡の歴史が証明している。日本は漢字を輸入して二千年來、完全に模倣し追隨している。

一部の人は漢字を神聖化しその改革を拒否しているし、國語審議會も簡略化に手をつけない。しかし当用漢字にはすでに略字が一部採用されていて重宝されている。(中略)私が見るところ日本の漢字は時代の要求を満足せず滅亡の道をたどっている。思いつきの簡略化でなしに古來からの道をうけつぎ、科学的に無血革命さるべきである。(後略)」と述べてゐる。

開いた口が塞がらぬとはこのことであるが、よほど風變りな歴史觀の持主と見えて、間違つた判断が少なくとも五箇所はあるけれど、今は立ち入つてゐる餘裕はない。國語の漢字に死を宣告しておきながら、放つておけば死ぬの、手術をすれば生きると、千三つ屋ではあるまいし、好加減なはつたりをかけるなど、言語道断の無責任といはねばならない。「古來からの道をうけつぐ」とは何ごとであらうか。「模倣し追隨してゐる」ものに、どうして左様なことがあり得ようか。氏の目には「模倣と追隨」が、日本の「古來からの道」と見えてゐるやうである。をかしたことと言はねばなるまい。

試みに、氏の提案する《實用新案》略字から、特徴的なものを選ぶと、次のやうなものになる。

「褌」 (褌)	「糶」 (薰)	「兕」 (鬼)
「甲」 (卑)	「底」 (底)	「寮」 (寮)
「谷」 (谷)	「専」 (専)	「叔」 (叔)
「去」 (長)	「去」 (甚)	「論」 (論)
「響」 (響)	「罟」 (罟)	「齋」 (齋)
「靈」 (靈)	「以」 (以)	「勝」 (勝)

中國が、漢字の簡略化に熱心なのは、彼等が假名文字といふ便利なものを持たないからである。中國語表記のための唯一の素材が、表意文字としての漢字でしかないところに、

彼等の國語改革が、否應なく文字改革となつて問題化し、必然的に、字形の簡略化を志向せざるを得なくしてゐる理由がある。

日本語表記のための漢字と、中國語表記のための漢字とは、たしかに多くの部分が共通してゐるが、日本語の體系に取り入れられた漢字は、それ以前の漢字とは全く別のものとなつたことも明らかである。音訓對應の特質は、世界の言語史にも例のない《發明》であつた。

漢字も假名文字も持つ日本が、何の必要があつて中國の「簡体字」に同調するか。文字はタイプライターのためにあるのではない。「書寫の機械化」など目的と手段の取り違へに過ぎぬ。中國のローマ字採用などは、漢字にルビを振つたのと同じことをしようとしてゐるだけで、何も周章てて迹から驅け出すほどのものではない。

表音主義者の《無知》は定評があるが、これもまた負けず劣らずの《無知》である。

「訓をもつことによつて、その字は國字となる。『萬葉』や『記』『紀』の訓書きによつて、漢字はことばとして血肉化されたのであつて、一字一音式は本來の國語表記の方法ではない。訓のない文字は、國語領域化されていない文字である。音訓表が音を主とする用義に傾いているのは、漢字を國語領域からなるべく排除しようとしているからである。」と、白川靜氏は『漢字百話』の中で述べてゐる。

ローマ字は單音文字であるから、母音と子音とは對等の資格を有つた單音であつて、單音即音素といふ状態で音を表すのである。ここに、音節よりも單音を主とする理由が認められる。英語などにおいて、音節概念が餘り重要な意味・機能を持つてゐないのも、單音中心の文字體系が原因である。音節はもちろ

ん存在するが、極めて複雑であつて、その總数は三千近くもあるといはれてゐる。

これに對して、國語の假名文字は音節文字であるから、一語必ず一文字とはいへないが、一文字は必ず一音節から成り立つのである。

漢語の場合は、漢字が表意文字であるため、一語（一字）一語（一字）に意味があり、しかも、その一語（一字）一語（一字）がすべて一音節で成り立つてゐる。従つて、一語一文字一音節といふことになる。

國語の假名文字は、漢字から出てゐるが、その場合、漢字の意味は捨棄して、音だけをとつたため、表音文字としての機能を持つことになつたが、それと同時に、必ずしも一語一文字ではないといふ性格も持つことになつたのである。

さて、國語の音節構造は、極めて簡單明瞭であつて、①「あ行」母音音節一個から成るもの、②子音一個、あるいは半母音一個と母音一個とから成るもの、これだけである。ただ、音節構造の特質として、これに附随する幾つかの原理、法則があり、以下にその主なるものを列挙しておく。

- (1) 現代國語の音韻を表す音節の總数は百二である。算へ方によつては百十二となる。
- (2) 子音は必ず母音の前に來て、後に來ることはない。音節の終りは、母音で終る開音節である。
- (3) 語中語尾に「あ行」母音音節が來ることはない。
- (4) 日本語の音節構造においては、母音と母音とが直接重なることを嫌ふ生理がある。音節と音節との結合原理も同様であつて、必ず子音を間に置く。
- (5) 子音と子音とが直結するやうな組合せ

は、如何なる場合にも存在しない。

- (6) 音便現象は、語中語尾における母音脱落、あるいは子音脱落の現象である。語頭には決して起らない。

* 音節總數百二は、直音の清音四十、同じく濁音二十三、清音の拗音二十四、同じく濁音十二、撥音一、促音一、「わ」一で、百二となる。

以上のうち、なほ説明の補足を必要とするものは、(3)の場合であるが、それは「現代かなづかい」の規定によると、「は行」音節が語中語尾にある場合、最初の「わ」を除いて他はすべて「あ行」音に書くと決められてゐるが、さうすると、語中語尾に「あ行」母音は來ないといふ法則に反することになる。

また、「は行」に活用する動詞の終止形を、例へば「おも^う」「わら^う」「い^う」などと書かせるのは間違である。理由は上記の場合と同じである。

文字の場合も同様であつて、例へば表音文字と雖も語を表す以上は、決して單なる表音性にとどまるものではなく、そこに表意機能が含まれてゐるやうに考へる主體的意識は認められねばならない。既に觸れたやうに思ふが、表音文字が表意性へ移行する度合に應じて、言語の完成度が見られるといへる。

表音主義者は、音はどこまでも音に過ぎず、音に義なしと考へる。しかし、文字にしる音聲にしる、語の意味を表すものであるから、語義と無關係な音を假定するのは、言語においては筋の通らぬ話である。

なるほど、現代の音聲學は、音と意味との必然的關係は認めてゐない。しかし、本來、必然的關係を持たぬ音と意味との間に、學習によつて連合の習慣がつくられると、はじめから、音と意味との間に必然的關係があつた

やうに思はれて来る。

この錯覺が音義説の成立根據となるものであつて、「ヲカ」といふ音聲に、小高く盛り上つた土地といふ意味が内在してゐるやうに思ふのである。これを、錯覺だからといつて否定し去ることはできない。言語の主體的意識としては、かういふ考へ方があることを認めなければならない。

もちろん、一つ一つの語音に意味を探らうとすれば、語源研究に見られるやうな牽強附會に陥ることもあらう。しかし、言語主體における音義的意識の存在まで否定することは出来ない。何故ならば、それによつて我々の言語生活は一段と活況を呈することになるからである。

この點、宣長の「語釋は緊要にあらず」（『うひ山ぶみ』）といふ主張は、音節ごとに意味を與へて語義を解釋するといふ、當時最も有力であつた語義理解の分析的演繹的な方法を批判したものであつた。つまり、語義の歴史的變遷を重視した、語の用例に基づいて意味を明らかにする、歸納的方法を提唱したのである。これは、正に畫期的な新方法の提唱であつて、眞に至當なものであつた。

『玉かつま』（ハの巻）に、

物まなびするともがら、古言の、しかいふもとの意を、しらまほしくして、人にもまづとふこと、常也、然いふ本のころとは、たとへば天といふは、いかなる意ぞ、地といふは、いかなる意ぞ、といふたぐひ也、これも學びの一ツにて、さもあるべきことにはあれども、さしあたりて、むねとすべきわざにはあらず、大かたいにしへの言は、然いふ本の意をしらむよりは、古人の用ひたる意を、よく明らめしるべき也、用ひたる意をだに、よくあきらめなば、然いふ本の意は、しらでもあるべき也、（後

略）

とある。同趣旨のことは、『古事記傳』卷一や『玉小櫛』卷五にも見られるやうに、宣長自身にとつて、問題の重要性が明確に意識せられてゐたものと思はれる。その「語釋」批判は、本義を以て轉義を釋く、その頃の風潮に對する抗議の意味と、語義の歴史的變遷を重視する、語義理解の歸納的方法の樹立の意味とを持つてゐた。

しかし、人間には、音と義との必然的關係を好む心理、主體的意識が存することを、決して見逃してはゐなかつた。『玉かつま』の上記の引例を見ても、それはわかるであらう。ただ、宣長の偉いところは、そこで思索をどめてゐないことである。前記の引例に續いて、「大かた言の本の意は、しりがたきわざにて、われ考へえたりと思ふも、あたりやあらずや、さだめがたく、多くはあたりがたきわざ也」と説いてゐる。これは、古言の理解を直接の問題に据えた發言であるが、古言に限らず、むしろ、言語觀そのものを述べたものと解される。この意味において、宣長は、語釋に見られる主觀的恣意的傾向を否定したのである。それが、宣長の「けぢめ」であつたことは、言ふまでもない。

ところが、江戸末期になると、『古今集序』の言語發生論に似せた、鈴木朗の言語起源論が學者の關心を集め、平田篤胤の音義的主張の影響もあり、加へて眞淵の思想（特に『語意考』）の復活といふこともあつて、再び本義探究の傾向が強まつた。宣長の提唱した、時代の用例に基づく歸納的語義理解の方法に對し、反對の意見を述べるものまであらはれた（堀秀成）。しかし、この期の言語研究には、發生論と本質論とを取り違へたところがあつたやうに思ふ。（續く）

一昭和五十三年七月二十六日一

教育対話・その指導と実践

東京・京都・四国・九州に設置された全家研本部を主軸に、全国の各支部に所属して教育対話業務を担当される主事は、現在 238 名に及んでいます。この数多い教育対話主事は、殆どすべて、その地域の小学校もしくは中学校の校長の職歴を有たれる方々にて、その豊かな経験と人望とは、会員家庭をはじめ、普及活動の第一線に活躍される賛助会員（モニター）の信頼を集め、全家研運動の力強い推進力となっています。家庭における教育上のさまざまな問題に対応して、親しく語りかけるその指導と助言の実践活動は、ともすると画一化されようとする今日の教育事情の中で、現に育ちざかりの子を持つお母さんと子どもの閉された心の目をひらき、明るい希望へといざなう、いわば木鐸の役目を果たすものと言えます。その貴重な体験からの報告は、単なるアンケート調査などとは別して深い意義を有つものと信じ、ここに第 3 集を編みました。

対話の実際

—そのスタイル—

牛 島 齊

(筑後支部)

現職の頃父母と交してきた家庭教育論は、学校サイドからのそれであり、家庭実態の認識不足もあって、ある片寄りがあった。その自分が、今は、家庭の側に立って家庭教育を語って 4 年目を迎えている。しかし、未だにじっくりかみ合わぬもどかしさを感じ、己れの力不足をかこっている。より具体的にとの意識は持ちながらも、一般的、観念的、抽象的、に過ぎるきらいがあり、理論の貧困、論旨の曖昧、また覆うべくもない。加えて話術拙劣、相手方にとってはクソ面白くもあるまいと、反省の毎日である。

ではあるが、人を生む事から始まる母親の、子育てにおける尊敬を想い、日本の命運に関わる国民の一人ひとりが皆、母の子なるを想い、人づくりの場、家庭における母親の存在の偉大なるを想い、世の母親に、家庭教育の本道を見定めてほしいとの願いをこめて、未熟をもかえりみず、対話に臨んでいる。

▷ (母) うちの子 (小 4 男) は、テストのミスが多く点が取れません。先生からも「早合点で見落しが多い。家庭でも注意して直すように」と言われています。先ざきの事を考えると気がかりでなりません。どうしたらよいでしょうか。

○ (私) 満点であってほしいわけですか。

▷ いえ、そうでなくて、ちょっとした不注意で、取

れるはずの点を落しているのが残念です。悪い癖は、早く直さないと直らないとも聞いていますので……。

○ 具体的にはどんなミスで……。

▷ 文章題で、式・計算はできているのに、cm をつけ忘れている、とか…… (あと略)

○ それで、今までどんな手を……。

▷ 大抵が、思い違いや見落とし、書き忘れ、などですから、その度にやり直させ、「こんな簡単なことが、何度注意してもどうしてそう間違えるの、気をつけなきゃダメじゃないの。」と、言って聞かせますが直りません。

○ 答えは素直に見せてくれますか。

▷ それが……、最近はおしこぼります。

○ お子さんのような単純なミスでも、ミスはミスだから、しないに越した事は無いでしょうが、この場合は、ミスはどうするかの問題より、見せたがらなくなってきたという事の方を先に考えてみなければならぬようです。

お子さんは、お母さんの口喧しさから逃げ始めています。極端な言い方の方ですが、これがもっと進むと、テストは見せない、学校での事も話さない、勉強もイヤ、となる恐れが多分にあります。ますますエスカレートして、親との対話でさえも避けるようになってでもきいたら、それこそ大変、親と子の絆はズタズタ、何点かの上下どころの騒ぎではない、困った事態になりかねません。(※故意にオーバーに表現)

治療について考えてみましょう。

わが子のミス癖を早く直して、実力通りの成績を

収めさせたいとの母親の気持ちはよくわかる。だが、このような、その人の特性からきている習癖は、教えて（言っただけで）直るといった性質のものではない。心の問題だからである。

子供が、ある事（ここではテストミス）について、くり返しくり返し同じような刺激（叱正や指摘）を受けていると、その事が重く心にのしかかってくるようになる。そうなると、テストに向ったというその事だけで、子供の心は、また、やりはしないか、と波立ってくる。心は平静を失い、その働きは支離滅裂、ポーッと成って同じ過ちを犯すことになる。だから、このミスは、本人が心を平静にしてテストに当る事ができるようになれば解消する。それは、本人の心の不安・動揺の因になっているもの（母の苛立ち）を除くことで可能になる。従って、母親の、何が何でも今直さねば……とする、攻め（あせり）の姿勢を改めて、子供の心に平安をもたらす、ゆとりある待ちの姿勢に転換することによって、道は自ら開けてくる。しかし、その道程は、遠く長い事を覚悟しなければならぬ。

母親の心構えが改められると、子供への語りかけが、
「だれにもいろんな癖がある。〇〇には、お母さんも感心するこんな良いところ（具体的に）がある。人からもほめられてお母さんは大変うれしい。テストが少しぐらい違っても、自分で直せるのだからできたのと同じ、上級生になったら、きっと上手になる、とお母さんは安心している。先生から注意されても、お母さんは心配なんかちっともしていないよ。」と、いった趣のものに変わってくる。

これは、母の、改められた、心のゆとり、ふところの暖かさ、ほこりのゆさぶり、やさしい励まし、などといった、真実の心の、子供への働きかけの証である。やがて子供の心は、母のこの心情に感応して、心の不安を去り、自分の心で「自分の欠点」を見つめる事ができるようになってくる。そして、この自覚に、「自分のほこりにかけても……」という、強い意志が働きかけて、自己の欠点克服への努力が始まる。心のエンジンへの自らの点火である。

やがて、子供の方から、
「お母さん、ぼく、うっかりして、また、やったよ。ほらね、ここ。でもね、ちゃんと直したよ。えらいだろう。」

と、出てくるようになったらもう大丈夫。そこには母から攻めこまれて、オドオドしている姿は全く無い。自分で直したミスと、直させられたミスとは、値打ちが違います。エンジン快調、あとは一瀉千里である。

そしてなお、「自分でやった」という、またとなく尊いもの、自信が残る。この自信が、その子の今後の成長に、どれほどの大きな役割りを果たす事になるか計り知れないものがある。こう考え及ぶと、子供の心の不安を除き、自信を培ってやる事の教育的意義の大きさを思わずにはおられない。

- （私） どうですか、お母さん。ご自分の気持ちの切換えができそうですか。
- ▷（母） 子供をうろたえ者にしていたのは私でした。先生のお話に賭けます。
- ならば、心底からその気になって頂かないと、心にもない表面だけのゴマカシでは、子供さんにすぐ見破られます。それは、母の真実を信じたい子供の心を、いたく傷つけることとなります。どうか、お母さんの、改まった心の真実を惜しみなくさらけ出して下さい。お宅のお子さんなら、お母さんの願いに必ず応えてくれるはずですよ。
- なおこの事は、忍耐の勝負である事も、充分心しておいて下さい。

この子が、今年中学1年、学級委員長。

- （私） やりましたね。長い道のりでしたが、お母さんの見事な辛棒勝ちでした。
- ▷（母） おかげさまで……。ホッとしています。今になって思うと、どうしてあんなミスをしていたのか、ウソのようです。
- それです。教育は、結局「心の培い」という事ではないのでしょうか。お子さんも、それなりに苦労があったと思います。
- ▷5年生の頃でしたか、自分で自分の頭をたたいて、「コラッ、お前はバカか、またまちがえた！」などとやっていました。
- そう。その姿こそが、自覚に発した自己錬成——自己との苦闘の姿ではないのでしょうか。自分で自分の欠点を知り、自分で直さねばと自覚し、自分の努力でそれを克服する——得がたい体験が積みましました。本人の一生の宝になるはずですよ。禍を転じて福となすとは、まさにこの事でしょう。うんと喜んであげて下さい。それが何よりのご褒美だと思います。
- ▷ありがとうございます。

——小集会の中の一こまより——

全家研活動 あれこれ



—対話の声から—

松井幸雄
(半田支部)

モニターと子どもの対話

Sモニターさん

「中学生と話す時、私はつい身を乗り出して、しんげんに聞き入ります。学校と家庭、クラブと勉強、進路について親の考えと私の願い等々。いろいろな問題について理想と現実との戸まどい、不安、あせりの気持がよくわかり、中学生について同情してしまいます。

でも、私は、私の体験からあえて言ってやります。『中学生—青年期に入った年ごろの人—は、いつも前向きのing進行形の姿で、絶えず、前へ前へと動くことね。自分が苦しい時は、みんなも同じ、あなただけではない。自信をもってやらなきゃ、だめ』と。

Yモニターさん

「私はお母さん方と十分なお話相手も出来ません。子どもたちの勉強の相手をする力もありません。しかし、みなさんに喜ばれることは、何でもお世話させていただきます。(ほんとうによく会員ひとり一人の世話をされ、会員の信頼を集めておられる。)

子どもたちに、ただひと言、『しっかりやろうね。』と言うだけです。

さて、Sさんの場合、生徒からは何でも聞いてもらえる話しやすいおぼちゃんの立場で、生徒にとっては信頼できる人からのひと言として、すばらしい対話がなされたのである。

昔からよく伝えられている、「親を取り換える。」の言葉のように、親代りは、日本のいまの家庭にも、自立しようとする子どもの成長のために、必要な存在かも知れない。

Yさんは、今までずいぶん苦労され、これからの人生を誠実に謙虚に生きぬこうとする態度の方、そして実行の方で、Yさんのひと言は、子どもにとって、ずっしりとした重みをもって響いたことと思う。

私はかつて、学校教育の現場にあって、いつも考えた。

学校教育には限界がある。家庭教育と両者がそれぞれ機能を分離する必要がある。もちろん、日本の現状からして無理だというそしりを受けることは承

知で……。そのうえで、学校教育と家庭教育の交わり—ボーダーライン—をどのようにしたらよいか、もっともっと考えたい。その夢は退職後、いっそう強くなってきたことに気付いた。

全家研が日本の家庭教育をみなおすため、親同士の集まり、対話の領域から、モニター対子どもとの対話の領域へ、モニターのボランティア活動が第一歩を踏み出していることを感じた。社会教育活動の新しい息吹き、芽生えといっても過言ではなからう。

資料との対話

○その1 精選された資料

ある小集会の席上、しつけ、道徳教育の話がはずみ、話題統出、談議ガヤガヤ……。その時ちょうど、私は3年生ポピー5月号を持っていた。こころの文庫「ノアの箱舟」を取りあげ、お母さん方にきれいな挿絵を見せ、子どもに読み聞かせる口調で、紙芝居的一幕を演じた。

忘れていたことを思い出したような気持で「道徳」の授業を、相手のお母さんにしてしまった。(あとで思わず苦笑)

授業の流れも昔とった杵柄とうぬぼれたが、精選されたよい資料が物を言い(対話)生徒(お母さん)の心情をゆさぶった……。やはり「道徳」は資料かな……。

○その2 母子の図書館・資料室

同じく小集会でこんなこともあった。「今昔物語」(こころの文庫中学1年)を紹介し、今は昔……の句調で、家庭教育の今昔を対話し、出席者一同、すっかり『こころの文庫』びいきになった。

あるお母さん曰く。「ポピーが配本されると、まっ先に『こころの文庫』を読んでいるが、感想文を書かせなくてよいでしょうか。」

主事、答えて曰く。「お母さんは学校の先生でない。感想文は先生がやること、おもしろかったらお母さんも読んでごらんさいよ。」……いささか、暴言をはいた。

○その3 資料との出会い

小集会、学習相談、教育相談、講演会等で、私は「やる気は出会い、チャンスから」とよく言う。ここにもその人その時びつりの資料との出会いがある。

〔例〕ポピー中学生新聞58号

内気なレモンちゃん文学少女

落合 恵子さん

「赤毛のアン」文庫本との出会いが私の読書への開眼であった。

資料でか資料をか、資料論議を思い出す。ポピーには、人間自己開発に適切な資料が豊富にある。全家研対話活動は、自分が自分に問いかける資料との対話も、ひとつではなからうか。

ポピー教材に思うこと

全家研の教育理念はと、私自身に問いかける時、私の使い慣れた言葉ではね返ってくる。「自主性と創造性とは、人間、一生をとおして枯れることはない。」そして「教育は教育を受ける者の可能性を信じなければ、成り立たない。」と。

ポピー教材はきわめて純正な立場で、人間を丹念に練り上げていく感じのもので、ひとつ一つ（ステップ・段階）を積み上げる地味で厚みのあるもののように思われる。

それだけに、この教材資料を十分生かすための、じょうずな使い方（7つの基本、14の手順）が提示されたかと考える。

これについて、なお、思うことの二、三を記してみたい。

(1) 小中学生ポピー

1 3か月の継続がキメ手。

基礎基本は底力として実力につながる。苦しみを乗り越えて始めて、二次的興味と意欲が湧いてくる。およそ100日間、とにかく正しく使うこと、そして周りから適切な激励と示唆が必要。

2 思考重視と手引きの位置づけ。

思考重視の学習として、シート学習の初め、中、終りに教科書・資料を読み思考を深め、その間に手引きを利用する。手引きは自主学習のガイドとして、考える学習の中に正しく位置づける。

3 PDSサイクルの機能。

学校教育は、基礎基本の学習と、学び方を学ぶ生涯教育の一環とみるようになった。家庭教育もこれを考えることによって、我が子の未来がある。

ポピー教材は、学習の計画P、実践D、反省評価Sを重視し、子どもの自己開発自己実現をはかるもの。

(2) 幼児ポピー

ある集会で、若い母親4人、幼児（3～5歳）4人が子ども部屋に集まり、自由遊びの中にそれぞれの発達課題を話しあい、思わず時を過ごし、たいへん喜ばれた。

3～6歳（小1）の発達成長の姿、そしてそれは個別的なことに気付きながら適切な教具教材資料について考え、ポピーに触れた。

母親のポピー教材観がきわめてたいせつか。

今後のこと

かつて、現場で、児童生徒の個性能力学力の多様化に、いかに対応するかを考えた。

ひとりひとりにわかる学習、伸ばす学習を家庭教育サイドにあって親御さんの協力者となった今、同じ課題に直面する。教育保育機関関係のご苦勞を、いささかでも理解している者として協力申しあげたい。学習相談を主軸とした小集会、対話活動の多忙を予想している。



山梨支部の活動

土屋 享

(山梨支部)

(1) 新聞の「家庭教育」欄から

— 家庭の責任 —

春を告げる桜前線の便りとともに、全国の小学校で一斉に入学式が行われました。希望に胸をふくらませた子どもたちの入学を、心からお喜び申しあげたいと思います。

小学校の6年間は、めざましい成長をとげる時期です。それだけに、この時期における家庭が果たす責任の重さを、親としてこの機会に深く胸に刻んでほしいと思います。

近年、青少年の「心の荒廃」が叫ばれ、少年非行や暴力が深く憂慮されています。中には、このままでは、日本はダメになってしまうのではないかとさえ思う人がいるほどです。

この1月から3月までの間だけでも、それを裏づけるような、非人間的な暗く悲しい事件が、ニュースで報ぜられたことは、記憶に新しいところです。また、その責任を教育の荒廃にありとする者、親の責任をなじる者、政治の墮落や社会の暴力的傾向を指摘する者、ポルノ映画や低俗有害な劇画に原因ありとする者……まさに議論百出です。それぞれに反省しなければならぬ点があることを認めざるを得ません。

しかし、なによりもまず問い直してみなければならぬのは、今日の多くの“家庭”というもののあり方です。家庭が人間の基礎教育という責任を果せなかった時、子どもは不幸という道を歩みはじめます。今の時代の子ども達に欠けている耐える心、自立心や自主性、善悪のけじめやルールを守る心、生命の尊さや思いやりの心。これらはいずれも、幼年期や少年期における躾や教育の中で培われていくも

のです。けれども家庭がその機能を失ったとき、子どもは、かけがえのない精神的財産をその手に握ることはできません。

昔は、みんな子どもを生めば父親になり母親になっていました。けれども今はちがいます。依然として、夫であり妻である人が多いようです。いったい子どもは何を鏡とし、誰に教えられて人間らしく成長していけばよいのでしょうか。

今ほど、親の生きざまが問われている時代はありません。自分の子をどんな子どもに育てたらよいのか、子どもにとって何が大切かを深く考え、確固たる信念と、き然たる態度をもって、家庭教育不在の汚名を返上してほしいと切に願うものです。

これは、山梨支部のおかれているYBSリス発行のリス、という新聞(8頁もの、月3回発行、約7万部、甲府市内全世帯と一部周辺の町村へ無料で配布しているもの)の家庭教育欄に、本年4月5日のせたもので、昨年7月から毎号この欄を通じ、対話主事として、家庭教育・家庭学習のあり方について、私なりの考えをのべて、よびかけているものです。

(2) 教育相談の中から

——先生私にも教えて——

今年の2月中旬、小学校1年女児の母親から、「入学をととても喜んでいて子どもが、この頃、次第に粗暴になり、明るさを失い、勉強への興味もなく、友達もできず、どうしたらよいか」という相談があった。再度にわたる母親との面談で、A子の生育歴や、担任教師のA子の見方の一端を知ることができたが、それを要約すると、おおよそ次のようである。

A子は、4歳の年の5月重いハシカにかかり、約2ヶ月近く入院、その後遺症はまだ若干あるもやがて治るとの医師の話。

1年へ入学するとき、入院時の主任医師に相談。医師は普通学級での学習十分可能と明言。県の中央児童相談所も訪ね、その際、知能検査も受ける。ここでは、普通学級での学習十分可能なるも、集団生活になれさせることが先決であり、指導いかんできなりまで伸ばすこと可能とアドバイスしてくれた。

入学直後の4月10日頃、母親は担任の教師に合い、事情を説明、特別の配慮を願う。

5月の授業参観の時、「A子は積極的に話もするし、よい子だ」と、担任の言。だが、6月の授業参観のとき、A子が「お客さん」扱いにされている姿を見て、母親は深く落胆。2学期以降、A子は担任からも、クラスの友達からも疎外されていることを、母親は感じた。

12月の個別こん談の折、担任教師は母親の失意の

心も知らぬかのように、A子について次のような話をする。

- ・学習についていけないので何もさせない。
- ・主要教科の授業には絵をかかせている。
- ・体育の時間は本人の気ままにさせている。
- ・宿題もできないと思うので出さない。
- ・担任としてはA子だけにかかわってはられない。

学習におくれが目立つ子どもにこそ、指導の手を差しのべなければならぬのに、この教師の言に私はやり場のない怒りさを感じた。私も教回A子と面接したが、会話や遊びを通して、普通学級での学習に十分ついていける子どもであると判断した。

私は、まず母親の担任不信は、A子にとって何より不幸と思ひ、担任教師を信頼し、何事もよく相談するよう助言した。

第二に、A子に勉強の楽しさを知らせるため、ポピーによる母子共学をすすめた。幸いこの学習システムは、A子の喜ぶどころとなり、それを知った母親は、今、希望を見出し、真剣に取り組んでいる。

第三に、A子の日常生活を豊かにするなかで、全身の正常な発達を促すことが望ましいので、諸々の経験の大切さ、友達と遊ばせること、自分のことは自分でさせる、年令に応じた家事の分担等、広い視野から、気長にA子の成長を見守るよう助言した。

第四に、県立教育センターも訪ねて、指導をうけるよう助言。なお5月中旬、私はA子の学校に校長を訪ね、情報を交換し合うとともに、格段の配慮をお願いした。

A子のために、関係者の理解を得るための努力は今後も続くだろう。しかし、母も子も今、少しずつ希望と明るさをとりもどしてきたことが、何よりもうれしいことである。

(3) 対話集会あれこれ

対話は全家研のいのち、我が支部でも、モニターによる日常的な対話と、対話主事による小集会の両者に力を入れ、会員の悩みに答え、信頼による結びつきを図っている。

④「定期的に集会を開いて」と嬉しい声。

今年の2月、甲府近郊の新興住宅地で、新入児をもつお母さん方と、躰や、学習の素地などについて話し合ったが、終わったとき、集った若いお母さん方は、「誰に相談したらよいのか、相談する人も機会もなく不安だったが、ほんとうによかった」と、たいへんな喜びよう。このとき全員から、期せずして、これを機会に定期的に集会を開きたい希望が出された。これがたちまち他の学年にも広がり、小学校のPTA副会長もしている熱心なモニターKさんの尺

力で、4月以降定期的に学年別の集会がもたれるようになった。

◎ 幼稚園・保育園からの招き

「若さと行動力で」と自負するモニターのMさん。幼稚園児をもつ友人の会員に対話集会の話をもちかけた。たちまち園児のお母さん方の間で、ぜひということになり、園長さんも心から協力、かくて7月8日(土)午後2時より集会が開かれたが、炎暑の中を集った40人近いお母さん方の喜びようをみて、私は全家研にたずさわる仕事の重みを痛感。

また、Mさんは我が子が通っていた保育園にも話をし、ここでも、園の積極的なよびかけで、7月20日夜8時から集会がもたれた。共かせぎの方が多いため夜の集会となったが、我が子のために、疲れも暑さも忘れ、真剣に聞き入る、30人余りの尊い母の姿に、ただ頭が下がるのみ。

このような輪を広げるために、いつも心がけてくれるMさんの熱意と人柄に感謝の他なし。

◎ 当支部の所在する山梨文化会館には200人ぐらい収容可能なホールが二つある。支部では、会員の集会等のために有効に利用することを考え、第一回の試みとして、去る5月18日、小・1のお母さんのお一日勉強会を開き、1年生の家庭学習について話し合い、たいへん喜ばれた。

自立心のある 人間に



磯田孝雄

(豊前支部)

1. 教育対話主事になるまで

郷土のY小学校に赴任して2年目、勿論福岡県の実態としては最後の校長を勤めさせてもらっている昭和51年の夏、昭和24年頃から直接公私ともに御指導をいただいて来た全家研九州本部の熊谷嘉栄先輩が、突然来訪され、全家研運動の趣旨について詳細に説明なさるのを聞き、日頃から各地の家庭教育学級などで話して来たことと一致した時は、ほんとにそうだと思えました。

ところが、話の終りにきて、ポビーを普及する話になったとき、何か割り切れないものがあったのも事実でした。

このことは、教育対話主事としてこの運動にたずさわっている現在も同じであり、また後輩の校長さんや先生たちに話している時も、最後に質問を受けるのは、「趣旨はどうあろうとポビー教材を沢山売

ることでしょう。」と言うことであり、校長さんから返ってくる言葉は、「教材を売ることについては、学校がお世話することは遠慮させていただきます。」で、モニターの普及の説明で汗だくでした。

話が前に戻るが、退職した去年5月、北九州市のひびき荘で、全家研対話主事九州ブロック研修会が開催されるので、オブザーバーとして出席するよう熊谷先生からの連絡を受け参加しました。

道徳教育の権威として、指導書をとおして尊敬している勝部真長先生の講演を拝聴し、先輩の対話主事先生方のお話をお聞きしているうちに、どうにか私にもやれるかもしれない、長い教員生活の御礼としてやって見たいと決心するようになったのです。

ただ心配になったのは、非常勤ではあるが、幼稚園園長の命を受けているということが、この運動にさしさわりはしないかと言うことで、また反面、生涯教育の一環としての幼児教育についての研究を進めることも、与えられた使命を果す一助にもなるだろうという考えも浮かびました。

そしてやっとの事で決心をし、昭和52年9月1日付の、全家研豊前支部教育対話担当主事委嘱状を受け、約1ヶ年間、経験の乏しい、しかも実績のあがない活動が続いているものです。ここでつけ加えておきたいことは、豊前支部には、私より先に、荒牧ハル子先生という、小学校教育に永年勤められた方が、地域の実態に即した全家研運動を地道に、しかも粘り強く進められている教育対話主事がもう一人いらっしゃることに、その人と二人での教育対話活動であり、むしろ、荒牧先生からの指導を受けているという実情です。

2. 教育対話の記録の中から

① モニターの心がけ

昨年9月20日、Y農園(ぶどう園)で支部モニター会(ひなげし会)のレクリエーションが開催され、私も顔つなぎのため、支部長さんと参加しました。参加者が少なくて残念でしたが、ほんとに楽しいものでした。型どおりの挨拶、自己紹介、記念品贈呈(会員数を越したモニター2名に対して)、記念品贈呈(支部会員数1,000を越したことを祝って全員に)、談話及び会食、ぶどう狩り等々でしたが、その談話の中に、表彰された一人のSモニターから、どうして130名の会員を獲得したかの苦心談を聞き出そうと話しかけたところ、Sさんは、会員ひとりひとりに話しかけてやる(子どもには、ポビーをやっているかね、テストはどうだったかね、ごほうびを学校でもらったそうでよかったね、など)、母親には、(近頃のようにすはどうですか、成績が上がったそ

うねなど)とひとりひとりを大事にすることが、次の会員を獲得することになり、直接新会員の勧誘に出なくとも、会員が会員をつくってくれる、ということでした。

これに反して、モニターの中には、広い地域の中で、会員を増すためには、苦勞が多い、その割に手当も少ないので、対話活動をもっていたきたいと話しても受けてくれない人もいることは事実です。

このことから、モニターの心がけ一つでどうにもなることと、全家研運動の趣旨の徹底こそ正しい方向に進める手だてだということを感じています。

私の支部では、南北二地区に分れて、毎月一回モニター会議を開催していますが、その一コマとして、モニターの研修を組んでおります。その一つに、モニターの手引き、ボビー学習法の輪読を進めています。一度目を通してだけでは身に入らず、すぐ忘れてしまいが、皆さんと一緒に対話をしながら覚えたことは、身につくものではないでしょうか。教育対話の実践こそ最も重要な仕事であり、これを進めることよってのみ、ボビーの普及になるということ各モニターが心がけてほしいと祈るばかりです。

② 母親との対話の中から

今年4月に、幼稚園からY小学校に入学したY君のお母さんが、たまたまスーパーで、幼稚園の時の担任の先生に、小学校の担任の先生との懇談の折に「おたくのお子さんは、大分おわれています。授業中もよそ見ばかりして話を聞かない。家庭で気をつけてください」と言われたので心配しているが、どうしたらよいでしょうか、と話したことを、幼稚園の先生から聞いたので、早速その家庭をお訪ねしました。

母親との対話の中で、子どもが「小学校の先生はうそつきだ」と言ったことを聞いたので、このことの意味を考えながら、もっと話し合いをしているうちに、この子は内向的で、自分の意志を表現出来にくいので、先生にわかってもらえない、ということがわかった。生年月日は、3月24日とのことで、1年生では、幼稚さのあるのは普通で、次第によくなると話したら、少しは安心したようだった。また、おけているということにも気がかりになったので、勉強のようすを聞いたが、担任の先生が、別に家庭では勉強させなくともよいから、運動させるようにとのことで、学校の宿題以外には、何の勉強もさせてないことを知り、びっくりして、正しい家庭学習の方法について説明したが、今の親は、子どもについて必要以上に心配し、世話をするかわりに、正しい教育の方法を知らないということがわかった。

全家研の提唱する五つの家庭教育訓について、も

っと浸透するように努めることだと思った。

3. 幼児教育の原点

幼児教育に関係して2年目、色々模索しながら実践している現状で、どれが原点だということをはっきりすることには到達していないが、漸進のみ願って、幼稚園の先生方と努力している。

たまたま、去る7月28日、国立京都国際会館で開かれた、国際幼児教育会議でのシンポジウムの報告が、読売新聞に掲載されていたので、興味深く読んだ。

その終りの方に、黒人子弟の就学前教育の推進者として知られているアメリカのイリノイ大名誉教授のJ・M・ハントさんは、親への助言として次のように話した。

「自立心のある人間に育てたかったら、あまり先走らないこと。たとえば赤ちゃんが、落ちたものを拾おうとして苦勞していても、拾ってやらす、少しだけ落ちた物を近づけてやるだけにしておく。そうした適切な助けをしてやるためには、平素から子どもの発達をじっくり見守ってやることです」と。

全家研運動・対話活動の指針にしたいと思ふ。

教育対話

1年の歩み



渡辺幸雄

(京都東山支部)

全日本家庭教育研究会の教育対話主事として参画してから、ちょうど1年経ちました。

支部が設立されて間がなかったのも、支部長や普及部長もまだ経験が浅く、みんなで模索しあい、研究しあいながら、全家研運動を進展させる努力を続けてまいりました。

運動を推進するためのだけでは、種々あると思いますが、私たちは次の二点に特に力を入れることにいたしました。

1. 「よいモニターづくり」

支部長、普及部長、モニターの方々が、これほど思う人を発掘し、意欲のあるモニターが増えつつあります。

この方々を、会員に対してある程度教育対話ができるようにお手伝いするのは、私の仕事だと考え、機会あるごとに話し合いをしています。

2. 「小集会を多く持つ」

会員集め、会場設定など、モニターさんがお膳立されるのにたいへんご苦勞をかけています。しかしまだ会員がそれほど多くない当支部としては、相当回数多く開催することができました。

「今日の会に参加してよかった。またこの次も開いてほしい。」と感じてもらえるよう勉強したり工夫したりしています。

幸い、集会に二度も三度も出席してくれる会員があるのはうれしいことです。

○支部対話主事としての1年の歩み

どの支部でも行なわれていられることで目新しいものはありませんが、この1年やってきましたことを簡単に記してみます。

1. モニター会

① 月例モニター会（毎月初め。全員対象）

研修を主としている。対話主事より教育の諸問題を話す。支部長、普及部長よりの話。モニター相互の話合いにより研修を深める。

（家庭の主婦として多忙なモニターさんであるが、毎回の出席は80パーセントを越えている。

② 地区別モニター会

随時開く、支部を3地区に分け、研修や連絡、打合わせなどをする。

③ リクレーション的研修会

親子遠足、ハイキング、手芸教室、新年パーティーなどを実施し、相互の親睦をはかり、明日への意欲を高める。

2. 小集会（母親セミナー）

人数は5～10人位。会場はモニター宅または会員宅。

① 会員対象の集会

- ・家庭教育の問題点。
- ・ポピーの上手な使わせ方。
- ・ポピーを使用しての感想、質問など。

② 未会員対象の集会

- ・全家研運動の趣旨・目的。
- ・家庭教育についての諸問題。
- ・ポピーを使用すればどんな効果があるか、など。（集会に出席した方の大部分が入会されている。）

③ 会員・未会員混合の集会

- ・全家研運動のねらい。
- ・家庭教育上の諸問題。
- ・会員より、全家研に入会しての体験や感想発表。
- ・ポピーの使わせ方、など。

（小集会に参加した方が、その後個人的に子どものことで相談したいと電話してきたり面会を求めたりすることが、たびたびある。

学校の担任より対話主事に相談を持ちかけてくるのは、全家研の趣旨を理解してくれたことや、小集会での対話主事との話合いに共感してくれたることだと、ありがたく思うと共に責任の重さも感じる。）

3. 児童生徒対象のポピー使い方教室

春休み、夏休みは特に回数多く実施している。小人数のときはモニターさんの家で、多いときは各地区の会館、集会所などを利用している。

① 小学生教室

母親といっしょに来てもらっている。

- ・全家研の映画上映。
- ・ポピーをその場でやらせながら使い方の指導をする。
- ・母親には、その子の学年に適したポピーのやらせ方説明指導。

② 中学生教室

- ・全家研の映画上映。
- ・学習意欲を高めるための対話主事の話。
- ・中学ポピーの上手な使い方。

4. 会員の家庭訪問

今までのところ回数は少ないが、モニターさんの要請によって会員のお宅を訪問している。

- ・家庭・学校教育についての悩みごとの相談。
- ・ポピー使用についての質問、など。

5. 支部長・普及部長・対話主事打合せ会

毎週行っている。年間・月間計画や、モニター会、小集会の実施上の具体的な打合わせ、連絡事項などの話合い。

○〔小集会を喜ばれるものにするには〕

（私なりに感じたこと）

これまで数多くやってきた反省から、集会を喜ばれるものにするために対話主事として考慮すべきだと思ったことを、いくつか挙げてみることにします。

① 「なごやかな雰囲気づくり」

これは、対話主事は勿論だが、同行している普及部長やモニターも気を配らねばならない。対話主事としては、「これから指導してやるのだ。」というように感じさせないことである。なごやかな中に、しらすら主事の指導が浸透してゆけば理想だと思う。

② 「話題を豊富にする」（具体例を多く）

具体的な話をすすめ、教育理論は多くしない。内容は充実したものでなければならぬが、ユーモアなども交えながら話すと、かえって身を入れて聞いてくれるようである。

③ 「参加者全員から質問や話題をひき出すよう心がける」

対話主事の話はあまり長くしないで、質問や感想などがどンドン出るようしむける。

④「参加者個々の考え方を早く察知する」

特に未会員の集りなどでは、塾の方がよいと思っ
ている人や、ポピー以外の練習帳などでじゅうぶん
だと考えている人など種々あるので、こういう人た
ちに、全家研の趣旨をどのように理解させるか、こ
れまでの考え方をどのように変えさせるかを、早く
察知して対処しなければならぬと考える。

以上わずか1年の浅い経験の中から、やってきた
こと、感じたことなどを述べましたが、まだまだ未
熟な点、至らぬところが多いと思います。今後のご
指導をお願い申し上げます。



対話ノートから

山村 律次

(徳山支部)

昨年私がこの道に入ってから、はや1年を経過し
た。その間の対話活動の跡を数字的に振り返ってみ
ると、(52年5月から53年7月まで)①教育相談(母
あるいは母子と個別対話)が87回、延143人。②母
親セミナーが21回、延130人。③学習相談(子供を
個人指導)69人。④ポピー使い方教室が8回、延41
人。合計して延383人と対話したことになる。

昨年学校を定年退職し、これから悠々自適の生活
をと考えていたのが案に相違の結果となってしまっ
た。といってもこれは愚痴ではない。楽しいのである。
現職時代と一味ちがった、出会いの妙味が汲め
ども尽きぬ、これが生きがいというものであろうか。

その間の成功やら失敗やらの体験を通して全家研
のねらう対話の意義なりコツといったようなものが
少しはわかりかけてきたような気がする。私の対話
ノートからその一、二を拾い出してみよう。

① 母子間の悩みについての診断事例

(幼稚園児・A子4歳の母を含めたポピー会員4
人との母親セミナーの対話記録)

[A子の問題]

A子は幼稚園の中で寡黙児、孤立児である。運動
会練習の時、遊技に加わらない。母が後でたずねる
と、「先生がしなくてもいいよって言ったよ。」と
うそをついて平気といった有様。そんな子に対して
園の先生は十分に面倒を見てくれないように思われ
る、とその母は言う。

「先月の参観日のことなんです。ちょうどマット
練習の時でした。うちの子は背が高いので列の後ろ
に並んでいましたが、先生は前から順にけいこをさ
せておられました。ところが先生はうちの子の所ま
で来ると、どうしたのかうちの子にはさせないで、
急にくると前に戻ってしまわれたのです。それか
らしばらくしてまたけいこを始められました。A
子の所でまた止められるのです。これは明らかに差
別じゃないでしょうか。いくら子供にやる気がなく
ても一言やっごらんとやっごらなくてもいいじゃあ
りませんか。私はどうしても先生にわけを聞きに行
かなくては気がすみません。」

というのが母の訴えであった。

[診断]

- ・母と子と先生、三者の人間関係にユガミが見られ
る。
- ・そのユガミが生活の現象面にヨジレとなって現わ
れている。
- ・現象面の底を流れているものは不信。その不信は
対話不足から生じている。
- ・子供のうそは想像力を使った自己防衛。

[治療]

- ・子供に対して……母と子の信頼関係を築くこと。
これは浜田三雄先生の言われる、①認める、会話
量をふやす、の二条件に尽きる。
- ・先生に対して……ヨジレた現象をナマのまま取り
上げて対決しない。相手の善意を信じてわが子へ
の態度の好転を期待する。
- ・母親自身に対して……心の姿勢を明るく変容させ
るよう努力する。
などのことを話し合った。

[結果]

だいぶ日がたった後のこと、第2回の母親セミナー
で、その母との対話の機を得た。その時思いがけ
ない好結果が生じていた。というのは、あの日の先
生の差別と見えた行動にはそれなりの理由があった
由。あの日先生はA子の所まで来た時、自分のスカ
ートがほころびたのに気がついた。あわてて戻って、
手でちょっとつくろってすぐけいこを再開した。す
るとまたA子の所でほころびてしまったのだそうだ。

「参観の私たちに気づかれないように、先生はき
っと苦しまれたのでしょうかね。」

と母は語った。

「そんな打ち明け話をされた先生に、私はそれ以
後何でも気軽にものが言えるようになりました。
そして昨日は給食の時、先生はうちの子に『よく
食べられてお利口ね。』と声をかけて下さったそう
です。私はそんな先生も嬉しいのですが、それ以

上にそのことを帰宅してすぐ話してくれたわが子の笑顔が嬉しくて仕方がないんです。先生（これは私へ向かって）どうもありがとうございます。」

私はこの母のこばに胸を打たれた。そしてこのたびの母親セミナーは成功だと思った。その成功の原因は、集まった母たちがそれぞれ課題意識を持っていたこと。次にこんな打ち明け話ができるほど、親しい人間関係にあったこと等によるものと思われた。そして私は「母親セミナーのねらい」を次の二点に要約してみた。すなわち母たちお互いの対話を通して、①わが子がより良く変容するキッカケをつかむ、②そのためにまず母親自身が変容することを学ぶ、ということである。

② ポピー学習を好きにさせるコツ

（小4年B児とその母との学習相談の記録）

対話主事として、初対面の子供と母に対するにはちょっとしたコツがある。それはできるだけ早く子供の美点を発見することである。私はまずポピーシートを通覧する。（国語を例）どのシートも乱雑な字の連続である。何枚か見ているうちにやっとなぜかいい字につきあたる。そこで私は母に向かって、「お母さん、ほらごらんさい。B君のこの「博愛」という字、実にきれいに書いていますね。おや次の「愛読」、もいいですね。ボクは「愛」という漢字の専門博士かな。」などと、これは本人ではなく母に向かってほめる。それがコツである。「ひとつこの博愛という漢字を紙に書いて、お父さんに頼んで額に飾ってもらいたいね。」

B児はそばで、恥ずかしいやら嬉しいやらの得意顔。そこですかさず子供に向かって、「こんなすばらしい字が書ける人が、前のシートのほらこんな乱雑な字を書くはずがないよね。B君の中には、きれいな字を書くほんとうのB君と、乱暴な字を書くうそのB君とがいっしょに住んでいるんだね。」ときとしたところで、「さあこのシートのここをやっごらん。」と指示する。すると子供は熱心にシートに立ち向かい始めた。

子供は他人から認められたと自覚した時、自覚は自信となり、自信は意欲へと連る。こうして私と母子との初めての出会いは、子供の「勉強の楽しさ」との出会いに変わり、以後私は母子との信頼関係の上に立った対話活動を、私のペースで進めることができた。

ところが、もし私が、子供との初対面で、「何ですか。この乱雑な字は。こんなことではだめだよ。」とでも言おうものなら、以後彼は貝のふたを閉じてしまいうちがいない。学校の場合、担任教師と受持

児童との人間関係は既にでき上がっていてその上で指導が進められる。これにくらべて対話主事のむずかしさは初対面のぶっつけ本番であることにある。

さて以上私は母親セミナーと学習相談の二例を挙げて、対話活動の楽しさとむずかしさを考えてみた。私はこれからもこうした実践事例を重ねていくうちに、全家研教育運動について、学校教育でなく塾教育でもない、家庭教育の新しい型が創造されるのではないかと期待している。そして、私はこの期待実現への道程の中に、私の生きがいを求め、この道一筋に進んでいきたいと念じている。



教育対話

ひとすじに

奥田和良

（河南支部）

1. 教育対話主事としての生き甲斐

公職退任後、老子の「絶学無憂」とか、白隠禪師の「仏法を忘れ去って、悠々白雲を見る」などの境地に立って、晴耕雨読の日を持つ気持ちになれなかった。それは今日の世相を見る時、末世とか近代の終焉といわれる灰色の前途であり、真の敗戦はこれからといわれる感がするからである。勿論「乃公出でずんば」の大それたものは毛頭ないが、永年の体験を少しでも世に役立てることが出来ればという俗気があった。その時、尊敬する平澤先生、鯉坂先生などの率いられる全家研から招かれ、教育対話主事の一人に加えられたのは嬉しかった。

教育の基盤である家庭教育の確立に直接実践の手足となって活動することは、年令や職責の上のみならず、精神面からも、還暦を迎えて新生の一步を踏み出す思いである。教師として、学校経営や教育行政に当たった時より、教壇に立った時が最も楽しかったように、教育対話によって、モニターや会員、それらの子供に接する日々に、真に生き甲斐を覚え、現場実践の楽しさをしみじみと感じさせてくれる。

2. 実践の力

教育対話を効果的に進めるため、努めてモニターとの交流を深めることにした。支部日より、手紙、葉書、電話によるほか、家庭訪問をして親密を深め、家庭の生活状況を把握し、その子供の指導をした。それから、モニターを通じて教育対話小集会を開催し、会員と否とにかかわらず、近隣の母親に集ってもらい、家庭教育に関して話し合った。生活態度の躰

家庭学習のこと、学校との連絡、塾その他の稽古事、PTA、その他あらゆる教育問題について質問をうけたり、関心を誘導して、その解決に指導助言をした。場所日時もモニターや会員の都合に合わせて、回数を重ねた。時々モニターと共に各家庭を訪問し、子供にも会って話し合いを重ね、何でも話し合えるように努めた。縁による出会い、親の願い、大脳生理と無限の可能性、個性と発達段階に応じた導き方、歩行訓練の例から、母親は最良の教師であり、その中に教育指導法の原理のあることなどを具体的に話すことによって、母親の自信と希望を見出して、持続実践して習慣化を図ることを望んだ。

前に永井文相の時に、四頭立ての馬車による教育改革が提唱されてから、漸く四頭立ても揃い、学習指導要領改訂、大学入試改善も行われることになった。けれども、これらの改革の運用については幾多の不安があり、早急にその実効を挙げることは難しい。現状の世相から見て、論議が対立し、協力一致して推進の方向に向かうには、途遠く、実行案には自信が持てない。いわゆる本音と建前があり、自分の子に関してくるとか個々の問題になると、数多くの障壁につき当る。これらの問題を具体的に掘り起こして、根気強く解決を図るように努め、回を重ねて、親と子の努力を確認していった。

また、地域社会の子として、共同学習の意識と場を持つことが必要であり、そのために各公的教育機関、社会教育諸団体の理解と協調を得なければならぬ。そこで、教委、学校園、PTA、町会、社会奉仕団体を始め、趣味の会、親戚知己にまで、全家研運動の理解を求めてPRに努めた。

現実具体的に問題を解決していくことが最も重要であり、力を発揮するものであるが、それは如何に困難であるかは、実際にやってみてわかるものである。机上の空論とはいえないまでも、とかく実践の裏付けのない理論は、整っているようであるが、現実には無理があり、はかなく忘れ去られてしまうものである。今まで、教育界にはややもすると理論が先行し、議論倒れになり、論争が絶えず、そのため教育論に統一がなく、調和と発展の妨げとなっていたことを思うと、教育の道は共に感じ、共に憂え、共に実行して、始めて力を発揮するものであることを体得させられた。

3. 垂範（環境）の力

こうした対話主事としての実践活動の結果、次に確認出来たことは、神は公正であり、人生は掛値なしに自ら努力することによって開いていくものであり、全家研の趣旨の誠実さということが教育の基本であるということである。中江藤樹の教訓である

「金の柄杓と^{なま}膽」の喩えの通り、指導者の言動品性はそのまま子供に受け継がれていく。子供は言う通りには成らないが、する通りになる。人を指導し感化するには、率先垂範が肝要である。対話主事自身の自己研修、実力が重要であるのはいうまでもなく、全家研運動の先兵であるモニターにその人を得ることが第一であり、モニターの家庭がよく修まり、その子供がよく向上していることが会員普及の最大の力である。また、会員の家庭教育が充実し、子供の生活や学習の自主的態度が育っていくには、その親の態度にかかっており、母親の熱意努力がなければ成果は挙がらない。

今日の時代は一人の偉人聖賢の力によって世直しが出来るものではない。必ず多くの協調による必要がある。そのために全家研のような組織の力によるのが肝要である。それと共に、組織内の個々人が自ら指導者としての自覚に立って、自らの責務を果すように努めなければならない。

子供の注意集中力がつかず、主体的な行動がとれないのも、大半は母親に要因があり、折角のよい教材である「ポビー」も活用出来ず、ただ求めて与えるだけで遂に退会する会員も結局母親の根気がないところに起因する。「孟母三遷」の教え、瓜の蔓に茄子は成らぬ、氏より育ち、子を見れば親はわかるなどの俚諺は、子供に与える環境の影響力の強さ、よい示範の必要を語っているものである。親の日常行動の責務をよくよく反省する必要がある。

4. 継続（習慣化）の力

次に痛感したことは、実践しつづけるという継続の肝要さである。継続してやり通すことによって苦難に耐える喜び、成功感を味わい、欲望を制御し、純化向上させていくことが出来る。継続して習慣化させることの力は、大脳の生理からいえることで、これによって大脳の活力を生むことになる。いわゆる身についた知識技能で、体得した実力となる。

継続するには余程の根気を要し、そのために賞讃激励の養分を与える必要がある。そして、必要最小限の基本的なものを子供の発達段階に応じて、例外なしに欠かさずにやり続け、躡けることである。人は学習によって人となり、天与の脳細胞を活用することになる。天才は汗だという無限の可能性をもつ意義を説き、また、「教」「学」「習」の字義から、「教を学んで自ら習う」ことで学習が成り立ち、「忘却曲線」から復習の意義を話して、習慣化の必要を説明すると、母親は理解してくれるが、継続して訓練してくれる人は少なくなる。

5. 親の願い

「親」の字義や「とんぼ釣り今日ほどどこまで行っ

たやら」の句の通り、親は常に子に思いをはせている。憶良の「瓜食めば」や「白金も」の歌に同感を寄せる。子供が健やかに成長し幸せな人生を送れるようになることは、親の最上の願いである。子供も早く大きく、立派な人になりたいと思っており、親や教師や友人に認められたいという願いをもっている。親子は本来共感共鳴する願いをもつわけで、親として幼児期に歩行訓練を遂げた体験を子供の発達段階に応じて適用し、賞讃激励し、親子共に成功感、満足感を味いつつ、知恵に根ざした厳しい愛情と訓練によって根気強くよい習慣づくりに努めてほしいものである。家庭が修まり、よい子が育てば社会も明るくなる。親、子、社会の願いに沿って、家庭教育の確立に努力精進することは、教育に従事してきた者としての楽しみである。



私の母親セミナー

齋藤久男
(徳島本部)

[1] 母親セミナー観

母親セミナーは全家研運動の趣旨を会員に徹底さす場であり、家庭教育の悩み、家庭学習のしかた、家庭教育における母親の役割・姿勢など家庭教育のいろいろな問題を、会員相互に話しあい解決の糸口を見つける集いと理解しています。

教育対話主事は会員が気軽に話しあえる雰囲気をつくり、会員の素朴な考えを引き出し、肯定し、更に次元の高いものへと引きあげ、家庭教育の本質を把握するよう助言し、参加してよかった、次の会にもぜひ出席したいという満足感を味わせるようつとめなければならない。

[2] 母親セミナーの記録

- (1)日 時 8月1日午後8時～10時半
- (2)場 所 阿南市横見集会所
- (3)出席者 対話主事、モニター、会員7名
- (4)会の進行

①自己紹介

- 対話主事(略)
- モニター(略)

対話主事とモニターは、会員の気持をほぐし、気軽に話しあいができ、飾り気のない本当の話ができる雰囲気をかもしだすように、くだけた自己

紹介につとめる。

○会員自己紹介

家族構成や家庭教育の悩みを紹介してもらおうとあとの話しあいに役立つ。

②全家研運動の趣旨、活動について説明。

映画「全家研のすべて」を上映して全家研運動の趣旨、活動について説明。特に教育対話活動が全家研独自の活動であることを強調する。

③教育懇談(話しあい)

教育対話活動の一つに、この会のような母親セミナーがあります。これは子どもをよくしたいと願うおかさんたちが集って、家庭教育の問題について話しあう会です。

野球のキャッチボールのように教育対話主事と会員のだれかさんと2人きりで話しあって、他のみなさんが聞き役になるわけではありません。輪をつくってバレーボールのパス練習をするときにように、参会者のみなさんのひとりひとりが主役になって家庭教育のことを話しあう会です。

さあ、輪になってポビーバレーボールのパスをはじめましょう。

ボールは子どもさんの学習のこと、躰のこと、性格のこと、進路指導のこと何でもいいのです。どんな小さなボールでもいいのですよ。

ボールを落さないで、パスを続けるように、自分の体験や考えを話しあって、話を続け、話の輪をひろげ、家庭教育の本質をつかみ、自信を持って家庭教育にとりくみましょう。

主事 それでは、だれかボールをあげてください。

A では、私から。私の長女は1年生で2月生まれです。同級生に比べると身体も小さいし、することがぐずで、ずいぶん遅れているようで心配です。

モニター さあ、ボールがあがりました。落とさないように話を続けてください。

B 私のうちは、幼稚園ですが3月生まれです。Aさんの話を聞いて心配になりました。

C いつから、いつまでに生まれた子が同じ学年ですか。

主事 4月2日から翌年の4月1日までに生まれた子が、同じ学年です。

F 早く生まれた子と遅く生まれた子では、1か年の開きがあるのですね。

主事 そうです。入学式当日(4月10日)6歳になったばかりの子、間もなく7歳になる子、中には7歳になっている子もいます。

B 当然遅れがあるということになりますね。

G 私のうちは、兄が6月生まれの中学1年生、弟が3月生まれの4年生。弟の方は同じ学級の子と

比べて、1年生のときは遅れているように思いましたが、今は感じません。

A そうすると心配しなくてよいでしょうか。

主事 この附近は稲作地帯ですね。稲づくりについて考えてみましょう。

田植えが1週間遅れるとどうなりますか。先に植えた稲はしっかりしているのに、後植えはヒョロヒョロですね。ところが今はどうでしょうか。見分けがつきませんね。稲作では、早く追いつかせようとして田植え直後に肥料をやったり、一度に多量の追肥をやってはだめですね。適期に適量の肥料をやるのが多収穫の秘訣ですね。

子どもも同じように考えてよいではありませんか。早く追いつかせようとして、あせって無理をすると勉強ざらいになります。友達と比べるよりか子どもが順調に育っているかどうかを見極めることが大切です。

私の体験では、学年の進むに従って必ず追いついてきます。追い越す人も沢山あります。

A 安心しました、あせらずじっくり見てやります。

E こんどは私がボールをあげますよ。依頼心が強い、根気が続かない、と先生から言われたのですが。

D 私も言われました。

主事 たしか、Eさんとこはひとりっ子でしたね。

Dさんところは3人姉妹だけど高校と中学校の姉さんで、ずいぶん年の開いた末子でしたね。

D そうなんです。

主事 失礼ですが、DさんとEさんのお子様が周囲からどのようにあつかわれやすいか考えたいのですが、DさんEさんよろしいでしょうか。

D 結構です。

E どうぞ。

主事 2人のお子様によく似た点があるのですが、考えてみてください。

G Dさんの場合姉妹ですが、年齢の開きが大きいので、ひとりっ子と同じ立場と考えられませんか。

C 二人とも家族の方から、世話をやかれているの

ではないでしょうか。

モニター 私のうちはDさんと同じ子どもが三人ですが続いて生まれたし、祖父母がないので、二番目からはほったらかし、子どもは、何とか自分でやっているようです。

主事 世話をやきすぎると依頼心が強くなります。周囲の者が手伝ってくれるので、少し困難ことになる自分でも自分でやらないで投げ出してしまうようになり勝ちです。

ポビーは1枚1枚バラになっていますね。1枚だけなら少しの時間でできるので、とりくみやすいし、みんなやったという成就感、満足感が味わえます。毎日1枚ずつ続けることで最後までやるという根気づよさが養われます。

毎日自分の寝具のかたづけや部屋の掃除をするとか、植木に水やりをするとか手にあった仕事をさせ、おかあさんが励ましてやったり、努力を認めてほめてやったりして続けさせると根気づよさや責任感ができてきます。夏休み中続けてやらせてごらん。

D・E あすからやらせてみます。

主事 DさんEさんのお子様は何をしても途中から投げだしてしまいませんか。

D うちの子は本を読みだすと読んでしまうまでやめません。

E プラモデルを始めると、ごはんも忘れて。

主事 そうすると、おふたりとも根気づよさは充分あると考えられますね。子どもに興味があるか、ないかも一つの原因になります。

体力がないとか、病身であることも根気の続かない原因にもなります。

F うちの子は教科の好ききらいがあるので困っています。

以下の話しあいは紙面の都合で省略。こうして、話は後から後からと続く。時間の過ぎるのを忘れ、夜のふけるのも忘れて。

展けゆく地域社会との交流

4

現在、全日本家庭教育研究会には、全国に465支部があり、各支部に所属して会員の普及と相互連絡のために活動される賛助会員（モニター）が凡そ1万3,000名おられます。このかたがたは、いずれも当初普通会员であったのを、時を経るにしたがって本会の趣旨に賛同し、進んでこの運動の推進に一役を担って参加されたもので、その日々の活動状況が目あたりに見るとく報告されています。教育の事業は、山に樹を植えるようなものと言われますが、まことにその語の結実を今、目あたりに見る思いがします。

大切な母親の役割



奥井悦子

（富山支部）

人から頼まれると断ることが出来ず、気軽にモニターを引き受けることになってから二年目、返事はしたものの全家研の内容を知ると気の重くなる日々でした。先ず主人と子供にポピーモニターの仕事をするからと了解を得て、子供達が会員になりました。中学生の長男、小学生の長女、幼稚園児の次男と、子供達の世話だけでも多忙なのにモニターの仕事が務まるかと、不安ながらも我が子をポピー子に育てようと決心致しました。

「鉄は熱いうちに打て」とはうまく言ったもので、中学生の長男は自分なりに学習の仕方が出来ていたもので、なかなかポピーに飛びつこうとはせず、気をもませましたが、テストが何回か終る頃には「ポピーもいいな、テストバッチリだったよ」と利用している様子が見えホッといたしました。小学生の長女は、友達に会員の方があったのですんり以前の使用していた教材からポピーに移って、かえって友達と競争して活用しました。「今月の新聞におもしろい記事が出ていたから学級新聞に載せようか」、「国語と算数の問題シートを増して、社会、理科をカットしたらよい」と意見を言ったりするようになり、楽しんで利用しています。幼児ポピーの次男は抵抗なく初めからポピー子です。配本と同時に飛びつき二、三日で仕上がり、特に製作品が好きようです。雨の日は出来上がったポピーを何回も何回もページをめくり、丁度一冊の絵本を何十回となく読んで暗記した時のように、充分に利用しています。このよう

に、我が子を土台にしてのモニター活動が始まりました。人に勧めるからには、先ず自分が知り、我が子からと、全家研の主旨を理解し、ポピーに関する資料を片ぱしから読み、納得し、確信を持って普及にスタートいたしました。しかし、仕事となると厳しいもので、仲々思うようにまいません。単なる配本、集金にしても何度訪問しても留守だったり、あっさり「やめるわ」と退会されたり、「もう来たの、まだ先月号終っていないのに」。逆に配本が遅いと文句を言われ、職場へ配本の場合は、今仕事だからと待たされ、予定通りに配本出来ず苦勞しました。自信を失い挫折しそうになった時、支部からモニター打合せ会の案内を受け出席しました。モニター会で先輩のモニターさんからの苦勞ばなし、失敗談、成功談を聞き、対話主事先生の指導を受けると、私だけが苦勞しているのではないと自分を慰め、力づけてモニター活動を続けようと決意をあらたにいたしました。月一回の支部のモニター会は私にとって横の連帯を持つ励まし合いと、憩いの場となっています。

会員一人一人をよく分析してみると、人間関係、心のつながりの乏しいのに気が付きました。早く心の疎通を図ろうと初めは会員の方のペースで夜配本したり、集金は給料日後にしたり、訪問時には必ず一言話しかける。「暑い日ですね。きれいなお花ね。かわいい小鳥ね。もうすぐ試験だからがんばってね。」等、一度より二度、二度より三度とたびたび顔を合わせ会話を重ねると自然に相手の心が開け、今では配本に行くとき「待ってたのよ。成績よくなったわよ。『こころの文庫』いいわね、親も読んでいるのよ。〇〇さん紹介するわ。」等、うれしい会話へとかわってきました。時にはプライベートなことまで相談されたりして、心のつながりが出来ました。このつながりの糸を断ち切ることなく、太く丈夫に

育てていくのが私の務めだと思っております。

普及活動は大へんな仕事ですが、先ず口コミ、会員から会員への紹介が一番で、訪問先では絶対に他社の教材を批判しない事、自分の子供も使っていたのですが、ポピーにかえてみましたと話し、退会員には、無理に継続を勧めず、しばらく休みましようかと休会員と考え、二、三カ月たったらさりげなく伺ってみる。その間は会員と同等に扱い誠意を忘れないつきあいをする。配本時留守の場合は、メモでもよい一筆書いて郵便受けに入れて帰り、再度訪問する。出上手、聞き上手、誠意をつくす、これが私のモニターとしての心得としております。

子供には誰れにでも無限の可能性があると全家研のことばにもあるように、育て方によっては、すばらくなる可能性を秘めていると思います。子供等を立派に育てるには、両親に深い愛情がなければならぬし、幼い時から、この子をどんな子に育てるかという方針をもつべきではないでしょうか。

子供は親の後姿を見て育つとか、親を見て嫁をもらえとか味わうべき言葉がありますが、親が子供を教育するためには、親自身の生活態度を反省しなければなりません。5歳の子は5歳の子の目で、中学生は中学生の目で親を見ています。しっかりした姿勢で人生を真面目に生きていく生きざまを子供に示さねばならないと思います。よく会員さんから勉強をしない、本を読まないの困ると相談されますが、テレビの影響、その他いろいろ原因はあるでしょうが、一つには女親に問題がありそうで、子供を勉強せず本ずきにしたければ親にそれらの姿勢がほしいし、環境も整えてやる必要があるかと思われます。全家研の教育五訓も、まず親が勉強、子どもも勉強と母子共学がうたっています。

子供達のもつ無限の可能性を伸ばし、すばらしい人間に成長させるためにも幼い時から一流のものにふれさせ、本物を与える機会を親が作ってやる必要があります。ポピーとの出会いを心から喜んでいる親の一人です。

「ポピーのおばさんが来たよ」。母親に伝えている耳なれぬ自分の呼ばれ方に、モニター当初はいやだった私も、今は会員の子供達と顔なじみになり、道であっても笑顔で「こんにちは」の言葉をかけあうことが出来るようになりました。これからも「慕われるポピーのおばさん」に「待たれるポピーのおばさん」でありたいと思います。

私のモニターの仕事が続いているのは、私自身の努力ばかりではなく、支部の方々、対話主事先生の助言、指導と、家族の者の理解と励まし、会員の方々の協力のおかげと感謝いたしております。

モニターの仕事を通じて、人のために役立ち、我が子を伸ばし、私自身も大いに伸びたい、そして、子供達が大人になったとき、いいおかあさんだと言われるような、そんな母親に成長したいと念願いたしております。

賛助会員手帳から

甲斐照子

(大分支部)

「あっ、ポピーのおばちゃんだ。こんにちは。」明るく元気の良い声が飛び交う。当初はこの声にもピンとこず、誰のことかとあたりを見回して「ああ、私のことか」と苦笑を繰返していましたが、この8月で1年4ヶ月。幼稚園の〇〇ちゃん、〇年生の〇〇君、すっかり中学生らしく着落いて真っ黒に日焼した顔に白い歯が印象的な〇〇君、次々に浮んでくるポピー子達の顔、顔、顔。「ポピーのおばちゃん」にやっと慣れきったこの頃の私です。モニターとして果たして私にこの仕事が遂行できるかと不安にくれたあの日。

会員さんが少しずつ増えてきた時の喜び。休会者のでた時のショック。「ポピーは素晴らしい教材ですね。紹介いただいて感謝しています。」と温かい声の反響があった時の嬉しさと満足。いろんな感情の流れと共に過ぎてきた今日までの想いを、賛助会員手帳に残されたメモから拾ってみる事に致します。

〇月〇日

我家とポピーとの対面の日である。長男の家庭学習にポピーを使用してみる事にした。勿論、本人の希望の声をきいた結果である。その時の普及部の方に、モニターを紹介され、主人と相談。

1. まず親が勉強。2. 子どもも勉強。3. 勉強はよい習慣づくり。4. 習慣づくりは人づくり。5. 人づくりは人生づくり。

という家庭教育五訓にこれだと感じて引き受けることに決定。こうして私とポピーとの生活がスタートした。まず息子達のポピー使用をみることから始まる。素晴らしいことは、他の人達にも紹介したい。普及活動を通じて地区の人達とも心のふれ合う友達になりたい、という動機もあったからである。特に記念の日として月・日を記しておきたい。

昭和52年3月13日。

〇月〇日

普及活動に必要な資料を支部より預り、ガイドブックをはじめとして、何度も読み返す日々が4、5

日続く。次男と同級のSさん宅を訪問、幼児(A)の紹介。「今度、全家研のモニターをやることになりました。お宅が初訪問です。おしゃべりの練習をさせてね。」

気心の知れているSさんは、新米モニターの説明を最後まできいて入会してくれた。私の第1号会員さんであった。今考えれば、汗だくのポピー紹介だったと想いが深い。

○月○日

普及部の方の応援を得て、同クラスのKさん宅を訪問。Kさんは入会済みで親類の方を紹介していた。次はBさん宅。3年生は大切な基礎学力をつける時期だと力を入る説明で入会いただく。先輩(?)の訪問紹介態度をじっくり勉強させていただいた時間であった。誠意ある態度、言葉は、全家研の趣旨を深く理解し、ポピーの良さを自分の言葉で表現出来なくてはいけない。そのためのいろんな問題を探究していきたい気持ちがムラムラと湧いてきた。

○月○日

3週間が過ぎた。ポピーの輪が近所の人達や友人、知人へと静かに拡がり、52人の会員さんを得て嬉しい限り。どこの家庭も強く家庭学習の大切さを感じていることを痛感する。ふと開いたある本に「人間には早稲と晩稲とがある。その子の素晴らしい才能がどこにあり、いつ花開くか個人差がある。それを待たずに、いや、花を開かせる努力(教育)をしないで……」との言葉。ふと私は思う。この努力をお母さん方をお願いするのが、モニターの使命ではないのかと。

○月○日

3カ月目の配本。T君はやくも休会したいとの事。地理的に離れているT君には、人を介して配本していた結果である。毎月のポピー1冊にも、生の声、生の対話が必須条件である。全家研のいう心のふれあい、がおきざりにされていたと反省する。その対話時間をいかにして作るか。配本の折だけの対話ではどうしても時間に限界がある。モニターとして月を重ねる度に、新しい課題が生じてきた。

○月○日

支部のモニター会に初出席。内容は教育界の動向。ポピー教材の企画の背景。ポピーのしくみと使い方。本部の方の説明であった。久しぶりの勉強でグッタリと感じ。諸先輩のモニターさんも、相手のあるこの仕事に共通の悩みを持ちながら、日常の活動を続けている。モニター会には必ず参加して、先輩達の体験をききたく思った貴重な一日であった。

○月○日

夏休み号の普及に飛び込みをやる。顔は知れども

家は知らずで、勇気のいる訪問である。40日間の夏休みを規則正しく、有意義に、また負担に感じることなく過ぎさせるには、短時間で能率的に身のつく「ポピー」がだんだん理解される傾向がみられてきた。兄弟の使用がこの月特に目立ったことである。自然に会員さんがふくらんできたということは「ポピー」の内容と効果が認められ、全家研の趣旨を理解してもらえたのだと、暑さも忘れて感動した。現会員93名。

○月○日

自転車から原付カブへ。このカブを息子達は「ポピー号」と呼ぶ。これが私の側にある限りポピーとの流れは続くだろう。これで、幾分か時間の余裕ができ、対話の時間がとれ、問題がひとつ解決された。走れよ。我がポピー号!!

○月○日

新しい年を迎えて、モニター県大会の日である。福岡教育大学の橋田先生の講演に耳を傾ける。「モニターとは、免状のない助言者、奉仕者である。悪くいえば、ポピーの配本と集金で終わってしまう。これではいけない。プライドと自信、勇気を持ってこの仕事に従事しなくては、鍵っ子や放任された子等にポピーを持ってあたたかい手を差し伸べよ」と……

休会者のポピー子達の母親には仕事を持つ人が多くみられる。その反面、6カ月間も残されたシートの多いポピーを横目ににらみ、親子の根気比べで、ついに母親に勝利の軍配があがり、今ではとても頑張っているY君親子を想い出す。多分このY君は、これからポピーとは深い友達であることだろう。

○月○日

雪の舞う日であった。初の小集会を自宅で催す。*新一年生の心構え、をテーマにおいて対話主事(平瀬先生)の生活面学習面からのお話の後、積極的な意見、質問が後を断たず、時間の延長。厳しい冷え込みも忘れてストーブも炬燵も不用な程の熱心さであった。この結果、反省集会を半年後に開こうと意見をまとめて会を閉じる。出席者6名。

○月○日

1年間ポピーに馴染んだポピー子達は自信満々、挨拶もちゃんとでき、すっかり私と友達になった。4月の進級を機会に、休会者へ復帰を呼びかける。配本の折や道で逢えば声をかけ、講演会や小集会にもお誘いする。一度のご縁は大切に、糸を切ってはならない。[モニター仲間を求めてTEL作戦。一度家庭に入ったお母さん達は、新しい仕事に不安を感じる。当初の私の様に。どうしても普及員としてのイメージの方が強く先にきて、難しいとの返答

が返ってくる。この混乱した現代の教育事情にあって、基礎学力の学習習慣を身につけながら、伸び伸びと大いに遊ぶ子供達の姿を浮かべて、お手伝して欲しいと仲間づくりに励みたく思う。4月号会員162名。

こうして現在180名近くの会員さんの温かい信頼を得て、どうにかモニターとしての自信が持て、前向きに歩いて行く事が出来る様になりました。これも多くの方々のお励ましと助言をいただいた結果だと感服しています。今後も微力な自分に鞭打ってモニター仲間と手をつなぎ、親睦研修の意見交換の場を重ねて適切なアドバイスが会員さん達に届く様、頑張りたいと思います。

台所からの声



藤井京子

(備後支部)

寺と坂のある尾道。箱庭の様な小さな町で生まれ育った私は、根っからののんびり屋。2人の子供を持ちながらも、教育の上においても、本当に、井の中の蛙になってしまっていました。

そんな折に、知り合いの方からの紹介でモニターのお話があり、自分も勉強させていただくという軽い気持ちで、受けさせていただいたのが、きっかけとなりました。

こんな小さな町にも、教育戦争だけは、しっかり根を下していることを改めて知った私は、我に帰る、我が家の子供も、これではいけないと心を正したものでした。

毎月の僅かばかりの配本にもやっと慣れた頃、思いきって1人で普及に出かけた時です。私も何しろ、初めての経験で、玄関のベルを押すのもためらいがちでした。

「お家での勉強は、如何なさっておられますか。」

と、おそるおそる声をかけると、玄関脇から、

「家の子は、遊びばかりしとるから、そんなものはやらんから、いらんよ。」

「学校から、先生がプリントを沢山下さるから、子供はそれをやるのが精一杯ですよ。」

等々、私の不安をよそに、訪ねるごとに、次々とそんな言葉がはね返って来ます。

ポピーなど買っていたかなくとも良い。こんな良い物があるのを知っていただきたい。そんな願いをこめて訪ねる軒々に、一向に聞く耳をかしてもらえない事は、悲しいことでした。そんな思いを繰り返

返しながらも、二、三軒回っているうちに、ある家から大きな声で、算数を教えておられる家にぶつかりました。窓は、しまっているのに、とても大きな声がかきこえるのです。

あーあ。ここのお母さんも、私と同じで、だいぶ頭にきておられるらしい。現場を耳にした私は、自分の姿をそこに見る様で、ニヤニヤ。やっぱり、みっともないなと苦笑したりしておりました。

それでも、休む暇もなく、大きな声が続くので、私も一寸気になって、ドアに手をかけてしまいました。

「ごめん下さい。ごめん下さい。」

声をかけても、聞こえた様子はありません。玄関の奥の台所らしい所に、二つの背が並んでいて、一生懸命算数に取り組んでおられるではありませんか。

二度、三度、私の声は、自然だんだん高くなってゆきます。そのうち、少し横向きに坐っていた女の子さんが、やっと気配を感じられたらしく、お母さんの肘をつきました。お母さんが、軽く頭を下げられたその時、私は、はっとしました。

耳には、二人とも補聴器があてられているのでした。

「すみません、娘も私も耳が違いもので……。」

と、奥の方からいそいで出て来られました。

「ポピーでございます。お子様のお勉強をみて上げておられたのですね。なかなか出来ないことです。頑張ってください。」

と、私はさりげなく耳元で話しかけていきました。

「私は、小さい頃から、耳がよく聞こえません。だから、難聴児の学校へ行きました。私は、どんなに、友達の通っている普通の学校に入りたかったことか……。この子も耳が遠く不調でなりません。それだけに、私の力で、出来得る限り、今の学校に通わせたいのです。」

事情を話して下さいました。

いろいろお話を聞いておりますうちに、国語や算数は、家庭学習で、組の中でも、上の中ぐらいで、私には羨しいほどでした。

けれど、理科と社会は、なかなかそうはいかないとのことでした。きっと、先生の説明される内容が、余りよく聞きとれないうちに、次々と進んで行ってしまうところに原因があるのではないかと考えた私は、先生に代って親切に指導してある手引きの欄を見てもらいました。

お母さんも、お子さんも、手に取る様に解りやすくまとめた「手びき」を見て、

「これは、いいですね。私達の様な耳の悪い者にも、普通の子と同じ説明が、この紙の上で聞けるん

ですわね。」

私は、その言葉に、胸がじんとなるのを覚えました。普通の子と同じ様に！

またも耳の奥で、その言葉がはね返って来ました。五体満足な私共の子供が、はたしてどれだけこの「手びき」を読んで、理解しようと努力しているだろうか。

私は、教えられた思いで帰って来ました。

あれから1年数カ月……。お子様も以前よりずっと成長されて、もう3年生。半年前に、引越しをされる時にも、私から希望して、遠い道のりを心はずませて配本に行かせていただいております。

「ポビーのおかげでしょうか。成績がこんなに上りましたよ。」

8月号の配本の際、通信簿を持ち出されて私に見せて下さいました。

そんな時、私は、こんなお仕事をさせてもらってよかったなあとしみじみ思うのです。

私は、このお母さんから学んだ事は数多くありました。その中でも人に逢うごとにお勧めしていることは、「台所勉強」です。少くとも、小学校中学年までは、それが一番実行しやすい親子勉強法だと思いました。ぜい沢な勉強部屋など、低学年の間はなくてもいい様な気がしてきました。台所のテーブル一つで充分です。

台所は、お母さんのお城であり、子供の成長を願いつつ働く場所でもあるからです。

「ポビーは、お母さんの一番よく目の届く台所にでも置いて下さい。そして常に子供を見る様に、一日に一度は、親子で目を通してやって下さい。」

私は、自分の子供を各家庭にお預けする思いで、そうお願いして置いて帰るのです。

ポビーは、対話を重んじています。そして、お母さんが、ポビーの解答欄を片手に、ある時は「にわか先生」になり、子供の心の中に飛びこんでゆける尊い橋渡しの役目をしていると思うのです。

時折、会員のお母さんから、もう少し程度の高い問題をと要求されることがあります。今日のような受験戦争に勝ち抜くためには、ポビーでは、やさしすぎるという声です。

年に一度、毎月のポビーを元にした、ランク別に分けた問題集が出版されれば、もっと幅広い人に利用していただけたと思います。一貫した問題集により、より高度なものへと容易に進んで行く事が出来るのではないかと考えます。

先日、ふと目にした新聞の記事に、総理府の発表した青年の意識調査が記載されておりました。

「国家、社会のために、自らの利益を犠牲にして

も良い」と答えた者は、20%で、世界最低である事を知り、モノ、金だけを追う社会風潮、受験教育の行き過ぎ、文部省と日教組の対立、等が複雑にからみ合った結果だろうと記してあり、考えさせられました。

文部省も、ゆとりある教育をと、今、移行措置の期間中ですが、これが、高校、大学の受験戦争を目前にひかえた者にとって、何の意味があるのだろうか。

受験戦争が解消されない限り、ゆとりある教育もまさにその逆を突走る事になるのではないのでしょうか。

私には、文部省等とは、ほど遠く、意ある皆様方のお考えも、おおよそ想像にもつきませんが、一人前の人間として、社会参加出来る、正しく強い子供を育て、世に送り出す使命は変わらないと思います。

「上を見て伸びよ、下を見て生きよ。」

これは、私の子育てのお手本です。多くの方との交流の中で、しっかりした心で子供達を見守っていきたくて思っております。

与えられた使命



諸岡 英子

(四日市支部)

ポビーモニターにならせていただいて一年余りになりますが、なかなかうだつがあがりません。今ではそんなに抵抗がないのですが、はじめは近所の方に言うのは、はずかしくて遠くの方ばかり普及していました。だから会員さんも未知の方が多いようです。しかしポビーを通じてお友達ができますので、よろこんでいます。

普及のために歩いておりますといろいろの方に目にかかります。熱心に説明を聞いて下さる方、セールスマンと思って話も聞かず断る人、知らない間柄ですでのなかなか入会はしていただけません。ポビーの内容から全家研の説明をしてやっと信用して入会して下さいますとほっとします。でも、これからが大へんです。毎月もって上るのですからそのお子様がうまく使いこなせるかが問題です。

わずか1,300円のことですが、使用しないと、もったいないとすぐ言われるのです。

今日の経済社会の中で1,300円位でしたら子供のおやつ代でも数日で使ってしまう。

断る前にもう一度考えて欲しいのですが。

ポビーを買っておけばそれで成績が上がると思っ

ていらっしやる方があるのには困ってしまいます。薬を飲ませて病気が治るのはちょっと訳が違います。与えさえすればよいのではなく、いかに上手に使うかだと思います。『学問に王道なし』『ローマは一日にしてならず』です。僅か、2、3カ月で教育の成果が現われるとは思われません。

幼児2年、小学生6年、中学生3年この11年間を通じて、その子、その子によって伸びる時期があるのではないのでしょうか。長い目で見守ってやるべきです。

この間も、ある優秀な中学生の作文を読ませてもらっていますと、小学生時代やはりお母さんに勉強を教えてもらったと書かれていました。どんなにすぐれた頭脳を持っていても、それを伸ばすところの人の助けが必要だと思います。少しも勉強をみてやらないがよくできると言う人がいますが決してほったらかしではないと思います。直接手をふれなくても家庭環境、また、その子をとりまく学校の様子が必ずプラスしていると思います。

例えば、植物の場合でもすぐれた種を蒔きましても、肥料をやり草をとり水をやりたりしてはじめて立派に成長し実るのだと思います。

1、2年生は親子共学時代だと言いますと、そんな教育ママみたいなことはできないと言われる方もあります。私はこの人ってほんとうに教育ママの意味がわかっているのかしらと疑問をもちます。

ある時には、ポビーなんて程度が低すぎるとおっしゃる方もあります。小学校1年生位でもう3年の算数をしていますという方もありました。このような場面に遭遇したときは教育論議をしても始まりません。どうもありがとうございました。といて引き下がってきます。何だか物足りない気もしますが。

会員さんの中には、毎日一枚ずつ計画的にしている人もいます。お届けさせてもらった時の様子によって、しっかり使ってもらっているかどうかよくわかります。中学生位になりますとよく使っている人の話が大変、参考になることがあります。とにかく、ポビーを隅から隅までよく読んでいます。理解されているところと、理解されていないところがはっきりさせてあります。

また、すっかり信用されてしまって、この教科はどうして勉強したらよいかしらと相談をうけるときもあります。このようなときは講演会などで聞いたことをお伝えさせていただきます。ときには、自分の経験を話させてもらったりします。喜んでいただけたとき等このお仕事をさせてもらってほんとうによかったと思います。

表紙がとてもきれいだとか、子供がそんなに使わ

ないのですが、ポビーが届けられるのを心まちしているとか、学校がこの科目だけは進むのが早くて待っていたのよ、と言われます。だから支部から到着しましたら出来るだけ早く届けるようにしています。中には、月末、月始めの方もあります。

最近では、紹介して下さる方も増えてきました。ポビーのよさが分って下さったのだと思います。出版物が氾濫している今日では、他にも優れた教材があるとは思いますが、今のところでは、私にとってポビーは最高だと信じています。

これからもお義理ではなく喜んでポビーを使っていたら会員さんであってほしいと望んでいます。会員さんを大切にし、精神的にも、学力の面においてもよい結果が現われるよう願って配達しています。微力ながら実りあるポビーの輪を広げて行くつもりです。

現代社会に於て教育について色々論争されています。塾の問題、入試漏洩事件、若年層の自殺などむつかしいことばかりです。学力だけでその子の価値を決めてしまいがちな世の中のように思われます。しかし、実社会に出た場合、意外な子が出世して、秀才が世間の常識を知らないといったケースもあります。その子、その子によって、おのおの使命をもってこの世に生を受けたのだから、与えられた使命を全うするよう努力すべきだと思います。学問の研究に没頭するさだめの人、会社運営に当たる人、政治に携わる人、さまざまだと思います。学校教育はこれらになるための基礎だと思います。

やらなければならない時期をのがすことのない様に、私たちは協力させてもらっているのだと思います。

全会員さんが満足して、使用していただけるようポビーの今後の発展を期待致します。

若い芽を信じて



加藤ケイ子

(長崎県南支部)

「教育とは、教育されて、それを忘れてしまって、そのあとに残ったもの。それが教育なのだ。」

これは、学生時代に尊敬していたある先生のことばであった。未熟な私は、その真意をはかりかね、「忘れてしまえば、あとに残るものはゼロではないか。」と思ったものです。そしてとうとう先生のことばを理解することもできず卒業をしてしまいました。しかし、私自身非常に尊敬していた先生のこと

ばであったため、不思議と心に残っておりました。卒業後14、5年もたち2人の子供を育てながら何かしら一人前になりかけたある日……。ふと、また先生のことばを思い出しておりました。

私の日々の行動は一体何なのであろう。日々考えたり、感動したり、憤慨したり、すべてこれは、生れてこのかた、両親に、社会に、教育されて来た結果ではないのか。ゼロではない、立派(?)に何かが残っている。長い間の積み重ねが、教えられたこととしてではなく、自分自身の言動となって表現されているのです。これが、先生のおっしゃった教育なのではないか。日々こつこつと積みあげてきたもの、それが真にその人自身になり得た時に、長い間の教育の結果が出るのではないか。最近そのように、先生のことばを自分なりに解釈するようになりました。

そんなある日(2年半前)、全家研という耳新しい名の小集会に参加する機会を得、九州本部の熊谷先生のお話を聞きながら感動し、先の先生の教育に対する考えと相通ずるものを見出しました。

「誠実にこつこつと努力する子」。その結果を急ぐ必要はないと思うのです。本当に全力を尽しているのなら、それはすばらしいことだと考えます。以来、多くのお母さん方とお会いし、全家研のすばらしい運動について話し合い、理解し合い、多くのすばらしい知恵をいただきながらモニター活動を続けております。そして、こんなお母さんにお会いし感動したものです。

「ごめんください。」出られた若いお母さんの対応の気持のよかったこと。話に夢中になっておられますと、よちよち歩きのお子さんがつまづいてそばの柱でおでこを「ゴツン」痛がってワーワー泣き出してしまった。その若いお母さんは「あー、痛かったですよね。」と言って、お子さんのおでこを思いきや当たった柱をさすられました。そしてやおらお子さんのおでこをさすりながら、「こども、痛い痛いといっているのよ。」とさするように、また、柱をさすられました。

私は、感動で胸がいっぱいでした。相手を思いやる心をこんな小さな子供にも、身をもって教えておられる姿を見、きっとやさしいお子さんになれるであろうと思いました。

また、次のような、考えさせられる話題にぶつかったこともあります。

ある女の子さんが、幼稚園時代に、問題児として園から注意を受け、協力を依頼されたとのことです。家庭的に何か大きな問題があるのではないかと、何度も家庭訪問を受けたとのことです。その理由

は、そのお子さんが団体生活の中でひとりのみ出すことが多いということ、絵を描かせる黒一色の絵を描くということでした。

「黒一色の絵」このことだけを取りあげてみると、何かご両親に暗い面があるのではなからうか……ということになりそうです。しかし、このご両親、とてもそのようなところはないし、ますますお子さんが異常なのではないかということになったとのこと。

お母さんは非常に悩まれて、子供さんになぜに黒一色の絵を描くのかということ、それとなくずねられました。しかし、子供さんからは「なんでもないのよ。」と、いった調子で、納得のいく返事は返って来ない。けれども、このお母さんは、あきらめないうで、根気よくたずねました。すると、お子さんの口から、たどたどしく、こんなことばがもれてきました。

「このクレパスね、パパが買ってくださったの。私の大好きなクレパスなの。だってね、とてもきれいなクレパスなのよ。だけどね、一本だけあまり好きでない色があるの。使わないでいると、せっかく買ってくださったパパに悪いから、さきにこの一本だけを使ってしまおう。そしたら、あとはきれいな色ばかりになるでしょ。」

その一本が、つまり黒であったわけです。子供には子供なりに理由があったわけで、きれいなものでも捨てないで先にさっさと使ってしまっ、あとは好きなもので思いきり……という一つの個性みたいなものだったのです。

現在そのお子さん、自分のやりたいと思うことはどんどん実行する明るいお子さんに成長しておられます。しかし、ここまでくには長い間のお母さんの努力があったようです。大学の心理学の先生の所へ相談に行かれたり、絵の専門の先生の所へ行ってみられたり……。そうして、とうとう自分のお子さんの中へ入っていかれたとのこと。

また、私達の県南支部では、こうした対話活動と共に夏休み、春休みを利用し、「少年自然の家」で宿泊研修旅行を3回実施いたしました。170名からの子供達が参加しますので、支部長を初め、世話係は大変です。でも、お母さん方の評判はよく、「生まれて初めて親をはなれて宿泊させたが、本当によかった。」等と、夏休みあけの学級分会で、多くの学級で話題にのぼっております。

こうした全家研のいろいろな活動を通して強く感じることは、私達母親は、もっともっとしっかりしなくてはいけないということです。目先のことだけにとらわれず、子供達の長い将来のために、「すべての面においてこつこつと努力する子」、そして、

「自分達が活かされているこの自然のために、社会のために、どんな小さなことでもよいから貢献できる人」に育つよう努力しなくてはならないと考えます。人生により道はないとか申します。より道やまわり道にみえても、将来何らかの役に立つことを信じて現在をせいっぱい生きたいと思います。

全家研で学び得たことは非常に多く、特に平澤先生のおことばのひとつひとつが、私の心を静め、ほのぼのとした灯をともしてくれます。

「よし、子供を信じて頑張ろう。」

「私自身が行動をおこさなくては……。」

私の生活そのものが子供達へのしつけであることを肝に銘じて、これから先も全家研運動の中で多くのお母さん方と共に学び、そして努力をしていきたいと思っております。

ポピーと歩む



栗原 松江

(埼玉県南支部)

私の家には、高校2年の娘と小学校5年生の男の子がおります。長男が4年生の夏休みの日の事でした。ポピーの普及部員の方が来られ、ポピーの見本を見せ、その説明をして下さいました。その時、初めて全家研なるものの存在を知りました。長男が低学年の頃までは、男の子はなんといっても体力作りと思ひ、勉強は学校だけと実行してきました。頭が良くても、青白く、もやしのような子供にだけはしたくありませんでした。

お蔭さまで体はクラスで一番です。長男も高学年になりましたので、私が見てあげられる良い家庭学習教材があればよいと思っていた矢先でしたので、すぐ入会いたしました。だからといって、どんな学習法でもよいとは思っていませんでした。勿論、ポピーの教科内容、初めて学習をやらせる子供にとって一日一枚のシート、また、教科書に合わせてある事に強くひかれました。そしてポピー会員と同時に全家研モニターとして仕事をやらせてもらう事になりました。初めは、今日までポピーという言葉すら知らなかった私がモニターとしてお手伝いできるのだろうかとか全く自信がなく不安でした。あれから1年になりました。人に勧めるからには先ず自分が良く知らなければと思ひ、モニター会には一度も欠席した事はありません。対話主事先生のお話を聞いたりポピーに関する資料をよく読み、やっとな不安もなくなりました。マイペースで友人、知人会員のお母

様方に支えられて今日に至りました。

私が毎月配本して感じた事

ポピーをやらなくて困るという子供の場合。

①皆、低学年である、②小さな妹や弟がいる、③お母さんが見てあげられない、④過保護、⑤塾への通い過ぎ、等です。

①②③は、まだ母子共学でないが無理である事、④は、自主性が無く、わずかな困難にすぐ挫折してしまう。⑤は時間が無い。

①②③の子供のために私は自分の家で、低学年中心に対話主事先生を迎えて勉強会を開いています。自分の家では、全然やらなかった子供が、次の勉強会をさいそくする様になり、また、ポピーの学習をやめてしまいたいといっていたお母様方が、今では、いつも子供がお世話になりますと喜ばれています。中学生のお母様方には、だいたいアドバイスをしてあげられます。幸いに私には娘の高校進学の実験がありますので、初めて中学生をもたれるお母様方の中で、進学の事や、あれこれと30分間も話しかけて、なかなか離してくれません。そんな時には娘の中学時代の体験談を話してあげますと、大変喜んで下さるお母様方が何人かおられます。

素晴しかった講演会

去る6月に井上隆基先生の講演会が催されました。支部の皆さんはじめ、私達モニターは、会員のお母様方、未会員のお母様方に聞いて戴こうと思ひました。チラシの配布、電話の呼びかけ、そして日時を忘れないように3回位に分けて呼びかけました。

当日雨が降らないように、心配をしていましたところ、梅雨の晴れ間は、もう夏のように青空がのぞきました。開演10時、私は受け付けをするため、早めに会場に行きました。先生の講義の前に、棟方志功先生の映画が上映されました。

胸がジーンとするような、津軽三味線に始まり、棟方先生の独特な方言、そして生き方にはとても感動致しました。また、井上先生は、お書きになった本からの想像通り立派な方でした。

先生のお話の中から

井上先生は、児童生徒の学習法を、追求し続けて20数年におなりになるそうです。

バズ学習、対人法学習、子供の自主的生活、勉強には、フィードバックが是非必要である。親のあり方、子供は親の言うようにはしないが、親のするようにする、等々。

母親として痛いところを何回も刺される思いでした。お母様方も一人一人が大きくなずいており、ほとんどのお母さん達が先生の話の中からたくさんメモをとっていました。

これがこれからのお母さん達の大きなささえとなって必ず生かされてくる事と思います。この時私は、お母様方が如何に子供の教育に対し心を痛めているかを痛感致しました。

先生の講義も大会場にて、満場の拍手に終わりました。参加者も予想以上に集まり、大成功と支部の方々及び、モニターのお母さん方も喜びでいっぱいでした。

こんな時をモニターとしての生甲斐とでも言うのでしょうか、こうした全家研運動に参加する事によって多くの先生方、お母さん方、そしてモニターの仲間達とお会いでき、常に学ぶ事のできる喜びを感謝せずにいられません。単なる配本に終わらぬよう、ポピー学習法が地域にしっかりと根をはった、しっかりしたものにつつまよう、今日もポピーとともに歩みます。

励ましの言葉と共に



三好 磨 智 子

(南予支部)

「ごめん下さい、〇〇さん、ポピーってご存じですか。」

「子どもさんの家庭学習には何をお使いですか。」

こんな言葉をかけながら、自転車でごまをまわって歩くようになってから、もう4年目を迎えました。我が家のポピーっ子も巣立って高校生になりました。毎月200名余りの子どもたちが待っていて、止めたくても止められません。「ポピーのおばちゃん」「ポピーのおばちゃんとはあそこよ」などと、私の家を人におしえたり、声をかけたりしてくれます。自転車の荷台に箱をつけて走っていると、「おばちゃん、ポピーまだ?」「もう終わったよ」もうすぐ持っていくから待っていてね、自転車のペダルをふむ足に力が入ります。

家庭学習、それは家庭の顔の面も含めて大変むずかしい事です、小、中学校では特に勉強するのは学校、家庭ではおさらい、復習をすると言うことを基本の考えとしてもっております。その復習の教材としては、ポピーがすぐれていると言うことを私は子どもに使わせた経験から自信をもって言えます。ポピーを持って歩きながら、これを最高の復習の教材として無駄なく活用していただくために、より適切なアドバイスなり、説明なりをする必要があります。明日の学校での勉強は、今日教わった所の復習にかかっており、今日の勉強がどれだけ身について

いるかと言うことを自分で知る必要があります。あまり理解していなかった事の勉強は、自分でやっていけるようなシステムになっているこのポピーのよさ。

それを、小学生は母親に、中学生は本人に説明します。ポピー学習をはじめて4年目、3年目の人も多く、

「毎日机に向かうことが出来るようになったのは、このポピーのおかげです。次のポピーがもう来る頃よ、と言うとあわててやる時もあります。」

「学校で担任の先生から、〇〇君はこの頃よく来ますが塾へ行かしているのですか、と聞かれたので、ポピーを使っていると話したのですが、これを紹介してもらってなかったら、きっと迷いながら塾に行かせていたでしょう。」

等々、ポピー学習のずっと続けている方は殆どが良い結果が得られたことを喜んで話されます。それには、やはりお母さんのたゆまないはげましの言葉や、子どもを陰ながら見守っていただく目の注がれていることが、短い会話の中からもひしひしと感じられました。

ある時、5年生の男の子の居る家庭へ、配本に伺いました。私の手からポピーをもぎとるようにして袋の中に手をつこんで「あった!!」と大きな歓声。取り出したのは、はさみ込まれていた物語りの本「こころの文庫」でした。

お母さんに伺いますと、とても楽しみに待っているとのこと。この本を読んでしまわないと勉強が手につかないらしい。けれども本が入っていない時より楽しみもふえたからか学習もよくやり出したように思います、ということでした。また、ある中学生のお母さんは、

「毎月届けてもらうのが楽しみで、親子が読むのですよ。家には全集ものはたくさんあるのですが、この位のページ数が丁度手ごろで取りつきやすいですよ。」

とおっしゃる。小2の男の子のポピーを届けに行くと、お母さんが、「〇〇君、ポピーのおばちゃんよ」と奥へ声をかけられる。どうしたのかとおどろいていると、テストの成績がよくて先生にほめてもらった、それはポピーのおかげだから、おばちゃんにお礼を言いたい、と言っていたから……とのこと。顔を見せるのははてれくさいらしく襖のかけから、「おばちゃんありがとう」と声だけが聞えて来ました。

「これからもポピーのお勉強がんばってね」

モニターにとっては大変うれしい事です。子どもなりにポピーでおさらいをしていたから出来た、ということを実感として味わい、ほめてもらったこと

によって、またやりたいと言う意欲を起こしてくれることでしょう。先生方がいつも言われるように、がんばったね、よくやった、というはげまし、ほめる言葉は出しおしみをしてはいけないということのようです。

6年の女の子のお母さんから、あまりやらないので次号から休ませてほしいと頼まれる。まだ2カ月しか使っていないのに、それから2、3日して電話があり、

「私の考え方が間違っていました。子どもがやらないから止めさせようと思ったのですが、良いと思ったら使わせるように努力することが大事なんです。ね、またおねがいします。」

このような連絡が入り、ずっと今も続いて使っておられます。また、中3の女の子のお母さんは、

「他の教材を使うからしばらく休んでほしい」ということでしたが、1カ月休んだ頃、「やはりポピーがそばにないとその日その日のおさらいに不安があり、また、二つの教材を同時に与えると先にやるのはポピーです。取りつきやすいのでしょうか」

とおっしゃる。この方は3年間ポピーを使っているのです。とにかくまわっていくと色々な質問にぶつかり、苦労話を聞かされます。それはまた次の訪問先への私のよいアドバイスの資料として大切にしております。

家庭をまわっていきますと、良い感じで迎えていただく人ばかりではなく、つらい事にも度々ぶつかります。それは、近ごろ、あまりにもセールス（家庭への訪問販売）が多いこと、中でも家庭学習の教材販売が高い比率を占めているためであるように思われます。それを選択するお母さん方も大変だろうと思われます。

「みんな同じようなものだから、何を使っても同じですよ。」

何の説明もしないうちにこんな言葉が返って来る。このような中で、ポピーのよさ、特徴をよく知っていただき、一人でも多く使って喜んでいただくために、私はポピーと共に自転車で旅をするつもりです。

働くお母さんに代って



波部 信子

(北大阪支部)

全家研のモニターとして活動しだしてから、はや2年、やっと最近仕事のコツが呑みこめて来たよう

です。

月末にどっさりポピーの本が届くと、気が重く、少々憂うつなのですが、分けけた本を自転車の荷台に積み込んで、「えい」と出発すると、もう落ちてくるものです。

「こんにちわ。ポピーでございます。」

と玄関の戸に手を掛けた時は、もう、いつものわたしてではなくて、全く別の全家研のモニターの顔になっているから不思議なものです。

ひと口に、配本・集金といっても、本を配って、「はい、さようなら」と、いうわけには行きません。すなわち、対話業務が大切なので、これに時間をとられ、「ああ、もう、こんな時間だわ」と、はっとする事がしばしばです。会員さんの子供を励まし、母親にもアドバイスということになると、時間がいくらあっても足りない、といっても過言ではないぐらいです。

以下、対話業務で感じたことを述べますと、まず子供という者は、母親のちょっとした心配りや、介添えが、その子の毎日の学習の習慣づくりに、とても大切だということです。特に、幼児、低学年では、母親べったりではいけないけれど、俗にいう、付かず離れず、という程度に、見守ってやらなければいけないと思います。たとえば、Aさんの家では、三人の小学生の姉妹が、夜7時半からポピータイムと称して、母親の指導のもとに、ポピー学習を揃ってやることを習慣づけておられます。こんなお宅へ伺った時は、わたくしの方が種々、勉強させていただくことになります。

しかし、中には、「ポピーをあまりやりません」とか、「最近、宿題が多くなって、ポピーをする時間がありません」などと言われる家庭もあります。これも、同じ組の子でありながら、宿題はたいしたことはないという子と、宿題が多すぎるという子があり、子供によって、要領よく宿題を片付ける子と、のろのろといつまでも宿題に追われる子といろいろなのです。

また最近、共働きの家庭がふえ、わたくしが尋ねても、子供はボーッとテレビを見ているといった場面に出くわします。そこで、自発的に子供がポピー学習をするようになるには、どうすればよいだろうかと思案し、週に一度、我が家でポピー教室なるものを開くことにしました。

すると今まであまりポピーをしなかった子供が、わたくしの家へ来ると一生懸命やり出すといったことが見られるようになりました。

モニターがそこまでしなくても言う方もあるようですが、やはり励まして、ほめてやる母親がいな

い場合、わたくしがその代理をしてあげれば……とそんな気持ちからです。低学年の理科のあぶら菜を勉強した時など、裏庭からあぶら菜を抜いて来て一緒に勉強したり、たまたまそばにいた1年上の子が、「それなら、去年習ったよ」と、教えてくれたりして、とても楽しい勉強になることもあります。わたくしも我が子には、なかなかこうはいかないのですが、他人様の子供さんには、一オクターブおくせいか、意外と感情的にならずにやれるのです。

でも、あくまでも、子供たちには、本来は自宅でやるべき自主学習であることを説き聞かせ、少し馴れば、少しずつ家でやってくるように指導しております。

つぎに、常々思うことですが、最近の現代っ子たちは、「自分のせいじゃなくて、人のせいで勉強しているのではないか」ということです。人がやるから、お母ちゃんが見てくれるから勉強する。そんな事を感じて、ふっと淋しく思う時があります。

また、学校の授業の進度が早い。特に、算数が盛り沢山で、まるで、一品料理が次々と皿に盛りられて運ばれてくるように、今、 π を使った式を習っているかと思うと、もう立体について、表面積や体積の出し方をやり、それをマスターするかしないかの内に、割合に移るといった具合に、消化しきれぬ内に、次々と料理が運ばれてくるので、子供達は、少し前に習った事をもう忘れていたと聞いたことをよく聞きます。わたくしも、我が子を通して、同じことを感じておりました。

そこで、学校の先生に、もう少し、じっくりと時間をかけて教えていただけたらと思うのです。とともに、ポピーの学習で、一つずつ、習ったところを復習して、押えてゆくことがいかに大切かという点を会員さんに話して、理解してもらっております。

また、ある会員さんから、国語の読みの全く出来ない我が子に、毎日、教科書2～3頁ずつ読ませ、それを昼間、働きにいらっている留守に、テープに吹き込ませておく。帰ればそれを掛けて聞いてやり、おかしき点を指摘して聞かせ、もう一度読み直させることを習慣にしている、といった話をお聞きして、感心しました。昼間、働いておられても、この会員さんのように、母親の指導一つで、どうにでもなるのだということを知りました。

ポピー教室を開いてから、ただ本を渡してお金を受け取るばかりでなく、それをやりこなしているか否か……そこまで責任をもってくれる人、ということで、わたくしに対する会員さんの信頼をいただいているように思います。

二十年後の日本を



池上さち子

(名城支部)

ポピーが、毎月届けられる度に、私はとても楽しみにしているものがあります。「ポピー教育日本新聞」の平澤先生のお言葉なのです。毎月心打つ語りかけが、私の励みとなって、

「さあ今月も元気で、皆様にお届けしよう」

と思います。ポピーを手にしていない子も、ポピーを未だ知らない子も同じ様に慈しみ、声かけて下さる愛が紙面にあふれています。お目にかかった事も御座居ませんが、先生のお人柄が私達の心の底まで伝わって来て大きな力を与えて下さいます。

私がポピーモニターに参加したのは、もう2年ほど前です。対話主事の井上先生のお話を聞きまして、自分からモニターになりたいと言いました。中身の大きい、そして母親である私自身が勉強して行ける仕事、二人の男の子のいい接点があって、子と共に伸びてゆける仕事、これこそポピーモニター以外にないと考えて始めさせていただきました。結婚以来働いたことの無い私が、よその家のドアを叩いてポピーを紹介してゆくことは、とても勇気が必要でした。難しくてやれそうも無いと溜息をついていたら、主人が、「努力してみろよ」と、諭してくれました。また所属している名城支部の方々が、いつも暖かく啓発して下さいるので、どうか続けてこられたのです。4年生の長男も、「お母さん、いい仕事があってよかったね。がんばってね」と毎月声かけてくれるのです。

毎月ポピーをお届けしながら、会員さんを励ましている私自身が、反対に励まされて、一生懸命自転車のペダルを踏んでいるのです。「うちの子はよく出来るから、いらないわ」と言われるのを「1カ月だけでも」とお願いしてもう2年近くも続けて下さる方もいらっしやいます。「おたくさんも、もう2年になりますね」といいますと「本当にポピーは、中身に無理がないので、いやがらないでやってくれるわ」と答えて下さる。

また別な会員さんに、「がんばってね」と、声かけますと、「貴女のアドバイスで続けてこれたのよ」と言って下さる方、私は、この時この仕事が少し実って来た様な喜びを味わうのです。パートに行っているお母さんには、「お仕事 御苦労様、でもがんばってポピーをやらせてあげてね」と言葉を添える様

に心掛けています。どうしてもパートで働いているお母さんは疲れて余裕がないので、お子さんにまで手が回らないままになりがちですから。ポピーと全く同じ問題が試験に出て、「やっていなくて残念だったわ」とか「ぼっちゃりだったわ」とか嬉しい声もきかれます。

私はポピーを通して、一人一人個性の違う会員さんの方々にお願い出来て、お話を聞くことによって、私自身が教えられ、高められてゆけることが、モニターとして一番やりがいのある部分だと考えています。それはとても難しい、裏をかえせば、教育奉仕者として会員さんより一段上に立っているようにみられがちなので、驕った自分にならない様に、会員さんの悩みをいつでも気持ちよく聞いてあげる、聞き上手になってゆける様つとめたいのです。暖い気持ちのモニターさん——これが私の理想です。ポピーのよさを、一人でも多くのお子さん、お母さんに理解していただくためにも、3年目にむかうこれからの道は、難しいと考えています。「やれそうもない」と言ってポピーをやめていった退会者の声は、モニターとして、重要な部分だと思います。私の力の無さと勉強不足のために、そのお子さんのいい素材が突らぬ前に埋まってしまうのかもしれないという、心からの反省もしているのです。私の助言の足りなさとお母さんを奮起させることの難しさもいつも思うのです。その反省を、これからの道に生かすことこそモニターの使命だと考えています。

我が家の二人の男の子にもポピーを学ばせています。それを学習する子供達のやる気は、母の私の力に影響されると言うてよいでしょう。机に向いたくないという気持は、私自身の姿だと思うことが、しばしばです。

家庭教育とは、誠実な人間の心の積み重ねを子に伝えて行く手づくりだと私は考えています。私は、手づくりという言葉がとても好きです。素直に育んでいかないと型は崩れてゆくでしょう。近視的な見方をして、あわてて諦めてしまうと、その努力も実らないままに、消えてゆくでしょう。その時その時を精一杯、生きてゆく母の姿、母親の手のぬくもりが子に伝わって、明るい信頼が生れて来たら、子供達は自ら進んで歩きはじめることでしょう。私はその努力の汗をモニターの仕事に求めてゆける様これからも努力したいと思います。

毎月一回催されるモニター会も大事な行事だと思います。対話主宰先生のお話、モニターを教育して下さる講演会があり、素晴らしいモニターさんに出逢える日でもあるのです。

全家研運動に毎月参加出来、諸先生の講演を聞く

度に、これは私の肉と血になっているのだと思うと心から感謝致します。そして、聞いたお話を機会ある度に、会員さんに伝えて来ました。国語と算数の勉強の仕方の違い等は、とてもよい参考になり、我が子だけに適応させて喜ぶ様な近視的な考えでなく、広く会員さんに伝えて来ました。少しでも、お子さんをお持ちの方々によりアドバイスが出来る様心から願っています。これからも、このやりがいのあるポピーモニターの仕事を長く続けて行きたいと思えます。長く続けてよかったと、その苦労を喜びにかえることが出来る年輪を積み上げて行きたいのです。20年後には日本国内はもとより、世界に羽ばたく人が今よりはるかに多くなるといわれています。その時に、いかなる国の人々にも通用する柔らかな頭と、人一倍温かい心と、丈夫な身体をもつ、そんなポピー子を育てる。私は今そんな気持ちでお手伝いさせて頂いています。

これからもたくさんモニターさんと共に、世界に羽ばたく子のために頑張りたいと思っています。

良きモニターをめざして



池 満 久 代

(鹿儿島支部)

わたくしは、モニターの仕事を始めて、まだ8カ月余りしか経っていませんが、日の経つにつれて、全家研の良さ、ポピー学習の良さを感じています。我が家の長男が、2年生の時に入会して2年余り、実のところ、最初は、毎月完全に終らせる月が少ない位でしたが、だんだん学習がむずかしくなるにつれ、親も子も真剣にポピーに取り組むようになり、やがて主人もポピーの良さにひきつけられるようになりました。そして、いつの日か、長男と主人が男と男の約束をしたらしいのです。それは「ポピーを毎日一枚づつして、居間のテーブルの上に置いときなさい。どんなにお父さんが、会社から遅く帰ってきて、調べておいてやるからがんばろう。」ということだったらしいのです。それから二人共、約束を忠実に守り、一枚、またある時は二枚と、毎晩ポピーがテーブルの上であり、それが次の朝は、採点されて置かれてあるというのが続きました。むずかしいのによくできたとか、字がとてもきれいな、これからはがんばりなさいとか、ひとこと主人が、赤鉛筆で付け加えると、それが励みになり、ますますがんばったようです。ちょうどこうしてがんばっている頃、普及部長さんからモニターをすすめられ、主

人に相談したところ、内容がとてもよいから、がんばってみたいという言葉が返ってきて、モニターを引き受ける事になりました。長男がしているポピーを片手に、二歳になる次男を乳母車に乗せ、先ず長男と同じ学年のお母さんから、お話を始めました。

幸い、わたくしの住んでいる地域は、小さな町です。家がまとまっているうえに教育に熱心な人が多いので、話がしやすかったです。

「セールスマンの方がいらっしょると、話もろくに聞かずに断わるけど、奥さんのお話を聞いていると、なるほど良さそう。自分の子どもは勿論、お友達にも話してみるから。」

と言われ、次から次に会員さんが増えるようになりました。ある日、玄関のチャイムがなるので、出てみると、5年生の会員さんが、お友達と一緒に立っていて、「おばちゃん、この人のポピーを注文して。」と言うのです。

このように会員さんから会員さんへの小さな輪が広がり、今では110名になりました。スーパーで、「ポピーのおばちゃん。」と幼ポの会員さんに声をかけられたり、わたくしより体の大きな5年生や6年生の男の子に、あちこちで声をかけられると、会員さん全部が、我が子のような気がしてなりません。

中学生の会員のお母さんが、

「英語の塾に行っていないで、初めとても心配だったけど、塾に行っている子より英語の点数がよかったですよ。わたしは店番をしながら、ポピー新聞を読むのが楽しみなんです。」

と言われました。4月から入会された4年生の男の子のお母さんから、ある日お電話をいただきました。全然ポピーをしないからやめたいとおっしゃるのです。丁度小集会を予定しているところでしたので、

「奥さん、ちょっと待ってください。やめる事は簡単ですけど、続けているうちに、いつかよかったという喜びを親子で味わえる日がきますよ。小集会を夏休みに入ってすぐ開きますから、子どもさんと一緒に先生のお話を聞いて、夏休みに頑張ってみられたら。」

と話したのでした。小集会の日に待っても、待ってもその親子の姿がみえないのです。きっと急用ができたのだらうと思い、二、三日後に配本にお伺いしましたら、下の子どもさんが熱が出て行けなかったとのことでした。この奥さんは、電器器具の小さな部品づくりの内職をしていらっしょって、自分の仕事のことだけつい考えてしまい、子どもには、勉強しなさいと口癖のように言うだけだとおっしゃるのです。別に内職をしなければ困るということでも

ないのに、良く考えてみたら、親の身勝手に子どもをダメにしているような気がして。子どもはこれから将来のある身なのに、しかも一番大事な基礎を習っている時に、親が見てもやらずにほったらかしにしていると、取り返しのつかない事になってしまうのではないかと考えるようになったと言われるのです。わたくしが、

「奥さん、内職をやめてしまう必要はないから、30分でもいいので、お母さんが家庭教師になって、子どもさんと一緒に勉強されたらどうですか。」

とお話したら、夏休みに一緒に勉強してみようと言われ、更にわたくしたちも子どもに言うだけでなくて、自分自身もすすんで勉強しなくてはいけませんねと言われました。この会員さんが親子で充実した夏休みを過ごされるとよいのですが、と念じています。

二回目の小集会を7月22日に信用金庫の会議室で開くことが出来ました。夏休みに入ってすぐだし、計画をたてるのにも都合が良いだろうということで、4年生以上は親子で、3年生以下はお母さんだけで、会員さん全部に声をかけたところ、子どもが42名、お母さんが25名と予想以上の出席で、あわてて椅子を持ち込んだりの騒ぎでした。二時間という決められた時間は、とても短かく、時間がもう少し欲しい気がしました。その日に配本して、二、三日後に集金にお伺いしたら、6年生の男の子のお母さんが、「前田先生のお話がとても素晴しかった。あのようなお話は毎月でも聞きたいですね。他の問題集は売りっぱなしだけど、全家研は素晴らしいですね。ますます好きになってしまいました。先生に逢われたらよろしくお伝えください。」との事で、自分のことをほめられたような気がして嬉しくなりました。

- 子どもは、よい環境の中で、よい教育を受けることによってこそ人間となることが出来る。
- 子どもの、最高にして最初の教師は母親である。
- 最高にして最初の教育場所は家庭である。
- 子どもの、生涯への性格づくりは家庭で、特に母親によってなされる。
- 家庭教育は、人間として「いのち」を与える仕事、人類の運命をつくる仕事で、尊く偉大な事業である。

というお話を聞いて母親としての勇気と自尊心がわき、いっそうの責任を感じることでした。そして、我が子だけでなく、少しでも多くの子もたちを、全家研の趣旨に基づいて健全に育てなければならぬと痛感し、全家研のモニターとしてもいよいよ自信と誇りをもって普及拡大に精進しなければならぬと思います。

会員の和を求めて



中村比沙子

(川崎支部)

ポピーと私との最初の出合いは、神戸でした。今までの問題集にはないものを持った、ユニークな教材として、親子して気に入って、毎月届けて頂いておりました。が、しばらくして、転勤のため川崎に移り、まだ西も東もわからない頃、新聞で再びポピーにめぐり逢いました。さっそく東京本部へお電話致しましたところ、川崎支部より、すぐにポピーが届けられ、その手際のよさといい、親切な対応に接し、誰も知らない土地で、知人に会ったような嬉しさを覚えたものでした。

それから、間もなくモニターのお仕事までもお引受けすることになり、まず最初に支部より頂いた会員手帖の中に、

「全家研の祈りそれは家庭教育の確立から。家庭教育には人づくりと学習の面があり、子供の人づくり、それは、人間としての基礎的な性格をつくり上げること、それには、真面目さ、遅しさ、思いやり、感謝の心、すなわち誠実さを身につけさせること。」

もう一つは学習の面――。

「子供には誰にでも無限の可能性があり、安易に出来る子、出来ない子などと区別せず、あくまで、やれば遅い早いの違いはあれ必ず出来る。それには親がまずスタートで子供が新しい覚悟とか、希望などを持ち、自ら進んでやるよう一人一人の事情に応じ工夫してやらねばならない。そこで、家庭学習をさせる一つの手段として、一人でも多くの方々にポピー学習を知って頂くためのお手伝いをするのが、モニターのお仕事である」と……このモニターの重責を思う時、家庭生活にどっぷりつかって十数年、子供中心の生活に慣れ、井の中の蛙になりかけていた私に、このようなお仕事が出来るだろうか、不安で一杯でした。

が、まず我が家の家庭教育は……と見つめ直した時、まだ――まだ全家研の祈りにはほど遠く、親である私自身の至らなさが、目につき、とにかく自分自身をみがくためにも、モニターになり勉強させて頂きながら、会員の方々と、共に歩いていこうと決心し、はや、三年目を迎えています。

会員数も390名を越し、一人では充分な管理がおぼつかなくなり、会員の方々の中から地域ごとに、新しいモニターになって頂き、配本を分散致しまし

た。それにあたり、初めて会員になっていただいた方、気の合った会員のお母様方と、逢えなくなる淋しさがありませんでしたが、思いきって手放した現在、私一人では、とても望めないポピー会員の和が一段と大きく広がりました。折しも支部の普及月間と教育対話推進月間とも重なり、新しいモニターさん達の活躍が目立ち良い成績を挙げることが出来ました。一人より二人、二人より三人、と、……モニターの数に比例して、ポピーの和が広がり、地域のポピーの密度が濃くなることを改めて知らされ、ポピー会員の和を広げると共に、モニターの和を広げることが、モニターのより大きな役目ではないかと思うこのごろです。

しかし、ここまで来る間には、いろいろな事がありました。最初の頃は、一部の普及にも苦勞し、不安と自信のなさが相手に伝わるのか、充分意をつくすことが出来ず、失敗に終わったことが幾度か。玄関先で断られることも度々、時には挫けそうになったり、みじめな思いをしたことも……。しかし、引越して来たばかりの私には、この土地に知人が全くなく、知人をたよってなどと云うことが出来ない状態の中で、勇気を奮い起し、玄関のチャイムを鳴らし、私の話を聞き、ポピーの良さを理解し入会してもらった時の嬉しさは格別のものがありました。また時には趣味の同じ方に出会ったり、同年代の子供を持つ方に出会い、話がはずんだり、外国帰りの方からは海外の教育現状などを聞かされ、日本のそれとあまりのギャップに、口をそろえて、大変だと、最初はポピーどころではない、まず正しい日本語をマスターすることから入って行かなければと、おっしゃっていた方も、今では、ポピーをこなせるまでになりましたと喜んで頂き、お子様も日本語が上手に話せるようになり、「ポピーのおばさん」と呼んでくれるまでになりました。このような時、普及に歩いて良かったと、モニターとしての喜びを感じるひとときです。

最近川崎市の小中学校別のポピー普及部数を支部で地図に表され報告を受けた時、一瞬その数の低さに驚きました。これではいけないと、ブロックの人達と話し合い、まず自分の担当区域の学校からモニター同志協力し合い、支部の方々の助けを得ながら、学校でのチラシまきをやり、徐々に効果が上って来ました。

このようなさまざまな経験の積み重ねが、次第次第に、私の自信となって現在を迎えることが出来たのだと思います。

しかしこれは、私ひとりの力ではありません。私達の支部では毎月2回のモニター会議が開かれます。

第1回は月初めに、ブロック長会議、第2回はモニター全体会議、これには全員のモニターが出席し、支部長、普及部長はじめ、教育対話主事の先生方のお話や、アドバイス、各モニターの体験談、会員の悩み、塾との関係、退会者への対策、等々、経験にもとづいた報告がなされ、この2回の会議に出席することにより、他のモニターの経験に共鳴したり、反省したり、そのつどボビーに関する新しい知識を吸収出来たこと、それに先生のお一人が作って下さる当月号のボビー小1から小6までの特に重要な点を詳しく書き出した「〇月号の留意点」これにより配本の時お母様方に、今月はこの事に気を付けて、とか、ここが重要ですからと、ひと言助言出来る喜び、もう一人の先生は、毎月1回「つくしんぼう」というモニター会議の資料を出して下さいます。それも今では14号にもなり、私達モニターはそれを読むのが楽しみのひとつでもあります。それには今月

の話題とか、教育名言集などの他、毎月メインテーマをきめ、

1. やる気を育てるボビー学習
1. 母親ボビー教室
1. 心のモヤシッ子にしたのは誰か
1. 母親はすぐれた演出家でありたい
1. 実行出来る学習計画表を作る

等々きりがありませんが、毎月書いて下さるこれらの内容がモニターの心となり、知識となって各会員の方々にも伝わり、モニターの大きな自信となっています。それに支部長はじめ普及部長の暖かい励ましを受け、周囲の人々に助けられ、ただの配本だけに終らず、会員への良きアドバイザーとして、これからもモニター同志手を取り合って前進したいと思います。9月には第3回目の井上先生の講演会も予定され、会員共々その日を待っています。